# Hololive SEED DESTINY―止まらない運命―

疲れた斬月

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

メサイア攻防戦で死闘を繰り広げるシン・アスカとアスラン・ザラ。

戦いの最中、シンの心の悲鳴を聞いたアスランは、彼と向き合う事無く道を違えてしまった己の罪に苦悩する。

そして、狂気の攻撃がシンとアスランを貫き、２人はこの世を去った…筈だった。

…と、長々と前振りを書いてみましたが、要するにシンとアスランがホロライブの世界で暮らすだけのお話です。

ギャグ３、日常３、ラブコメ４ぐらいの割合で書いて行くので過度な期待はしないで下さいませ。

転生しても戦いに巻き込まれる事多いからこういう平和なのもアリだよね？

因みに作者はシン厨です。

キラとアスランも好きではありますが、俗に言う「ただしラクス、テメーはダメだ」状態なので扱いには差が出てしまうかと思います。

その辺りをご理解とご了承の上お読み下さい。

追記：ｉ／２２より特別編『Ｅｐｉｓｏｄｅ　ｏｆ　Ｍｅｌ～Ｒｅ：ｓｔａｒｔ～』連載開始

# 目次


プロローグ ―――――――――――――――― 1
設定紹介 ―――――――――――――――― 12
第１話「異世界転生って誰が考えたんだろうね」 ―――――― 15
第２話「石田さんごめんなさい」 ―――――――――――― 28
第３話「黒髭危機一髪は飛ばしたヤツの勝ちらしい」 ―――― 33
第４話「ドッキリにも限度がある」 ―――――――――――― 42
第５話「薬と毒は紙一重」 ―――――――――――――― 52
第６話「想像力はガンプラを通じて培われる」 ―――――― 61
第７話「説明書はちゃんと読みましょう」 ―――――――― 67
第８話「泳ぐ時は水着を流されない様注意しろ」 ―――――― 77
第９話「火薬に火を点けなければ花火は上がらない」 ―――― 82
第１０話「誕生日は大人になるとそんなに特別な日でもなくなる」 ―――――――――――――――― 90
第１１話「結局、何故風呂上がりにはコーヒー牛乳なんだろうか」 106
第１２話「ハロウィンでは騒ぎ過ぎない様にしましょう」 ―― 116
第１３話「石田彰の中ではアスランは３１位で犬より下らしい」 123
第１４話「サンタクロースって本当にいるらしいね、プレゼント配ってるかどうかは別として」 ―――――――――――― 128
第１５話「現実のバレンタインも血のバレンタインである」 136
第１６話「オンドゥルルラギッタンディスカ」 ―――――― 145

第１７話「興味持ったＶｔｕｂｅｒを調べたらとっくに引退してたって事、まぁまぁあるよね」――――――――――――――152
第１８話「旅行先で知り合いと出会った時の気まずい雰囲気、何とかならんか？」――――――――――――――160
第１９話「完成度が高いからって必ずしも未完成のものより優れてるとは限らない」――――――――――――――172
第２０話「新入りはできるだけ盛大に歓迎してあげましょう」182
Ｅｐｉｓｏｄｅ　ｏｆ　Ｍｅｌ～Ｒｅ：ｓｔａｒｔ～
第２２話「終わりの後には、新しい始まりがある」――――――188
第２３話「幾らリアルなシミュレーションでもゲームは結局ゲーム」――――――196
第２４話「入学式のおめでたい空気は翌日には消える」――――――202
第２５話「レーサーでもジェットコースターは怖い」――――――207
第２６話「休むのも仕事の内、これは法律でも決まっている」213
第２７話「親しき仲にも礼儀ありとは言うが、遠慮しすぎるのも友情を壊す原因となる」――――――219
第２８話「始まりは突然、旅立ちは必然」――――――226
第２９話「旅立ちの前に心残りは無くしておけ」――――――233
第３０話「デビューウィンというのは中々上手く飾れるものではない」――――――242
第３１話「シーズン中無勝でも獲ろうと思えばチャンピオンは獲れる事がある」――――――253
番外編

番外編1話「初配信では間違ってもパソコンを叩いてはいけません」 ―― 268
明けぬ夜 ―― 273

# プロローグ

C．E７４。

地球へのユニウスセブン落下事件【ブレイク・ザ・ワールド】を引き金に始まった２度目の大戦は、プラント最高評議会議長【ギルバート・デュランダル】が提唱した政策【デスティニープラン】を巡る戦いを以て決着の時を迎えようとしていた。

決められた運命を選び、平和な明日を求めて戦うザフト。

約束された平和を捨て、自由な明日を求めて戦うオーブ。

無数の戦艦やＭＳが飛び交う中で、巨大な翼を背負った白灰色のＭＳと深紅のＭＳが死闘を繰り広げていた。

『シン、止めろ！そんな物を護って戦うんじゃない!!』

強制的に繋げられる通信。

モニターの向こうから見慣れた男…【アスラン・ザラ】が叫ぶ。

悲痛な表情で叫ぶアスランへの返答代わりに、白灰色のＭＳ【デスティニー】のコックピットに座る少年…【シン・アスカ】は背部にマウントされたビーム砲を跳ね上げ、トリガーを引いた。

『くッ…！』

ロックオンされた事を警告するアラートに突き動かされるままにアスランは自身の乗機【∞ジャスティス】を操作し、放たれたビームを紙一重で躱す。

「護るさ…護ってみせる…そして、終わらせる…！」

折り畳み式の長刀【アロンダイト・ビームソード】を抜刀し、デスティニーが赤い光の翼を広げる。

「その為に…あんたを討つ!!」

白い残像を引きながら、デスティニーが稲妻の如く駆け抜ける。

『シン…！』

振り下ろされたデスティニーの一閃を、シールドで受け止める。

ビームシールドと実体シールドの二重防御の盾は、近接格闘兵器の

中でも最強の破壊力を誇るデスティニーの長刀による攻撃を辛うじて防ぎ切った。
『もう止めろ！お前が今護っている物が何なのか…わかっているのか!?後ろにある物をよく見ろ!!』
デスティニーの後方…月面に建造された大規模光学兵器【レクイエム】がある。
『あれは国でも人でもない…従わない者を焼き尽くす為の兵器なんだぞ!!』
「黙れよ！裏切り者のくせに!!」
気付いた時には怒鳴り返していた。
…裏切り者の言葉になど、耳を傾けるべきではない筈なのに。
道を違える前の頃に戻ったかの様に、シンは言葉をぶつけて行った。
――俺が護ってる物？
そんな事、俺にだってわかってる。
あんな物の為に…一体どれだけの人が犠牲になった事か。
でも…それでも…！
「あれは戦争の無い世界を創る為に…デスティニープランを成功させる為に必要な力だ！だから…だからオーブは撃たなきゃならないんだ!!」
『なッ…!?』
次の標的がオーブである事を確信すると同時に、シンの言葉にアスランは愕然とする。
オーブには、まだ彼が住んでいた頃の友達だっている筈だ。
「戦争で…人の生命を弄ぶ連中がいて…！こんな世界はもう終わらせるべきなんだ！変わらなきゃいけないんだよ!!」
『ふざけるな！その為にオーブの国民には犠牲になれと言うのか!?そうやって全てを壊す、未来も殺す…お前が欲しかったのは、本当にそんな世界か!?そんな力なのか!?』
「俺だって…自分の力で全てを護りたかった！だけど…俺が討ってるのは敵じゃないって…討つのは奪う事だって…！力で解決できる事

なんか何も無いって!!
俺にそう言ったのはあんたじゃないか!!!」
『…!』
その言葉に、一瞬アスランの心が揺らいだ。
デスティニーの片手斬りが∞ジャスティスを弾き飛ばした。
大きく崩されたバランスを建て直すアスランだったが、既に目の前には長刀を構えたデスティニーが迫っていた。
慌ててステップで回避を試みるが、デスティニーの一閃が僅かに速く、ビームライフルを真っ二つに両断される。
『うぐッ…!』
反射的にシールドを構えてライフルの爆発から身を護ろうとするアスラン。
シンはアスランの視界がシールドによって遮られた一瞬の隙を突き、デスティニーを∞ジャスティスの背部へと回り込ませる。
「できる様になったのは…こんな事ばっかりだッッ!!」
シールドを退かした頃には既にデスティニーは目の前から消え、後ろから頭部を鷲掴みにされる。
そして、デスティニーの掌に仕込まれたビーム砲【パルマフィオキーナ】が∞ジャスティスの頭部を握り潰した。

「(シン…俺はお前を絶望させていたのか!?)」
それは、曾て彼と仲間だった頃に贈った言葉の数々。
全ては、シンに自分と同じ過ちを犯して欲しくない、同じ苦しみを味わって欲しくない…それだけだった。
それだけだったのに…
「でも…議長とレイは…戦争の無い世界を創る為に、俺の力が必要だって言ってくれたんだ!だから…!」
デスティニーが再び長刀を構える。
「この力で全てを終わらせて…その先に平和な未来があるのなら俺は…俺はぁッ!!」

シンの激情の如く燃え上がる光の翼を広げ、デスティニーが∞ジャスティスに襲い掛かる。
――今度こそ終わらせる！
デスティニーの刃を∞ジャスティスに向けて振り下ろす。
――やれる！
そう思った次の瞬間、ある記憶がフラッシュバックする。
…それは、裏切ったアスランの撃墜を命じられた時の記憶。
手に甦るアスランを貫いた感触。
口の中を満たす、刺す様な苦味。
「ッ…！」
一瞬、∞ジャスティスの動きが速かった。
普段のシンからは考えられない程緩慢になった斬撃をあっさりと躱し、デスティニーの背後へ駆け抜けながらビームサーベルを一閃させる。
シンが我に返った頃には、既にデスティニーの長刀が半ばから叩き折られ、刀身が宙を舞っていた。
『諦めるな！こんな風に力を使ってしまったら…お前はその呪縛から永遠に逃れられなくなるんだぞ!!』
「…！」
『…お前は本当にそっくりだよ、昔の俺に』
「え…？」
伝説のエースと呼ばれたアスランの心情。
それを今、シンは初めて聞かされる。
『そうだ、俺もお前と同じなんだ…俺も曾て、母上を殺された憎しみに任せて戦いに身を投じた…だから、今お前が感じているその哀しみを、苦しみを…俺はよく知っているんだ!!』
全ての始まりとなった血のバレンタインで母を…
それが引き金となって始まった2年前の大戦で親友であるミゲル・アイマンやニコル・アマルフィを…
終戦間際では父を…
彼等が死んで逝く瞬間を、幾度と無く見て来た。

…今更伝えた所で、もう遅いのだろう。
それでも、伝えなければならない。
彼に自分と同じ過ちを犯させてはならない…！
『無力な自分を憎んで、闇雲に力を求めて…だが、その先には何も無いんだ！シン、お前の心も永遠に救われる事は無い！』
「アス…ラン…」
『だからお前も、過去に囚われたまま戦うのは止めろ！喪ったものにばかり目を向けてはダメだ！そんな事をしても…お前の未来まで潰してしまうだけで、何も戻りはしないんだ!!』

何も戻りはしない。
そんな事は、シンもとっくにわかり切っていた。
曾て、心を通わせた少女【ステラ・ルーシェ】の生命を奪った宿敵のＭＳ【フリーダム】を倒した時、シンの心は喜びと達成感で満ちていた。
心を蝕んでいた怒りと憎しみが漸く晴れたと。
だが、それもほんの一時だけ。
こんな事をしても…幾ら敵を倒しても…家族もステラも、既にこの世にはいない。
喪われた生命は、もう２度と戻っては来ない。
――――なら、俺は一体何の為に？
俺は…何が欲しかったんだ…？
『（過去があるから、明日を望む事ができる。同じ悲劇をもう繰り返さない様にな。だから、その明日をお前が護れ、シン。お前の力でな）』
ふと、親友である【レイ・ザ・バレル】の言葉が頭を過る。
真っ暗になりかけた視界が、再び開けて行く。
「…アスラン、あんたやっぱ凄いや」
『シン…？』
――――俺の家族は…死んで逝った大切な人達は、もう戻っては来ない。

「俺もあんたみたいに考えられたら…別の選択肢を選ぶ事もできたかもしれない」
　それでも…
「でも…デスティニープランがダメだって言うなら、他にどうすれば良いんだ？あんたの言う理想ってヤツで、戦争を終わらせられるのか？」
『！』
　否、だからこそ…！
「喪った過去を護るのは間違いなのか？未来を護る事だけが正義なのか？それって、俺自身が自分の意思で決めるべき事なんじゃないのか？」
『そ、それは…！』
「俺も俺なりに色々考えたんだ。何が正しいのか、どうすれば戦争は無くなるのかって」
　もう、２度と同じ哀しみを繰り返させない。
「でも…幾ら考えてもわからなかった。俺以外の誰かも、答えを持ってなかった」
　その為に！
「だから俺は議長の未来を信じて戦うんだ！俺を信じてくれる仲間の為に…俺達が戦争を終わらせてくれるって信じてる全ての人達の為に!!」
　もう…止まる訳にはいかない!!
『シン…！』
「あんたが正しいって言うのなら…俺に勝ってみせろ!!アスランッ!!」
　その言葉と同時に、デスティニーは両肩に装備されたビームブーメラン【フラッシュエッジⅡ】を投擲。
『ッ!!』
　一撃目のブーメランをシールドで弾き、二撃目を脚部の【グリフォン・ビームブレード】で蹴り上げる。
「うおおおおおおーーーーーッッ!!」

体勢を建て直した時には、既にデスティニーが目の前にいた。
突き出された掌底をシールドで防ごうとするが、シンがビームの出力を上げると、ビームシールド発生装置が破壊され、盾が爆散。
爆発に巻き込まれた∞ジャスティスの左腕の装甲が見事に吹き飛び、露になったフレームがスパークを上げていた。
しかしアスランは左腕のダメージに目もくれず、爆煙を目眩ましとして利用し、両手に携えたビームサーベルでデスティニーに斬り掛かる。
一方のシンも、アスランのその動きを読んでおり、デスティニーの両手のビーム砲を起動させて振り掛かるサーベルを真っ向から受け止めた。
『シィィィィィィィィインッ!!!』
「アアスラァァァァァァアンッ!!!」
∞ジャスティスの刃とデスティニーの掌が…2人の想いがぶつかり合う。
激しい閃光が炸裂し、宇宙の闇を白く焼き尽くす。
そして…
「!!」
デスティニーの両腕が、負荷に耐え切れずに爆散した。
――そんな…
俺は、負けるのか…?
戦争の無い世界を…平和な明日を護れないのか?
反射的に蹴りを繰り出すデスティニーだが、その一撃も∞ジャスティスの右脚の刃によってあっさり受け止められ、右脚を蹴り砕かれてしまう。
――負けた…。
その事実に呆然としながら、シンの意識はブラックアウトした。

「シン…」
墜ちて行くデスティニーを見詰めながら、アスランは消えてしまい

そうな声で相手の名を呟いた。
ギリギリの戦いだった。
実力も経験も、少しの要素で簡単にひっくり返されてしまう程度の差しか無く、1歩間違えれば自分の命は無かっただろう。
――何故俺は、相手を否定する事ばかり上手くなってしまうんだろう…？
結局、自分は曾て親友と殺し合ったあの頃から何も成長できていなかったのだと思い知らされる。
本当に理解して欲しい相手に中途半端な言葉ばかりを投げ付けて苦しめ、こうして殺し合いを始める。
そして、全てが手遅れという段階になってから、初めて過ちに気が付くのだ。
何より、シンよりも広い視野で世界を…色々な物を見る事ができていた筈だったにも関わらず、シンの問い掛けに何一つ答えを出せなかったその事実に、アスランは強い屈辱と絶望を覚えた。
――今更手遅れかもしれないが…。
話し合わなければ何もわかって貰えないし、何もわかってやれない。
墜落したデスティニーの側に∞ジャスティスを着陸させようと、操縦桿を動かそうとした…その時だった。

『お見事でした、アスラン様！後は我等が！』
「!?」
唐突に繋げられる通信。
周りを見回すと、オーブ軍のムラサメや、自分達反抗勢力のトップ【ラクス・クライン】の言葉で寝返った一部のザフト軍のザクやグフ、バビが、デスティニーと自分を囲む様に陣取っていた。
アスランの背筋を冷たいものが迸る。
「待て、一体何を考えている!?」
『この者は危険分子！生かしておけば、必ずや我等の障害になります

！』
『此処で消すべきです！』
『ラクス様に弓引く悪魔め！』
『カガリ様に逆らった罰だ！』
『デュランダルの番犬に裁きを！』
「あ…ああ…!!」
デスティニーに銃口を向けるＭＳの群れ。
仲間達の狂気を目にしたアスランは、己の眼前に広がる光景に恐怖すら覚えていた。
全身から嫌な汗が噴き出し、手足がガタガタと震える。
『『『『全ては、ラクス様の為に!!』』』』
『『『『カガリ様の為に!!』』』』
気味の悪い唱和と同時に、ＭＳの群れが引き金を引いた。
「やめろおおおおおおおおおおおおおおおーーーーッ!!!」
喉の奥から絶叫が迸る。
考えるより先に身体が動いた。
放たれたビームとデスティニーの間に∞ジャスティスを滑り込ませる。
しかし、余りに火線の数が多過ぎた。
ビームの多くが∞ジャスティスを素通りし、デスティニーに殺到する。
「シン…!!」
自身もビームに貫かれ、爆発の熱と衝撃波に晒され、それでも尚シンの名前を呼びながら、アスランの意識は闇に消えた。

都内某所、ビルの森の中。
表通りから少し離れたビルの１つから、眼鏡を掛けた女性が姿を現す。
「ふぁ～、寒っ…」
時刻は朝の６時。

空がにわかに明るくなって行く。
近場を軽く散歩しながら背筋を伸ばすと、身体の節々からポキポキと小気味良い音が鳴る。
徹夜明けの疲れた身体に、朝の冷えた空気が沁み渡るのを感じる。
「あ～、今日のスケジュール確認しなきゃ…」
眼鏡を掛け直し、濃紺色の髪をかき上げながらスマホを取り出すと、1件の通知が届いている事に気付く。
『Aちゃんおはよう！今日の放送、楽しみにしてるね！』
親友からのメッセージに女性…【友人A】は思わず表情を綻ばせながら返信を送る。
『ありがと、元気出たよ』
簡素なメッセージだが、感謝の意は十分伝わるだろう。
伊達に長年親友をやっている訳ではないのだ。
「…よし、今日も1日頑張りますか！」
気分転換の散歩を終え、ビルへ戻ろうとした所で…。

――――ドッゴオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!
「ヴェッ!?」
凄まじい轟音が響き渡り、地面がぐらぐらと揺れる。
慌てて音のした方へ走る。
其所には、全長１８ｍはあろうかという巨大な2機のロボットが眠っていた。
1機は両腕と右脚が朽ち果て、2枚1対の巨大な翼がひしゃげてしまっている。
もう1機は頭部が無く、左腕の装甲が吹き飛び、露になったフレームが焼けて痛々しい団子状になっている。
2機のロボットの下敷きになっているのは、今自分が出て来たビル…だった瓦礫の山。
「…何も見なかった」
騒ぎを聞きつけた野次馬達が群がって来る中、友人Aは遠い目で空

を仰ぎながらそう呟いた。

# 設定紹介

シン・アスカ

本作の主人公。

メサイア戦役の最中、アスランと死力を尽くした激闘の末に敗北。

身動きが取れなくなっていた所をオーブ軍とクライン派のＭＳ部隊にとどめを刺されて死亡…したかと思いきや、異世界に飛ばされ、ホロライブ初の男性Ｖｔｕｂｅｒとして活動する事に。

戦争やＣ．Ｅの呪縛から解放された事で心に余裕が生まれ、よく笑う様になった。

ＹＡＧＯＯの事は「ＹＡＧＯＯのおっさん」他のホロメンの事は「○○先輩」と呼んでいるが、ちょこやノエルの様に別の愛称があるホロメンの事はそっちで呼んでいる。

歌唱力はホロライブの中では中の上程度（ホロメンは約２名除き歌が上手い娘ばかりなのでこれでも充分上手い部類）だが、軍で培った身体能力を活かしたダンスはホロライブ随一であり、激しい振り付けをこなしながらでも殆ど音程やリズムをブレさせる事無く歌えるというかなりの強みを持つ。

因みに高校にも通っており、日本史と保健体育以外は１００点満点で成績は学年トップ（日本史も平均点以上は確実に取れており、保健体育も性教育からの出題が少ない時は良い点取れてる）。

部活はサッカー部だが、他の運動部の助っ人として試合に出る事も。

ヒロイン候補

（確定組）

ときのそら

夜空メル

癒月ちょこ

白銀ノエル

（予定）

アキ・ローゼンタール

大神ミオ
不知火フレア
雪花ラミィ
風真いろは
火威青
（他箱ヒロイン候補）
ニュイ・ソシエール
西園寺メアリ
周防パトラ

アスラン・ザラ
自分が撃墜したデスティニーにとどめを刺そうとした仲間の攻撃からシンを庇い、仲良く異世界転移。
ホロメンとＹＡＧＯＯに救出され、スタッフとして働く事に。
自分には見えず、シンにだけ見えていたものもあったという事実を知った事で、今度は「シンを正しく導く」という上から目線になるのではなく、飽くまで対等な立場の仲間として支えていきたいと考える様になった。
戦闘や機械関連以外のスペックはシンの方が高い事が判明し、特に歌唱力は致命的。
また、【機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ】のアニメを視聴した時にシン共々苦言を吐き出したが、「Ｃ．Ｅという世界を多角的に見るという意味ではまあまあ勉強になる部分もあった」と若干肯定的に捉えている所もある。
ホロメンからは「頼りにはなるけど何処か抜けてる兄ちゃん」みたいに思われており、恋愛対象としては余り見られてない。
ヒロイン候補
友人Ａ
春先のどか

デスティニー
∞ジャスティス
「嘗ての愛機を痛々しい姿のままにしておきたくはない」というシンの気持ちを汲み取った結果、描写はされていないが武装以外は完全に修復されている。
現在は何処かに封印されており、場所はシンとアスラン、そして封印作業に協力した一部のホロメン以外は「事務所からそんなに遠くない場所」という事以外誰も知らない。
作者も知らない（おい）

# 第1話「異世界転生って誰が考えたんだろうね」

「う…うぅ…」

微睡みの中にいたシンの意識がゆっくりと浮上して行く。

「そっか…俺、アスランに…」

月面に叩き付けられた衝撃のせいか、覚めてはいながらも今一ハッキリとしない意識の中、シンはその事実を心の中で何度も繰り返していた。

モニターがブラックアウトし、非常電源に切り替わったコックピットの中で、サブモニターを操作してデスティニーの状態を確認する。

――両腕及び右足を損失。

ハイパーデュートリオンエンジンに異常発生、出力低下。

メインスラスターに異常発生、飛行不能。

戦闘続行不能。

まともに戦える状態ではないのは言うまでもなかった。

しかし、今のシンにとってはどうでも良い事だった。

――負けた。

その事実だけがシンの心を占めていた。

全てを護る為に、戦争を終わらせる為に力を手に入れ、此処まで戦って来たのに。

あれだけの啖呵を切っておきながら、負けてしまった。

――アークエンジェルと交戦していたミネルバの皆は大丈夫だろうか。

ルナは無事に生きているだろうか。

レイはフリーダムに勝てただろうか。

色々な不安や疑問が頭の中に浮かぶが、すぐに消えてしまう。

今まで自分が信じていたもの、護ろうとしていたもの。

その全てが敗北した。

「…」

結局、アスランの方が正しかったのだろうか。

自分が間違っていたのだろうか。

自分なりに考えに考え、間違っているかもしれないという事も覚悟の上で戦いに挑んだのに…いざとなると、やはり受け入れるのが怖くなってしまった。
自分には、もう何も残されていない。
これからどうすれば良いのだろう？
そんな事を考えながら、狭いデスティニーのコックピットに身を沈めていた時だった。

――ギシッ。
「…？」
何かが軋む様な耳障りな音がした。
未だにハッキリしない頭を何とか回転させ、音の発生源を探ろうとする。
――ギシッ、ギシッ。
また音が鳴った。
しかも、どうやらかなり近いらしい。
――ギシッ！ギシッ！ギシッ！
ってかこの音、デスティニーから鳴ってないか!?
流石のシンも一気に意識がクリアになり、慌ててシートの下から拳銃を取り出して身構えるが、時既に遅し。
――バゴォォォォォン!!
凄まじい音と共に、デスティニーのハッチが開けられた。
「あ、人がいる！」
「大丈夫ですか～？」
開かれたハッチの外から白い光が差し込み、２人の女性が覗き込んでいる。
１人は胸周りしか隠していないリボン付きのコルセットに、下半身もこれまた腰周りしか隠していないショートパンツといったやたら露出の多い服を着た短い金髪の少女。
もう１人はまるで中世の世界から来た様な肩当てと胸当て、手甲を

身に付けた銀髪の女性。
彼女の手には形こそ歪んでいるが、たった今開けられたデスティニーのハッチが握られている。
――――え？
まさか、抉じ開けたのか？
呆気に取られていたシンだったが、そのまま立て続けに異変に気付く。
――――っていうかちょっと待て！
俺はさっきまで宇宙にいたんだぞ!?
何で人間がいるんだ!?
「そら先輩！ちょこ先生！人がいたよ～！」
愕然とするシンを尻目に、金髪の少女が誰かを呼びに向かう。
――――俺は恐らく撃墜された後、アスランか誰かに救出されて何処かのコロニーに運び込まれたのだろう。
シンは一先ずそう結論付ける事にした。
つくづく、自分の悪運の強さにうんざりする。
…だが、シンは気付いていなかった。
自分が今、想像を絶する状況に置かれているのだという事に。

「うわっ、本物のシン君だ！」
続けて現れたのは、長い茶髪に青いアイドル衣装の様な服を着た女性と、白衣を纏った長い金髪の女性。
「大丈夫？怪我は無い？」
「いや、その…」
白衣を着た女性の方がコックピットの中に入って来て容態を尋ねて来るのだが、シンはその女性から思わず目を逸らしてしまう。
それもその筈、白衣の下に纏われた彼女の服は、ピンク色の上着のボタンが臍の辺りまで開放されており、小さな蝙蝠の様なタトゥーが刻まれた豊満な乳房が半分以上も露になっている。
下半身は下半身で、彼女が穿いているスカートは太腿の付け根を辛

うじて隠せる程度の長さしか無く、黒いストッキングを止めるガーターベルトが丸見えで、何かを拾おうとしただけであっさり中の領域が覗けてしまうだろう。
　こんな目に猛毒な女性と狭いコックピットの中に押し込められた様な状態になれば、思春期真っ盛りのシンにはかなりキツいものがある。
　さっきの短い金髪の子も露出の多い服を着ていたが…まさか姉妹か？
　等と考え、極力彼女の身体を意識しない様にしていた所…ある物が目に入った。
「えっ…角？」
　そう、角である。
　金髪の女性の頭から、立派な2本の角が生えている。
　そこからトントン拍子で違和感に気付く。
「え、羽？ってか、これ…尻尾!?あ、あんた一体何なんだよ!?」
　よく見ると彼女の背中には蝙蝠の様な翼があり、腰の辺りからは黒い尻尾が生え、細長い脚に巻き付いている。
「言いたい事はわかるけど…一旦落ち着いて、とりあえず情報交換しましょ。外に出られる？」
「え、あ…は、はい」
　混乱の極みに達し、頭から煙を噴き始めたシンを角の生えた女性が宥め、外に出る様促す。
　シンも一先ずは外に出ても大丈夫な様なので、彼女に導かれるがまま、デスティニーのコックピットから這い出た。

「とりあえず…助けてくれてありがとうございました。俺はザｆ」
「シン・アスカ君だよね!?」
「え？は、はい…そうですけど…何で俺の事を？」
　シンが自分から身分を明かす前に、茶髪の女性が自分の正体を言い当ててしまう。

やたら目を輝かせているが…自分で考えるのも何だが、まさかファンだとでも言うのだろうか？
「実は…信じて貰えないと思うけどね？」
興奮している茶髪の女性の代わりに角の生えた女性が話し始めるが…その内容は、彼の常識の範疇を遥かに超えていた。
今自分がいるのはＣ．Ｅとは違う世界の【日本】という国であるという事。
自分は【ガンダム】というシリーズ作品の１つ【機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ】という作品の主人公であるという事。
今自分を救出してくれた４人の女性の内３人も別の世界から来ており、さらに短い金髪の少女は吸血鬼、角の生えた女性は悪魔だという事。
彼女達は動画サイトでの配信活動やアイドル活動を生業としている【Ｖｔｕｂｅｒ】と呼ばれる存在であり、魔界やら異世界やらから来ている者もいるという事。
青いアイドル衣装を纏い、清純な雰囲気を漂わせる茶髪の少女【ときのそら】。
幼女の様な可憐さと、それに相反する豊満な我が儘ボディが特徴的な金髪の吸血鬼【夜空メル】。
大人の色気を放つ白衣を纏った悪魔【癒月ちょこ】。
デスティニーのハッチを抉じ開け、引き千切るという離れ技をやってのけた色々とデカい女騎士【白銀ノエル】。
Ｖｔｕｂｅｒグループ【ホロライブプロダクション】のメンバーだそうだ。
「…まさか、今デスティニーの下敷きになってるのって」
「ウチの事務所だね」
メルの返答に絶望するシン。
戦争に敗れ、身寄りの無い状態で異世界に飛ばされたかと思いきや、いきなり多額の借金が追加だ。
――神様、あんたは俺に恨みでもあるのか？
「あ、弁償とかそういう事考えてるなら大丈夫よ？ウチの事務所、

しょっちゅう壊れるからこういう事慣れてるのよね」
「そうなんですか?・なら良かっｔいや良くないだろ!?しょっちゅう壊れるって何だよ!?」
　ちょこからの助け船に安堵の息を漏らすも束の間、とんでもない発言に思わずツッコミを炸裂させる。
　いやはや慣れって怖いね、などと暢気に談笑する４人だが、どんな日常送ってんだコイツらと叫びたくなる。
　弁償の事を考える必要が無くなったのは良いが、しょっちゅう事務所を壊される社長の身にもなれというものだ。
　こんな一癖も二癖もありそうな女性達を纏め上げる社長…一体どんな傑物なのやら。
「それはそうとして…別の世界に飛ばされて来たって、あれもですか？」
　そう言って、シンはデスティニーの側で横たわる鉄灰色の残骸…∞ジャスティスに目を向ける。
「あれ、シン君の仲間なの？」
「…元、ですけどね」
　ガンダムにあまり詳しくないメルの質問に、シンが少しぶっきらぼうに答える。
「乗ってるのってまさか…」
「…はい、アスラン・ザラです。多分コックピットの中で気絶してると思います」
　物憂げなそらの言葉にシンが続ける。
「おっしゃ!・団長が抉じ開けたる」
「んな事しなくて良いですよ!・コックピットの近くに緊急用の開閉スイッチある筈ですから!」
　一瞬でシリアスな空気を吹っ飛ばしたノエルにツッコミを入れながら、シンは他の４人と∞ジャスティスに近付いた。
「…ン…ラ…」

微睡む意識の中、微かに聞こえる声。
何処かで聞き覚えがある声だが、意識が覚醒し切っていない為か全く思い出せない。
――誰だ？
「…スラ…ア…」
――そうだ。
俺はシンを庇って、仲間に撃たれて…。
そうか、俺は死んだんだ。
この声は…お迎えとやらでも来たのだろうか？
「アスラン!!」
「ヘァァァァァァッ!!?」
大きな声で呼ばれて急激に意識が浮上し、奇声を発しながら飛び起きるアスラン。
「ったく、やっと起きた…」
「シン!?お前、生きて…って、俺もか!?それに、この状況は一体!?」
「あ～、説明するとちょっと面倒なんですけどね？」
目を覚ましたアスランに、シンはそら達から聞かされた話を説明した。
「にわかには信じがたいが…俺達がこうして生きているのがその証拠か。しかし、俺達がアニメーションやコミックの世界の住人だと!?」
「何ならシン君も知らない様なアスラン君の秘密も知ってるよ？」
「!?わ、わかった、信じよう。だから勘弁してくれ…」
あっけらかんと話すそらに、思わず冷や汗を流しながら要求する。
一方のシンは、まるで「折角アスランを弄り倒せるネタが手に入ると思ったのに」と言いたげな残念そうな表情を浮かべていた。

閑話休題(それはさておき)。
シンもアスランも、一先ず自分達が置かれている状況は理解できた。
ならば、次に考えるべき事は。

「それで…シン様とアスラン様はこれからどうするの？」
「…」
これから何をするか、である。
今までＭＳパイロットとして無数の戦場を駆け抜け、スーパーエース級の戦果をポンポン叩き出して来た２人だが、そんな彼等にとっても今置かれている状況はイレギュラー中のイレギュラーだ。
「この世界って、異世界から来てる人達も多いんですよね？ならその技術とかを使って、俺達を元の世界に戻す事って…」
「う～ん、ちょっと失礼な事言っちゃうけど…アスラン君の話が本当なら、２人共帰らない方が安全だと思うよ？」
そらの言葉にムッとした表情を浮かべるシンとアスランだが、それも一瞬で引っ込んだ。
実際、彼女の言う事は何も間違っていない。
下手に元の世界に戻れば、あのラクス・クラインこそが正義だと、オーブの理念こそが絶対だと狂信する者達によって間違い無くシンの身柄は拘束され、裁判を受ける事すら許されずに銃殺刑に処されるだろう。
現にカガリ・ユラ・アスハが誘拐された後、一時的にオーブを統治していたユウナ・ロマ・セイランも彼女本人が帰国した途端に国家反逆罪に処され、権力の座を追われたのだ。
否、銃殺刑だけで済めばまだ優しい方かもしれない。
下手をすれば拷問に掛けられ、苦痛の極限を味わいながら嬲り殺しにされる可能性も否めない。
それ程までにあの２人に集まる忠誠心は常軌を逸しており、最早崇拝や信仰と呼んでも過言ではない粋に達している。
一方のアスランも、クライン派がシンに対して働いた一方的な殺戮が世間に漏れない様、口封じの為に殺される可能性があると来た。
そういった事情を抜きにしても、死んだ人間が何事も無かったかの様にノコノコ戻って行ったりすれば大混乱間違い無しだ。
だが…
「戸籍もコネも何一つ無いんじゃなぁ…」

そう言って乱暴に頭を掻き毟るシン。
此方の世界で暮らすにしても、最早前提からして詰んでいるのだ。
戸籍が無ければ仕事もできないし、学校にも行けない。
物乞いなどした所でろくすっぽ集まらないだろうし、野宿でもしていようものなら警察の世話になる可能性大だ。
だからと言って折角助かった命、簡単に野垂れ死んでやるつもりなど毛頭無い。
だが、何も良案が無いのも事実だ。
そら達も一生懸命考えてくれているが、やはり打つ手無しの様だ。
そんな時、シン達の背後に1台の車が停車し、助手席から『ｈｏｌｏｌｉｖｅ』とプリントされた黒いＴシャツを着た眼鏡の女性と、運転席からは顎に無精髭を生やした人の良さそうな中年男性が降りて来た。
「お～、こりゃまた随分派手にやってくれたなぁ」
そう言って朗らかに笑う男性。
「誰ですか？あの２人」
「眼鏡のお姉さんの方が裏方のＡちゃんで、おっちゃんの方が社長のＹＡＧＯＯね」
ノエルの返答を聞いて、シンは言葉を失った。
目の前で事務所がＭＳの下敷きになっているのに、凄まじい胆力の持ち主だ。
「ん？おお！そうか、君達が…シン・アスカとアスラン・ザラだよね？」
「やっぱ知ってんですか…」
「初めまして、ホロライブプロダクション社長のＹＡＧＯＯです」
そう言って、男性は名刺を差し出して来る。
名刺には【谷郷　元昭】と書かれており、ＹＡＧＯＯとは愛称の様だ。
「知ってると思いますけど一応…ザフト軍ＦＡＩＴＨ隊所属、シン・アスカです」
「オーブ軍アークエンジェル所属、アスラン・ザラです」
律儀に挨拶を返す２人。

「君達の事は聞かせて貰ったよ。これからの話なんだけど…どう？行く宛無いなら暫くウチに居る？」
ＹＡＧＯＯのその提案は、シンとアスランにとっては正に渡りに舟と言えた。
現状、自分達はこの世界から完全に孤立しており、このままでは何も出来ずに餓死する運命は避けられない。
ならばまずは、この世界での生活の基盤を作る手段を確保するのが最優先事項だ。
この世界については、その中で学んでいけば良い。
アスランと顔を見合せ、互いに頷き合ってから、シンはＹＡＧＯＯに告げる。
「はい、宜しくお願いします！」

その夜、シンとアスランはＹＡＧＯＯの家に案内され、空いている部屋を使わせて貰う事となった。
部屋には余裕があるので、２人の戸籍と仮住まいが用意できるまでは自由に使ってくれて構わないという彼からの厚意だった。
「シン、その…すまなかったな」
「…何がです？」
「まぁ、色々だが…まずは護ってやれなかった事だ。まさか…仲間があんな事をするとは…」
此処に飛ばされる切っ掛けになったとかいう件か、とシンは心の中で呟く。
アスランに撃墜され、身動きすら取れなくなっている自分は彼等にとって格好の獲物だったのだろう。
どうにかして自分を護ろうと間に入ってくれたらしいが、やはりと言うか、多勢に無勢だった様だ。
「…別に、アスランが気にする事じゃないですよ。戦えなくなったＭＳが戦場で辿る運命なんて、そんなもんですし」
シンがそう割り切っている一方で、アスランは当時の仲間達の狂気を思い出していた。

――全ては、ラクス様の為に!!!
カガリ様の為に!!!
…今思い出しても背筋が凍り付く様な感覚に襲われる。
味方であった自分ですらこのザマなのだ。
彼等の標的となっていたシンがあの光景を目の当たりにしていたら、最低でも精神崩壊は免れないだろう。
墜落時の衝撃で気を失ってくれていたのが幸いだった。
「俺の方こそ、すいませんでした。わざわざ庇って貰って…」
「それこそ気にするな。俺がそうすべきだと思ったからやったまでだ…それに、部下を護るのは上司として当たり前の事だしな」
道こそ違えてしまったが、アスランにとってシンは大事な部下だ。
今まで彼と向き合わずに苦しめてしまっただけの自分にそんな資格がある筈も無いのは百も承知だが、それでもシンが大事な存在だという事に変わりは無かった。
「…」
シンは前にも1度、上官に敵の攻撃から庇って貰った事があった。
フリーダムが初めて戦場に現れた時の混乱で、自分も彼も武装を破壊されてしまった。
身を守る事すらできなくなってしまった自分を庇い、敵の攻撃を受けて死んでしまったのだ。
その後、彼からの最初で最後の命令を黙って守り抜いた。
とても気さくで面倒見の良い人で、アスランも「俺もあんな風にやれたらな」とボヤいていたのは記憶にある。
「それよりも…成長したな、シン」
「え?」
唐突なアスランの言葉に首を傾げるシン。
「俺は、お前を助けなければと…議長やレイに操られているお前を救い、正しく導かなければと…傲慢に考えていた」
「…俺やレイの事、そんな風に思ってたんですか」
ジト目でアスランを睨むシン。
何度も戦場で背中を預け合い、時には自分の傍若無人な振る舞いの

後始末までしてくれた親友と、自分に力を与え、道を示してくれた人をそんな風に言われると、やはり良い気分にはならない。
「あはは…だが、お前はお前なりに答えを出し、自分の信じるものを貫く為に戦った。そして、俺はそんなお前を力で抑え付ける事でしか否定できなかった。肝心の俺自身は何も答えを出していなかったんだ」
「アスラン…」
他人の考えを否定するのは簡単だ。
完璧な答えを出せる人間などいない。
どんなやり方にも、必ず粗というものがある。
それを突き付け、相手が屈服するまで糾弾すれば良いだけなのだから。
だが、答えを出し、それに基づいて行動するとなるとそういう訳にもいかない。
自分が間違っているかもしれない、他に良いやり方があるかもしれない、という恐れを抱いたまま進まなければいけないのだから。
「そんなやり方でしかお前の正しさに勝つ事ができなかった、俺の…」
其所まで言った所で、アスランはバツが悪そうに苦笑しながら続けた。
「…完敗だ、シン」
その言葉に、漸くシンも自分の心の中に掛かっていた靄がすっきりと晴れ渡って行くのを感じた。
「止めて下さいよ、アスラン。もう、そういうのは良いんです」
態度では反発しながらも、心の中では常に尊敬していた上司が自分を認め、敬意を示してくれている。
それだけで、もう十分だった。
「C．Eなんて…もう捨てて良い過去だって決めたんです。俺自身で」
「…そうか」
今度こそ、自分達は手を取り合って前に進んで行ける。
２人は漸くそう信じる事ができた。
…因みに、後になって機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ

のアニメを見たシンとアスランが「ハイネはこんな無様な死に方してない」「シンの強さはこんなものじゃないし、キラを強く描き過ぎ」「俺はルナとこんな仲になってない」「結局これ誰が主人公なんだよ」等々、ありったけの文句を言いまくったのは完全な余談である。

# 第2話「石田さんごめんなさい」

「ウチでＶｔｕｂｅｒやらない？」
「「は？」」
それは、ＹＡＧＯＯの唐突な提案から始まった。

「何でこんな事になるんだ…」
オーディション会場のある施設の入り口を前に、そう言ってがっくりと肩を落とすシンの姿があった。
事の発端はこの世界に来てから2週間程経ったある日の事。
シンとアスランは、ＹＡＧＯＯの家に居候する傍らで、就職活動の準備をしていた。
タダで衣食住を提供して貰っていた2人事に申し訳無さを感じていた2人は、恩返しの為に自分達も何かしら仕事をしようと考えていた。
そんな時、ＹＡＧＯＯから「ウチで働くなんてどうかな？」と誘いを受けたのだ。
衣食住だけではなく、仕事まで用意して貰う事に少々抵抗を覚え、シンとアスランは当初は拒否していたが、「ウチも決して人手が多い訳じゃないから、少しでも戦力が欲しい。君達が入ってくれると大いに助かる」と言われ、すんなり納得。
誘いを受ける事を選択したのだが、よりによってＶｔｕｂｅｒデビューとは…。
ＹＡＧＯＯ曰く「初の男性タレントを採用したい」との事。
Ｖｔｕｂｅｒという業界自体ができて間もない為、様々な事に挑戦して行くのが肝心だそうだ。
完全に裏方のスタッフとして働くつもりでいた2人にとっては寝耳に水の事態だった為、シンは凄まじい緊張感に襲われていた。
「落ち着け、シン。お前なら大丈夫だ。なる様になるさ」
そう言ってシンを優しく宥めるアスラン。

「よく緊張せずにいられますよね。あんた歌苦手だったでしょ？」
「どうせ受かる訳が無いからな」
「諦めてるだけかよこの野郎!!」
菩薩の様な表情で答えるアスランにシンのツッコミが炸裂する。
此方の世界に飛ばされて来る前の「諦めるな」というセリフを忘れたのかあんたは。
「つたく…大丈夫ですよ、ちょこさんとかノエルさんですら受かったんですから」
「それはそうだが…」
今度は逆にシンがアスランを励ます。
会場に来る前、自分達を救出してくれたホロライブのメンバーからも激励の言葉を貰って来たのだが、ノエル曰く「歌が下手なちょこ先生や団長でも通ったから大丈夫！2人共良い声してるもん！」との事らしい。
シンとアスランも2人の歌っている動画を見せて貰ったが、確かにとてもじゃないが上手いと言えるものではなかった。
それでも、苦手ながらも一生懸命歌っている姿と歌声には何処か初々しい可愛らしさがあり、これが彼女達がオーディションを合格した理由なのだろうと察するに難くなかった。
「お前の声が鈴村健一で羨ましいよ、シン…はぁ、何故俺の声を当てたのが石田彰なんだろう…」
「いやメタ発言やめろよ!!」
完全に心が折れてしまっているアスランの口から発せられた羨望の言葉をシンがばっさりと切り捨てる。
その通り、アスランの担当声優である石田彰氏は「歌うか声優を辞めるか」という究極の選択肢を突き付けられない限りは絶対に歌う事が無く、ガンダムＳＥＥＤ主人公組の中でアスランだけがキャラソンが無いのもそのせいである。
かくいう作者も石田彰氏の歌は「攘夷がＪ○Ｙ」しか知らないのだ。
どうやら自分達に魂を吹き込んだ声優達の影響を一部受けてしまっているらしく、アスランは歌が苦手、シンは特撮が大好きという

形でそれが顕れているのかもしれない、との事。
　え？何を言ってるかわからないって？
　大丈夫だ、作者もわからない。

「お２人共、準備はできましたか？」
「「あっ、はい！」」
　友人Ａから声が掛かり、２人は返事をしながら会場の中へと入る。
　今回審査を担当するのは、そらと友人Ａ、ＹＡＧＯＯの他に、そらの同期である【ＡＺＫＩ】と【星街すいせい】の計５人だ。
　トップバッターはアスラン。
「え～っと歌うのは…大塚愛さんの【さくらんぼ】ですね」
「以外な選曲だね」
「此方の世界に飛ばされて来てから初めて覚えた日本語の歌だからな。できる限り自信を持って歌える曲の方が良いと思って選んだ」
　ＡＺＫＩとすいせいの言葉にそう返すアスラン。
　それにしても、この嫌な予感は何なのだろうか。
　――まぁ、ちょこさんやノエルさんですら通ったんだから、アスランもアスランなりに個性を出せれば通るだろう。
「う”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”」
　――そう思っていた時期が俺にもありました。
　謎の奇声から始まったアスランの歌。
　それはもう酷い物だった。
「てェッ！長うおおおおおおおおひラクとぉぉもおおおおおおお！
　二ねェェ！んッ!?たぁぁッ！通なぁぁッ！あ”でぇぇぇ！
　やぁぁぁ！あ”パぁぁぁ!!Ｇィ還するネェェェ！
　何だかデェェェ！れたりす。ルゥゥゥゥ！ネェェェェ！
　そおイヤァァァ!!ヒどいことモ下れたシン!!ヒどいこー当も友ったシン!!!!

馬鹿ミがァァッ！イーいパイ！トゥ！マァァ！あたぁぁ！甘いあ”あ”あ”まいもの。デェェ！す。ＪＵＳＴＩＣＥ
なきなきのいチにチヤァァァ!!Ｇデェェん斜のたビーやぁッ！かキあラァァァァァ!!わぁぁあああせレない
だァァァってお”お”お”インダモウヤメルンダッ!!
くぅぅぅ～～～キィィ!!ミィィィ!!いとぉぉぉ!!通ぅぅぅながァァァ!!撤退ィ～
モウシン!!あの向こおおおオニ見ェェェ!!ルゥゥゥ!!モォォォ!!のがあるなら殺し合うぅぅぅぅぅ
ふぅ”!!ぅ”ぅ!!”たァァァ!!あり
シン!!!あわセのぉぉ!!そラァァァ!!
トゥ!!!なァァ!!りどうしキラ！レイ！シン!!!!
!!!!と
あ”あ”あ”あ”たしアスラン
う”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”」
「「「「…」」」」

「ふぅ…何とかなった様だな」
何が何とかなったのだ。
そう言いたい気持ちを必死に抑える一同。
最早歌が下手なんてレベルじゃねぇぞこれ。
「くぁっはっはっはっはっはっはっｗｗいーっひっひっひっひっひっひっひっひっひっひっひっひっひっひっひっひっｗｗｗお、お腹痛いひはははははははは…ｗｗｗ」
すいせいに至っては腹を抱えてバカ笑いしている。
「此方はアスラン・ザラだ。∞ジャスティス、これより帰還する」
意味のわからない事を言って立ち去ろうとするアスラン。
…しかし、彼は失念していた。
自分が歌っていた曲には、思わぬ落とし穴がある事を。
さぁ、意味を理解した人も「？」な人もせーので言ってみよう。
せーの！

『もういっかい！』
「バカヤロウ!!」
慌てて戻って来て続きを歌い…歌い？
叫び始めるアスラン。
「キィィ!!ミィィィ!!いとぉぉ!!
だァァァ!!きあァァァァ!!デェェ!!退ィ～
モウシン!!とおいミラァァァ！ィヲおおおよおそぉぉおおォォ!!
する！のなラァァ!!愛し合うううううう
ふぅ”ぅ”ぅ!!”たァァァ!!あ”リ
ｔｗｏ
いいいいいいつのとキィィィいモぉぉ
トゥ!!なァァ!!りどうし
あぁぁぁ!!なぁぁッ!!たぁぁ!!とお”お”
あ”あ”あ”あ”たしアスラン
う”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”お”
お”お”お”」

――俺の全てがアスランに劣ってる訳じゃなかったんだな。
シンはそう心の中で呟き、ほっと息を吐いた。
数日後の結果報告で、シンのみがタレントとして、アスランはスタッフとして採用される事が決まった。

# 第3話「黒髭危機一髪は飛ばしたヤツの勝ちらしい」

吹雪が吹き荒ぶ中、２機のＭＳが幾度と無く交錯する。
互いに光の弾丸を撃ち合い、光の剣を振るいながら何度も何度もぶつかり合う。
そして、白と蒼を基調とした装甲のＭＳ…【インパルス】が相対している蒼い翼を背負ったＭＳ…【フリーダム】目掛けて左腕の盾を投げ付ける。
投擲した盾にビームを放つインパルス。
…だが、放たれたビームは盾を逸れて明後日の方向へ。
動揺するインパルスのパイロット。
次の瞬間には、目の前にフリーダムが迫っていた。
慌ててビームサーベルを抜刀して迎撃を試みるが、時既に遅し。
フリーダムの両手に携えられたサーベルがインパルスの両腕をあっさりと削ぎ落とす。
そして、振り上げられたフリーダムのサーベルがインパルスのコックピットに迫り…

…パソコンの画面に『撃墜』の文字が浮かんだ。
「にゃーッ!また負けたぁ!!」
「猫やんけ」
「狐じゃい!」
最早様式美と化したやり取りを交わすシンと狐の獣人の少女【白上フブキ】。
今彼女がやっていたのは、シンがＣ．Ｅで対フリーダム戦を想定した訓練の為に行っていた戦闘シミュレーションである。
ホロライブのガンダムが好きなメンバー達の「フリーダムとの戦いを体験してみたい」という要望に応え、シンが態々用意したのだが、漏れ無く全員フルボッコにされている。
１番長く保ったそらの同期のロボット【ロボ子さん】ですら1分と

保たなかったのだ。
「う～…もう1回！」
リベンジしようとするフブキだが、シンがパソコンをサッと奪い取る。
「俺も動画の編集あるんで後にして下さい」
「にゃぁーッ!!」

「相変わらず騒がしいな…」
「葬式みたいな空気よりよっぽど良いでしょ？」
呆れた様なアスランの呟きにそう答えるシン。
シンとアスランがこの世界に飛ばされてから早数ヶ月。
あれから2人はＹＡＧＯＯに戸籍やら仮住まいやら、何から何まで用意して貰い、仕事やら現代知識やら徹底的に頭に叩き込み、今ではそれなり以上に仕事ができる様になっていた。
多くの先輩Ｖｔｕｂｅｒに見守られながらのシンのデビュー配信は、それはもう大きな波紋を呼んだ。
ホロライブ史上初の男性Ｖｔｕｂｅｒデビューだったり、それがまさかのガンダムというビッグタイトルの主人公だったりで、良くも悪くも注目が集まった。
その他にも、ホロライブの面々に魔界やら異世界やらに連れて行かれたり、魂抜かれかけたり、事務所が派手にぶっ壊れたりと色々あったが、２人共元気で今の世界を満喫している。
此処数ヶ月、突拍子も無い事だらけの毎日で思い悩む事もあったが、ホロライブの賑やかさにそれも些細な事と割り切れる様になっていた。
今となってはこのお祭り騒ぎの様な毎日をそこそこ楽しんでいる。
Ｃ．Ｅでは悪い意味で忙しく、血生臭い毎日を送っていたが、それを忘れる程騒がしくも面白い新しい世界での毎日をシンとアスランはすっかり気に入っていた。
「お2人共すっかりウチに染まりましたね」
「いやはや、馴れというのは怖いな」

友人Ａの言葉に思わず苦笑するアスラン。
裏方として加わったアスランだが、機械関連にめっぽう強い彼は凄まじい勢いで仕事を覚え、遂には他の社員の仕事も余裕で引き受けてみせる程の才覚を発揮していた。
徹夜勤務記録ホルダーとかいう不名誉通り越して辞退したいレベルの称号を持っていた友人Ａだったが、アスランが来てからはほぼ毎日定時前に仕事が終わる様になり、寧ろ暇な時間が増えたと言う程だ。
シンはタレントとして、アスランはスタッフとして、それぞれホロライブの大きな戦力となっていた。

「…ん？」
ふと、シンが怪訝な声を上げる。
「どうした？シ…ン…」
尋ねようとしたアスランも、続けて友人Ａも違和感に気付いた。
「…何ですかこの臭い」
そう言って顔を顰めるシン。
何処からか甘ったるい様な酸っぱい様な、それでいて何かが焦げている様な、色んな匂いが混ざり合った不快な臭いが漂って来た。
辺りを見回すと、キッチンの方から黒い煙が立ち昇っているのが見えた。
「「…」」
こんな事するヤツはアイツしかいねぇ。
「…シン」
「はい」

「ハアチャマッチャマ～♪」
意味のわからない言葉を口にしながらキッチンで何かを作っているのはホロライブ1期生【赤井はあと】である。

彼女が取り扱っている鍋の中には、グロテスクな色と見た目の何かがグツグツと音を立てて煮込まれている。
その中にドクロのマークが描かれた小瓶に入った赤い液体をこれでもか、これでもかと言わんばかりにぶち込んで行く。
「完成〜！蠍とタランチュラのメントスコーラ煮、デスソースを添えて！早速皆に「振る舞わないで下さい」ザクっ!?」
キッチンに入って来たシンが【あろんだいと】と書かれたテープが貼ってあるハリセンでツッコミを1発。
「また変なもん作って…皆が腹壊したらどうすんですか！」
「う〜……！」
鍋の中のグロテスクな物体を処分しながら説教するシン。
ホロライブ随一のクレイジーガールである彼女はこうしてよく変なモノを作っては皆に振る舞おうとする。
「うぇっ、ひっでぇ臭い…ってかこのソース何ですか!?絶対ヤバいヤツでしょこれ!?」
「料理には少しの刺激も必要なのよ！」
「あんたのは刺激ありすぎなんですよ！悪い意味で!!」
デビュー当初はもっと刺々しくも可愛らしいツンデレキャラだったそうだが、今のクレイジーガールとしてのキャラが確立されてから出会ったシンには全くそのイメージが湧かない。
あのままだったら確実にシンのヒロイン候補に加わり、ツンデレ同士のやり取りをニヤニヤしながら書いていただろう、とは作者の談である。
「ったく…もう止めて下さいね」
「それはちょっと」
「…」
呆れた様に溜め息を吐きながらシンはキッチンを後にする。
暴走する者を止めるストッパーも楽じゃないな、と心の中で呟きながらC・Eでその役割を果たしてくれていた親友に改めて感謝した。

「シン様、どうしたの？」
「はあと先輩がまたやらかしました」
「またやったのね」
キッチンを出たシンにちょこがコーヒーを差し出す。
受け取ったコーヒーを啜り、ホッと息を吐く。
ちょこも砂糖とミルクを入れた自分のコーヒーを口に運んだ。
「此処での生活には馴れた？」
「今でも結構振り回されますけど…お陰様で」
「騒がしいでしょ、ウチ…w」
「まぁ、馴れると結構楽しいですよ。葬式みたいな雰囲気の毎日よりは全然良いですし」
何処と無く「良い雰囲気」を漂わせながら談笑する2人。
此方の世界に飛ばされて来たばかりの頃、C．Eでの戦いの日々で負った心の傷と、新しい世界に馴染めないストレスで心身共に疲弊していたシン。
ちょこは養護教諭としてのノウハウを活かし、そんな彼のメンタルケアを率先して請け負っていた。
他のホロライブの面々も色々と気に掛けてくれてはいたのだが、やはり中心となっていたのが彼女だったのは言うまでも無く、今現在シンが最も心を開いている相手と言っても過言ではない。
「シンやミネルバにとって本当に必要だったのは彼女の様な存在かもしれない」とはアスランの談である。

「…ッ!?」
突然シンの表情が強張る。
何やら妙な気配が此方に向かって来ている。
――何か来る！
「危ない!!」
「キャッ!?」

己の背筋を電流の如く迸る衝動に突き動かされるまま、シンはちょこを押し倒し、彼女の身体に覆い被さる。
その直後、窓ガラスが割れ、一瞬前までちょこがいた空間に赤色のヤベーイヤツが突っ込んで来た。
太陽をバックに立ち上がるその女の名は…
「宝鐘マリン…出☆社」
「じゃないだろう！」
「グフっ!?」
アスランが【しゃいにんぐえっじ】と書かれたテープを貼ってあるハリセンでツッコミを入れたのはホロライブ３期生の【宝鐘マリン】。
赤い髪にこれまた赤を基調とした服が特徴的なキツ…もとい、海賊（船は無い）である。
「いってぇ～…！レディの頭をいきなり殴る普通!?」
「レディは窓ガラスを破って入って来たりしない！」
マリンとアスランが漫才を繰り広げる傍らで、シンはちょこに怪我が無いか尋ねる。
「うぅっ…ちょこ先生、大丈夫ですか？」
「あ～、ちょこは大丈夫なんだけどね？」
「？」
そこまで言われた所で、シンは漸く違和感に気付いた。
右手に何か柔らかくて温かいものが当たっており、中指と薬指の間に弾力のある突起物の様なものが挟まっている。
すべすべとした肌触りで、本来手に当たっているべき感触…ちょこの衣服の感触が無い。
「あ…んっ♪シン様ったら、そんな…♡」
右手に少し力を込めると、ちょこがやたら甘い声を上げる。
そして、遂に自分が触っているものが何なのかを理解し…
「…すいませんでしたぁぁぁぁぁーーーー!!!」
コンマ０１秒の速さでちょこの身体から離れ、見事な土下座を披露する。
…シンが触っていたのはちょこの胸だった。

それも衣服越しですら無く、露になった右側の乳房を直接。
アニメで目にしたシンの伝統芸(ラッキースケベ)を目の当たりにし、いたたまれない気持ちになりながら顔を逸らすアスラン。
「顔を上げて、大丈夫だから。ね？」
ちょこはそう言って優しく微笑みながらはだけた服を直す。
――天使かこの人。
悪魔なのに。
ちょこめいと（ちょこのファンの総称）にバレたら殺されるだろうな、とシンは心の中で呟いた。
現にこの場面を自ら書いておきながら妬ましく思っている作者(バカ)が1人。
「あ～ん！シン君ったら大たん”ッ!?」
煽る様なマリンの一言をアスランのとどめの一撃が遮り、彼女の意識を刈り取った。
「シン、窓ガラスの掃除を頼んで良いか？」
「え？別に良いですけど…」
「すまない、助かる。終わったら事務所の談話室に来い。面白いゲームを思い付いたんだ」
そう言ってマリンをずるずると引き摺って行くアスラン。
「あ、動画の編集…ま、後で良いか」
「シン様」
「はい？」
気の抜けた様な返事をするシンの耳元に唇を近付け…
「…気持ち良かったわよ♪」
「ッッ!?」
蠱惑的な笑みを浮かべてそう呟き、アスランの後を追う様に去って行った。
――前言撤回。
やっぱ悪魔だあの人。

「アスラン、窓ガラスの掃除終わりまｓ…って何だこりゃ!?」
「ありがとう、シン。これか？言っただろう、面白いゲームを思い付いたと」
掃除を終え、事務所の談話室へとやって来たシンの目の前には、付け髭を付けられ、デカい樽に詰められているマリンの姿があった。
樽の傍らには様々な形状の刀剣が置かれている。
「シン君～！へるぷみー！」
「これ当たり引いたら何かあるんですか？」
「今日の買い出しで欲しい物をマリン様が１つ奢るわ」
それを聞き、シンは樽の傍らに置かれている剣の１つ（デ○カメンソード）をおもむろに手に取り、樽に突き刺す。
「…ハズレだな」
「チッ」
「おいぃ！船長の事はまるっと無視かい！」
喚き散らすマリンを当然の如く無視し、ちょこが２本目（無双セ○バー）の剣を突き刺す。
「…あら、ちょこもハズレだわ」
「止めてぇ！船長吹っ飛んじゃう！お星様になっちゃう！」

「おっは余～！何だか面白そうな事をやってるな！」
「いや船長何やってんの!?」
事務所の扉を開けて入って来た２人はホロライブ２期生の鬼の少女【百鬼あやめ】とホロライブゲーマーズ所属の狼の獣人【大神ミオ】。
「サプライズを仕掛けたと思ったら樽に詰められました」
「成る程わからん」
そう答えるミオを尻目に、あやめが３本目（シ○ケンマル）の剣を樽に刺す。
「…ぐぬぬ、ハズレか」
「ちょっ、流石にこれ以上は止めた方が…」
「因みに当てたら今日の買い出しで欲しい物をマリンが１つ奢るぞ」
制止しようとしたミオもそれを聞いてノリノリで４本目（火○剣烈火）の剣を突

き刺す。
「Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！」
「お～、何か面白そうな事やっとんね」
「マリン、今度は何したの？」
続けてノエルと共に事務所に入って来たのは褐色肌のエルフ【不知火フレア】。
ノエルやマリンと同じホロライブ３期生である。
２人は顔を見合せてニヤリと笑い、
「よし刺すぞ～！」
「何処がええやろ？」
流れに悪乗りした。
「どうかお慈悲を～！」
悲痛な叫び声を上げるマリン。
こうしてホロライブの１日は今日も過ぎて行く。

# 第４話「ドッキリにも限度がある」

５月１４日、夕暮れ時。
既に外は太陽が西の空に傾いている。
茜色に染まる街中で、事務所に引き返すそらの姿があった。
「いけないいけない、スマホ忘れちゃった！」
どうやらスマホを事務所に置いて来たらしい。
まだそんなに離れていない場所で気付いたのが幸いだった。
５分も経たない内に事務所に到着し、扉を開けた…瞬間、シンとアスランが目の前に立ち塞がる。
「どうしたんですか？そら先輩」
「いや、スマホ忘れたから取りに戻っただけだよ？」
「やはりか…これだろう？」
そう言って、アスランがポケットからピンク色のカバーに覆われたスマホを取り出す。
「あ、ありがとう…」
感謝の言葉を述べながらも、その顔には怪訝な表情が浮かんでいる。
「…ど、どうした？」
「…ねぇ、もしかして何か隠してる？」
「「ッ！」」
２人の額から冷や汗が零れ落ちる。
「な、何でそう思ったんだ？」
「何か２人共、挙動不審っていうか…変だよ？」
――何故こういう時に限って鋭いんだ！
そう心の中で叫びながら、アスランが精一杯捻り出した嘘が…
「バレたか…いや、シンが君とデートしたいらしくてな」
…まさかのこれである。
「…えぇぇぇぇぇっ!?／／／」
「はぁぁ!?」
種類の違う動揺の声を上げるシンとそら。

反論しようとするシンの口を手で塞ぎ、ジェスチャーのみで意思を伝える。

※以下、『』の部分はアスランとシンがジェスチャーでやり取りします。

『良いから、黙って言う事を聞け！』

『ふざけんなよ！言い出しっぺのあんたがやれ！』

『後でバナナやるから』

『ウッキ～バナナだ～！って誰が猿だこの野郎!!』

『プロテインも付けてやる』

『負ける気がしねぇ！って俺は万丈龍○（筋肉バカ）じゃねぇよ!?絶対やらないからな！』

『ならラブコ○のぬいぐるみはどうだ？プレバンのヤツ』

『わかりました』

「○？△□??▲▼？▸？☆？◃▹？●◎～!?」

「そら先輩！」

声にならない悲鳴を上げて混乱しているそらの肩を掴み、精一杯のイケボで告げる。

「…明日、デートして下さい」

…シン本人に当然自覚は無いが、彼は超が付く程のイケメンである。

整っていながらも幼さの残る顔立ち。

ルビーの様な赤い瞳。

艶のある黒髪。

鈴村健一ボイス。

「は、はい…／／／」

堕ちない乙女がいる筈も無い。

「何とかやり過ごしたか…皆、作業を再開してくれ」
そらがスマホを受け取り、立ち去ったのを確認したアスランが呼び掛けると、物陰や机の下に隠れていたホロライブの面々が姿を現した。
「バレるかと思ったっス…」
「あぶねーのら…」
机の下からひょっこりと顔を出すボーイッシュな少女【大空スバル】とメルヘンチックな風貌の少女【姫森ルーナ】。
「お～い、頼まれた物注文して来たよ～」
そう言って事務所の扉を開けるのは猫の獣人【猫又おかゆ】と犬の獣人【戌神ころね】。
「もしかしてそら先輩来とった？」
「ああ、スマホを先に見付けておいて良かった…」
ころねの問い掛けにアスランがそう答える傍らで、シンが頭を抱えながらしゃがみ込んでいた。
「デートって…どうすりゃ良いんだよ…」
恋人などいた事も無いシンは、唐突に決まったデートの予定に絶望してしまっていた。
ラ〇コフに釣られ、衝動的に乗ってしまった自分の未熟さが呪わしい。
「デートって何の話～？」
「実は…かくかくしかじか」
「あ～、まぁ頑張ってね」
シンが事情を説明するが、おかゆは気の抜けた声で応援するだけだ。
「仕方ねーのら。どのみち明日はそらちゃ先輩を事務所に入れる訳にはいかねーのら」
「本当、難しく考える必要無いと思うっスよ？ほら、友達とどっか遊び

に行く様な感覚で」
シンに同情し、せめてもの励ましとアドバイスの言葉を贈るスバルとルーナ。
「大丈夫だ、シン。最初は誰でも初めてだし、案外何とかなるものだ」
「あんたが言っても何も響かねぇよ！それに知ってんだぞ!?ラクス・クラインとデートした時に機械のパーツの店で自分の世界に没頭してた事！」
「おまっ、何故それを!?」
自分の中でもトップクラスの黒歴史を掘り返されて動揺するアスラン。
あの一件で危うくラクスとの婚約が破談になりそうになったのは言うまでも無い（結局有耶無耶になったが）。
「あ～、兎に角！ちゃんとラブ〇フのぬいぐるみは用意してやるから、明日は任せたぞ！」
「あっ、おい！まだ話は終わって…」
逃げる様に作業に戻るアスラン。
――女性関連でコイツを頼るのは止めよう。
密かにそう決意したシンだった。

「早く来過ぎた…」
事務所から近い場所にあるバス停。
そらとの待ち合わせ場所に指定されているベンチに腰掛けるシンの姿があった。
服装は事務所で愛用しているタレント衣装（ザフトの赤服）ではなく、ジーンズに赤いスニーカー、オレンジのTシャツの上に白いパーカーといった完全なオフの服装である。
待ち合わせの時刻は9時の予定だったが、完全に緊張し切っていたシンはアホみたいに早く出てしまい、まだ時計は8時半を示したばかりである。

「落ち着け…今日1日そら先輩を事務所に近付けさせなければそれで良いんだ、友達と遊んでる様な感覚で大丈夫なんだ」
全力で自分に暗示を掛け続けるシン。
「あれ…シン君、もう来てたの？」
「!?」
背後から掛けられた声に反応して振り向くと、其所にはそらの姿が。
彼女もシンと同じく、両袖にリボンがあしらわれたピンク色の上着にフリルの付いたスカートというオフの服装であり、変装の為か眼鏡を掛け、髪をポニーテールに束ねている。
「あ、はい。ちょっと早く出過ぎちゃって」
幸い、今の独り言は聞かれていない様だ。
「ふふっ、私と一緒だね」
何処か可笑しそうに、それでいて少し恥ずかしそうに笑うそら。
余りの可愛らしさに思わず見惚れてしまいそうになる。
――って何考えてんだ、俺は！
忘れてはいけない。
今日のデートは飽くまで仲間達の『準備』が整うまでの時間稼ぎ。
言ってしまえば茶番劇なのだ。
そう意識を改めた所で、丁度良くバスがやって来る。
「…ちょっと早いですけど、行きますか？」
「うん、そうしよっか」
そして2人はバスに乗り込み、町へ繰り出して行った。

デートを開始して数時間。
街中の洋服屋で服を着せ替えっこしたり、ゲーセンでレースゲームやリズムゲームに興じたり、甘味処で和の雰囲気を楽しみながらスイーツを堪能したり。
シンも少しずつではあるが、緊張が解れ、そらとのデートを楽しむ余裕が生まれ始めた。

今は水族館で海洋生物を観賞している。
「…深海の魚って、こんな姿してるんだな」
「シン君、こういうの好きなの？」
「いや、そういう訳じゃないですけど…Ｃ．Ｅの頃には絶滅してた魚とかもそこそこいるんで、結構興味深いなぁって」
そう言って水槽の中身を見ながら歩くシン。
普段は特に興味の無いものでも、もうお目に掛かる事ができない筈のものをこうして生で見る事ができるというのは中々新鮮で面白い。
「…あ、そろそろイルカショー始まるよ！」
そう言って速足で会場に向かうそらにシンも続いた。

「ありがとうございました！頑張ってくれたイルカさん達に大きな拍手をお願いします！」
トレーナーの挨拶に合わせる様なタイミングでイルカ達がジャンプを披露し、拍手が沸き起こる。
「凄かったね～！」
「言葉も通じないのに、こんなパフォーマンスができるなんて…」
素直な感嘆の言葉を述べるシン。
意志疎通のできない他の生き物と絆を育み、訓練を重ね、こうして演目を披露するのは並大抵の努力では不可能だろう。
ホロライブ（ウチ）で言えば６期生の【沙花叉クロエ】ならやれるのだろうか。
否、彼女は鮫の獣人だからイルカ達もビビって逃げてしまうか？
等とどうでも良い事を考えていると、シンのスマホにＬＩＯＥの通知が届く。
アスランからだ。
『そろそろ準備が終わる。時間稼ぎは後少しだけで十分だ』
それを見て、シンも『了解』と返答を送り、最後の目的地へとそらを誘う。
「そら先輩、最後は彼処に行きませんか？」

シンとそらが最後にやって来たのは、同じ水族館の敷地内にある観覧車。
簡単ではあるが遊園地も兼ねて営業しており、そこそこの数のアトラクションがある。
特に観覧車は綺麗な海や街並みを一望できると評判であり、カップルに大人気との事だ。
「はぁ～、楽しかったぁ…！今日はありがとうね」
「いえ、楽しんで貰えたなら俺も何よりですよ」
向かい合って座るシンとそら。
景色を眺めつつも談笑していたが、やがて話す事が無くなったのか、ゴンドラの中には静寂が流れる。
それでも居心地の悪さは全く感じられず、寧ろ暖かい空気が流れていた。
「…シン君、隣に行っても良い？」
「あ、はい」
真ん中から左側にずれるシン。
空けられた右側にそらが座る。
膝の上には観覧車に乗る直前に寄った土産物屋でシンが買ったイルカのぬいぐるみを抱えている。
ふと、そらがシンの肩に凭れ掛かった。
「!?」
「ねぇ、降りるまで…こうしてても良いかな」
自分の肩に触れる彼女の温もりと鼻腔をくすぐる心地良い匂いに戸惑いながらも、シンはゆっくりと頷いた。

「ねぇ、まだ帰らないの？」
「すいません、見せたい物があるんで」
観覧車を降り、水族館を出た2人だったが、シンに引っ張られる形でそらはホロライブの事務所へとやって来ていた。

階段を上り、入り口の扉の前へとそらを連れて来る。
「…開けて下さい」
「？」
言われるがままに扉を開け、中に入るそら。
同時に四方から破裂音が響き、飛び散った銀紙とチャフがそらに襲い掛かった。
「ひゃっ!?」

「「「「「「お誕生日おめでとう!!」」」」」」
「…え!?」
呆気に取られるそら。
目の前で、ホロライブの面々が自分を取り囲む様にしてクラッカーを鳴らしていた。
辺りを見回すと、事務所は辺り一面派手な装飾で覆われており、テーブルの上には寿司やらピザやらフライドチキンやらオードブルやら、多種多様なパーティー料理にショートケーキ、チョコレートケーキ、モンブランの3種類のホールケーキが所狭しと並べられている。
「この為に今日1日、そら先輩を事務所から遠ざけてました！」
ホロライブ4期生の悪魔【常闇トワ】が悪戯が大成功した子供の様に笑う。
「え？じゃあ、シン君…まさか!?」
「…すいません、全部これの準備が終わるまでの時間稼ぎでした！」
凄まじい勢いで頭を下げ、謝罪するシン。
「な…何だもう～～～～！ビックリした～！」
その場に崩れ落ちながらケラケラと笑うそら。
其所に友人Ａがホロライブの面々から贈られた数々のプレゼントの箱が載った台車を押してやって来る。
「ほら、早くしないと料理冷めるよ」
「うん！皆、今日はありがとう！」

皆に笑顔で感謝の言葉を述べるそらを満足げに見詰めているシンの肩をアスランが叩いた。
「シン、お前も今日はご苦労だったな。ほら、約束の品だ」
そう言ってアスランが差し出したのは、○ブコフのぬいぐるみと…
「これ、サイク□トロンドライバー!?」
「かなり無茶な事をさせてしまったからな。俺からの個人的な餞別だ」
そう言って申し訳無さそうに苦笑するアスランに、シンは悪戯っぽく返す。
「何言ってんですか?あんたの無茶振りに答えたのなんて、これが初めてじゃないですよ」
「あはは、それを言われると弱いな…」
「2人共〜!早く来ないと食べ物無くなっちゃうよ〜!」
そらの呼び掛けに反応し、2人もパーティーの輪の中に入って行った。
…因みにバナナとプロテインもちゃんと後で渡された。

大量に用意された料理も殆ど空になり、誕生日パーティーも落ち着いて来た頃。
事務所の屋上で夜風に当たるシンの姿があった。
「あ〜、疲れた…」
妙に長い1日だった。
疲れた身体に夜の涼しい空気が沁み渡って行くのを感じる。
「あれ?シン君?」
ふと声が聞こえ、振り向くとそらが立っていた。
「何やってるの?」
「いや、ちょっと夜風に当たりに…そら先輩は?」
「私も同じ、かな」
そう言って、シンの隣に立つ様に柵に凭れ掛かる。
「その…本当すいませんでした」

「え？」
「今日1日、ずっと騙してて…」
しおらしい声で謝罪するシンだが、そらの表情は太陽の様に眩しく、穏やかだった。
「気にしなくて良いよ！今日のデート、私も凄く楽しかったし」
その答えを聞き、まるで靄が掛かった様なシンの表情も漸く清々しい笑顔に変わった。
「そう言って貰えて何よりです。じゃあ俺、今日はもう帰りますね。流石に疲れました」
「うん、おやすみ」
「おやすみなさい。そら先輩もあんまり遅くならない様にして下さいね」
別れの挨拶を告げて屋上を後にするシン。
「…鈍感だなぁ」
残されたそらの呟きは夜の闇に溶け込む様に消えた。

# 第５話「薬と毒は紙一重」

「フフフフ…」
真夜中のホロライブ事務所。
定時などとうに過ぎており、既に誰もいなくなった真っ暗な空間の中で、１人残って怪しげに笑う人影があった。
彼女の名は【博衣こより】。
コヨーテの獣人であり、ｈｏｌｏＸ（ホロライブ６期生）の頭脳（自称）。
「自称じゃない！」
…地の文にツッコミ入れるの止めて貰えませんかね（）
キッチンで何やら作業をするこより。
目の前の鍋の中には、ピンク色の液体が煙を立たせながらグツグツと煮え滾っている。
「もう少し…もう少しで完成しますよ～…！」

「はぁ、はぁ…おはようございま～す、ってまだ誰もいないか」
朝７時、事務所に息を切らした汗だくのシンが入って来る。
シンとアスランの家から事務所までは近過ぎず、遠過ぎずの絶妙な距離がある為、シンは毎朝ランニングを兼ねて出勤している。
事務所内にあるシャワーで汗を流し、ザフトの赤服に着替えて支度を整えると、事務所の奥からこよりが姿を現す。
「おはよ～、今日も早いね～」
「あっ、おはようございます。こより先輩こそ今日は随分早いですね」
「まぁ早く目が覚めちゃったからね～、はいこれ」
そう言ってこよりがスポーツドリンクを渡して来る。
「あ、ありがとうございます」
そう言ってドリンクのボトルの蓋を開き、口に運んだ瞬間…
「あ…れ…？」
頭がくらっとする様な感覚がシンを襲い、シンはそのまま倒れてしまう。

――何か変な薬作って中に仕込んだか…。
そう結論付けたシンが薄れ行く意識の中で最後に見たものは、こよりの悪戯っぽい笑みだった。

「おはまっする～」
それから約数十分後、徐々にホロライブの面々が出勤し始める時間帯。
今日最初に来たのはノエルだ。
「さ～て、今日も1日…!?」
…その時、ノエルは見た。

「お、おはよう…ございます…」←絶賛幼児化中のシン君

「…か」

「か？」
「可愛いいいいいいいいいい!!」
「むぐっ!?」
思い切りシンを抱きしめるノエル。
ノエル自慢の大胸筋に自分の顔が埋もれ、思わずくぐもった声を上げる。
シンそこ代われ。
「だ、だんちょ、くるしい…／／／」
「あ、ごめんね！」
慌ててシンから腕を離すが、顔を真っ赤に染めてもじもじしている彼の姿が余りに愛くるしく、再び抱き付きたくなる衝動を必死に抑える。
「おはこんでございまｓ…!?」
「おっはｙ…!?」
続けて入って来たのはフブキと【夏色まつり】、夏色吹雪の２人。
やはり幼児化したシンを見て硬直する２人だが、ノエルの時と反応が違った。
「これは…まさか…!?」
「こよちゃんが…!?」
「ふっふっふっ、やりましたよフブキ先輩！まつり先輩！」
其所に不敵な笑みを浮かべたこよりが現れ、誇らしげに胸を張る。
「こよりちゃん、これはもしや…！」
「はい、やりましたよフブキ先輩！」
「あ、こよちゃんの仕業だったんだ」
フブキとこよりのやり取りを見て、ノエルが「やっぱりか」と言いたげな様子でそう呟く。
「これこそ、こよりが発明した新薬『アホトキシン４８６９』！その試作品！飲んだ人間を子供にできちゃう夢の薬です！」
こよりが高々と掲げた試験管の中には、怪しいピンク色の液体が入っている。
「これでまつり達のロリライブ計画が１歩前進する訳ですよ！」

「なんですかそのけいかく…」
　最早怒りも通り越して呆れてしまうシン。
「ほう…それで？」
「効果を試すべく、スポーツドリンクに仕込んでシン君に…ハッ!?」
　ギギギギギ、と壊れた機械の様なぎこちない動きで振り向くこよりと夏色吹雪の３人。
　３人の背後に修羅（アスラン）が立っていた。
　右手にシン専用ハリセン（あろんだいと）、左手にアスラン専用ハリセン（しゃいにんぐえっじ）を携えて。
「さて…何か言い残す事はあるか？」
　一見穏やかな笑顔を浮かべている様に見えるが、目が全く笑っておらず、身体中からどす黒いオーラがメラメラと立ち上ぼっている。
「で、では、最期に白上から一言だけ…」
「何だ？」
「…やっぱりロリライブは最高だぜ！」
「テンション・フォルテシモ!!」
「「ギャーーーーーーーーーー!!」」
　意味不明なアスランの掛け声と共に、３人に制裁の一撃が振り下ろされた。

「…で、これからシンをどうするんだ？」
　アスランが３人に制裁を加えた後、すっかり子供の姿になってしまったシンの処遇について会議が行われていた。
「よ～しよ～し」
「ほ～ら、お菓子でござるよ～」
　現在シンはノエルの膝の上で頭を撫でられ、６期生の【風真いろは】にお菓子を貰っている。
「おれ、いちおう１７さいなんですけど…」
　幾ら幼い姿になっているとは言え、１７歳にもなって小さな子供扱いされるのは流石にこそばゆいものがあるらしく、シンは顔を赤くしながら戸惑う。

だが、そんな様子も皆の母性をくすぐる要素にしかなっていないらしい。
「とりあえず、まずはシンの面倒を見られる人が必要だな。俺は明日からのＥＮ支部への出張に向けた準備があるから…誰か頼めるか？」
アスランの問い掛けにノエルが手を挙げる。
「団長がやろっか？今日午後からオフやし」
「では頼む。これが家の鍵だ」
「あれ？団長の家で面倒見るつもりやったんやけど」
すっとんきょうな声を上げるノエルに、アスランが深刻な顔で答える。
「…正直、この薬の効き目が何時切れるのかわからないからな。もし君達の家で面倒を見たとして、シンが元の身体に戻った時にシンが着られるサイズの服が無かったらどうなると思う？」
「？」
「…俺が服を届けるまでずっと、裸のシンと一緒に過ごす事になるぞ」
数秒の沈黙が流れる。
真っ先にそれを理解したのはそらだった。
「…～～～～～～!!??／／／」
「そらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
シンの一糸纏わぬ姿を頭に浮かべてしまったそらの耳から首までが一気に真っ赤になり、頭から煙を噴いて倒れてしまう。
先日のデート以来、シンを徐々に異性として意識し始めていた彼女には刺激が強過ぎたらしい。
目を回して倒れたそらを介抱する友人Ａを尻目にアスランが言葉を続ける。
「…そんな訳で、シンの着る物が何時でも用意できる俺達の家がベストという事だ。わかったか？」
「は、はい」
「よし、じゃあ頼むぞ」

「すいません、きょうはよろしくおねがいします」
「ええんよええんよ、団長に任せんしゃい♪」
胸を張り、自慢の大胸筋をばるんと揺らすノエル。
シンとアスランの家は子供の足で帰るにはかなり距離がある為、今日はタクシーで帰宅する。
タクシーを降り、家の近くのスーパーで夕食の材料を購入してから帰宅する2人。
シンとアスランの家は一見すると小さな平屋建ての住宅ではあるが、新築である故に外装、内装共に綺麗であり、2、3人程度で暮らすだけなら十分過ぎる程の広さと快適性がある。
寧ろこれ以上大きな家だと、掃除が面倒な事になるだろう。
「綺麗な家だね～、団長の家とは大違い」
「だんちょうはちゃんとそうじしてください」
冷静にツッコミを入れるシン。
1度コラボ配信をした時に家にお邪魔させて貰った事があるのだが、ハッキリ言ってリビングが散らかりに散らかっており、ゴミ屋敷1歩手前と言っても過言ではない状態だった。
配信を開始する前にシン主導で部屋の掃除を行い、やっと綺麗に片付いたのだ。
恐らくアスランが自分の家で面倒を見させようとしたのも、ノエルが名乗り出たからというのが理由の1つとしてあっただろう。
「今晩ご飯用意するから待っとってな～」
「いいです、おれがやりますから」
そう言ってキッチンにやって来たシンの口を人差し指で抑え、ノエルは微笑む。
「良い機会だから、ちょっと他人に甘えるって事を覚えんしゃい。シン君放っといたらすぐ無茶するから」
そう言って、道中スーパーで買って来た食材を開封し、調理を始めるノエル。
申し訳無さそうにその様子を見ていたシンだったが、やがて諦めたのか、大人しく料理をノエルに任せ、録り溜めてあった仮面ラ〇ダー

を見始めた。
「シン君、本当に特撮(それ)好きやね」
「ないようがふかくて、こどもむけのはずなのにすごくおもしろいんですよ」
そう言って再びシンはテレビに視線を向ける。
まるで歳の離れた弟ができた様な微笑ましい気持ちになりながら、ノエルは調理を続けた。

「大丈夫？辛くない？」
「おいしいですけど…こどもになったからかな、なんかいつもよりからくかんじる」
そう言ってノエルが作ったカレーを頬張るシン。
幼児化して痛みや刺激に対して敏感になっているらしく、辛味が強く感じる。
様子を見兼ねたノエルが牛乳を淹れて持って来る。
「食べづらいなら飲んでね」
「あ、ありがとうございます」
「因みに団長から搾ったヤツじゃないからね？」
「なにいってんですかあんたは!?」

食事も入浴も終え、時刻は夜１０時を回った頃。
子供の身体に戻っている為、眠くなるのが早いのか、シンは既に布団の中で寝息を立てている。
「ｚｚｚ…」
「ふふふ…可愛いなぁ…♪」
気持ち良さそうに眠っているシンの頬を優しく撫でる。
何処までも真っ直ぐで、熱血で、頼りになる普段のシンの面影は何処にも無く、つい可愛がりたくなってしまう。
シンの隣に寄り添う様に布団に潜り込む。

「…お休み」
そう呟き、ノエルもそっと目を閉じた。

「う～ん…」
瞼越しに外の光が差し込み、ノエルの意識を浮上させる。
腫れぼったい眼を擦り、ボヤけた視界をクリアにさせた瞬間…
「ッ!?」
ノエルは思わず絶句した。
自分のすぐ側で眠っていたシンが、元の姿に戻っている。
彼が着ていた服は身体が元に戻る過程で身体に合わなくなったのか、ボロボロの布切れとなり果てている。
「…!」
少し視線を下げると、しなやかな細身でありながらも鍛えるべき箇所は極限まで鍛え上げられた凄まじい肉体が目に映る。
布団の陰になって下半身が見えていないのが不幸中の幸いか。
思わず悲鳴を上げてしまいそうになる衝動を堪えつつ、ノエルはシンが目を覚ますまで寝たフリをする事を選択する。
「…?…!?」
すると、1分もしない内にシンが目を覚ました気配がした。
暫く困惑していた様だが、やがて落ち着いたのか、一瞬布団の感触が軽くなってシンの気配が遠くなり、衣擦れの音が聞こえて来る。
どうやら布団から出て服を着ている様だ。
そろそろ起きても大丈夫そうなので、ノエルは寝たフリを止め、上半身を起こした。
「う～ん…あ、シン君、おはまっする～」
「お、おはようございます…あの～、団長、幾つか聞きたい事があるんですけど」
「んぅ…どしたの～?」
「…何で団長が俺の家で、俺の布団で寝てるんですか?」
「…ほえ?」

詳しく聞いてみた所、どうやら昨日の朝、出勤してこよりに渡されたスポーツドリンクを飲んでからの記憶が全く無いらしい。
こよりに何かされたのだろうという事は大体予測できているのだが、何があったのか全くわからない様だ。
ノエルは一先ず、こよりがそのスポーツドリンクに飲んだ相手を子供にしてしまう薬を仕込んでいた事、子供の姿になってしまったシンの面倒を自分が見ていた事を大まかに話した。
「何て言うか、その…すいませんでした」
「ええんよ、団長も弟できたみたいで面白かったし」
気丈に笑って答えるノエルだが、内心では「記憶を失ってくれていて助かった」と考えていた。
…というのも、昨晩入浴した際、ちょっとしたトラブルがあった為である。
それについてはこの場では描写できない為、Ｒ１８の方で補完させて貰うとしよう。

因みに、出勤した後にこよりに例の薬について聞いてみた所「いかがわしい事をしてもバレない様、薬の効き目が切れたら子供に戻っている間の記憶が消える様にしておいた」との事。
これを聞いて激怒したアスランが、ＥＮからの帰国後に３人に再び制裁の一撃を振り下ろしたのは完全な余談である。

# 第６話「想像力はガンプラを通じて培われる」

「もうすぐ着くからね～」
車を運転するＹＡＧＯＯが助手席に座るシンと、後部座席の【さくらみこ】【兎田ぺこら】、３人の同乗者に告げる。
彼等は現在、案件の依頼を受け、依頼主である企業へと車を走らせていた。
「晴れて俺にも初案件か…」
助手席に座るシンが感慨深そうな表情を浮かべる。
というのも、今回の案件は、先方から直々に「シンに委託したい」指名を受けているのだ。
「ま、何かあったらえりーとのみこ先輩に任せると言いにぇ」
「そういうみこ先輩が１番何かやらかしそうなんですけど」
「おいぃ!?」
胸を張るみこに冷静な一言を返すシン。
彼女のポンコツっぷりを普段から見ている彼にとっては安心できる要素など何一つ無い。
まぁ、流石に案件ではやらかさないだろうが。
「おっ、ほら、見えて来た」
ＹＡＧＯＯの言葉に反応し、３人が窓の外に目を向けると、高台に建てられた大きなビルが見えた。
「でっけぇぺこな～」
感嘆の声を上げるぺこらに、運転席のＹＡＧＯＯが微笑みながら返す。
「あれが【ガンプラバトル】産みの親、ＰＰＳＥ社だよ」

ガンプラバトル。
それは、プラスチックに反応する【プラフスキー粒子】によってガンプラを操り、勝敗を競う次世代型競技種目。
しかし、そのプラフスキー粒子の正体は異世界【アリアン】で採れ

る鉱物【アリスタ】から産まれた産物だった。
異世界など荒唐無稽とすら言われていた当時は、地球でアリスタ…つまりプラフスキー粒子を手に入れる術は無く、第７回の世界大会を最後に２度と行われる事は無くなる筈だったが、プラフスキー粒子発生装置の発明やＶｔｕｂｅｒ事業の展開に伴う異世界との交流の活発化、それに伴う技術の発達によって、再び誰もがガンプラバトルを楽しめる様になった。

車を降り、ビルの中へ入ると、受け付けの前に２人の男性が立っていた。
１人はスーツを着た人の良さそうな天然パーマの男性で、１人は仮面を着けたオールバックの青年。
２人は此方に気付くと同時に笑みを浮かべて歩み寄って来る。
そして、懐から名刺を取り出して自己紹介した。
「ホロライブプロダクションの皆さんですね、初めまして。ＰＰＳＥ社ＣＥＯの安室（アムロ）　玲（レイ）です」
「初めまして、三代目メイジン・カワグチこと結城（ユウキ）　竜也（タツヤ）です」
ＹＡＧＯＯも名刺を差し出し、握手を交わす。
「ホロライブプロダクションＣＥＯの谷郷元昭です。この度はどうもありがとうございます」
「さくらみこで～す」
「兎田ぺこらぺこ」
「ぺこみこ大戦争、聴かせて頂きましたよ。お２人らしい、とても楽しい曲でした」
「えへへ～、それ程でも無いにぇ」
竜也の言葉に謙遜するみこだが、やはり自分の曲を褒めて貰えるのは嬉しいのだろう。
「そして…おお、君が…！」
竜也の視線がシンに釘付けになる。
「ザフト軍ＭＳパイロット兼、ホロライブ所属Ｖｔｕｂｅｒのシン・ア

スカであります」
　おどけた様に敬礼しつつ自己紹介する。
「まさか本物のガンダムパイロットにお会いできる日が来るとは…！」
「今日は宜しく」
　感動に打ち震える竜也に手を差し伸べ、握手を交わすシン。
　其処に、入り口から2人の少年が入って来た。
「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ…遅刻する所だった…！」
「ったく、夜更かしし過ぎだっつーの」
「仕方無いだろ！もうすぐ世界大会なんだから！ビルドストライクコスモスの調整もまだ終わってないんだし…」
　唐突な乱入者の登場に戸惑う中、ぺこらが安室に尋ねた。
「会長さん、あの2人誰ぺこか？」
「青い髪の方が井折（イオリ）　聖（セイ）君、赤い髪の方がアリーア・フォン・レイジ・アスナ第一王子。前回の世界大会優勝コンビさ」
「あの2人が…ですか？」
　そう首を傾げるシン。
　どう見ても普通の子供にしか見えないな、と思っていると、聖とレイジが此方に気付いて近寄って来る。
「わりぃわりぃ、遅れちまった」
　レイジの方は至ってフランクな様子で接して来るが、聖の方はガチガチに固まってしまっている。
　まるで壊れたロボットの様な挙動で歩みを進めながら、シンの目の前まで来た所で止まって敬礼と自己紹介をした。
「イ、井折　聖であります!!お、お、お会いできて、こ、光栄であります!!」
「いや緊張し過ぎだろ」
「緊張するなって言う方が無理だよ！あのシン・アスカが…本物のガンダムパイロットが目の前にいるんだよ!?ウィンダム1個中隊を単独で殲滅したり、作中で誰も倒せなかったキラ・ヤマトのフリーダムガンダムすら倒したり、5機のデストロイガンダムの内2機を1人で

やっつけたり、ザフトの象徴とも言える伝説のエースが此処にいるんだよ!?」
　呆れた様にツッコむレイジに対し、聖がまくし立てる様に力説する。
「わりぃな…コイツ、すぐこうなるんだよ。あ、俺はレイジな」
「シン・アスカだ。宜しく、チャンピオン」
　そう言ってレイジと聖とも握手を交わすと、安室が一同に声を掛けた。
「じゃあ、今回の案件で使うガンプラを選びに行こうか。ついて来て下さい」

　安室の引率でやって来たのは、ＰＰＳＥ社の地下にあるガンプラ倉庫。
　メイジンの名を受け継いだ者が使うガンプラを用意する為に造られたものであり、全種類のガンプラと各種様々な改造用パーツが保管されているという。
「このタブレットに保管してあるガンプラのデータが載っている。参考にして探してくれ」
　安室から渡されたタブレット端末を手に、３人はガンプラ探しを始める。
「…ま、無難にコイツで良いか」
　シンが手に取ったのは【ＨＧＣＥ　デスティニーガンダム】。
　Ｃ．Ｅを戦争の呪縛から解放する為にデュランダルから託された最強のＭＳ…シンの嘗ての愛機だ。
　変に見た事の無い機体を選ぶより、乗り馴れた相棒の方が良いだろうと判断した。
　その後、みこが【ＨＧＵＣ　シャア専用ザクⅡ】、ぺこらが【ＨＧＵＣ　ガンダム】を選んだ所で、再び出入口の前に集まった。
「シンはやっぱそれぺこか」
「まぁ…やっぱ馴れ親しんだヤツの方が良いかと思って」

「選んだかい？それじゃあ組み立てて、いよいよ動かしてみようか」
そう言って安室は一同を連れて倉庫を出ると、プラモ造りの部屋へと案内した。

「シン君、少し良いかな？」
「はい？」
安室に先導されながらプラモ造りのスペースへ向かう途中、シンは竜也から声を掛けられる。
「この案件が終わってからで良い。頼みがあってね」
「頼み？」
聞き返すシンに、竜也は一呼吸置いてから語り始める。
「…ガンプラビルダーの中には、２種類の人間がいる。自分が作ったガンプラを、元となった機体のパイロットに操って貰いたいと考える者。そして、自分が作ったガンプラで、本物のパイロットと戦ってみたいと考える者…しかし、そのどちらも本来なら叶う願いではない。再現された疑似人格のＡＩで戦わせる事しかできない」
其処まで聞いた所で、シンは漸く竜也の言いたい事を理解する。
仮面で隠し切れない程の闘志が彼の目に宿っているのが伝わって来る。
「…メイジンは、どっちなんですか？」
「…私は後者。君との戦いを所望する！」
そう言って竜也は、懐からシャア専用ザクのカスタム機と思しきガンプラ…【バリスティック・ザク】を取り出した。
「抜け駆けしてんじゃねーよ」
其処に水を差すかの様にレイジが口を挟む。
「戦いてぇのはお前だけじゃねぇ。な、セイ？」
「お願いします…結城先輩の後でも構いませんので、僕達のガンプラと戦って下さい！」
深々と頭を下げる聖と、竜也と同じく懐からガンプラを取り出すレイジ。

その手に握られているのは、ガンダムｍａｒｋⅡのカスタム機である【ビルドガンダムｍａｒｋⅡ】。
やれやれ、と言った様子で笑みを浮かべるシン。
「…まずは案件が終わってから、だな」
「「!!」」
「良いぜ…本物のガンダムパイロットの力、見せてやるよ！」
メイジン＆世界チャンピオンＶＳリアル・ガンダムパイロット。
その夢のカードが、今まさに実現しようとしていた。

# 第7話「説明書はちゃんと読みましょう」

「じゃあ、早速作って行こうか」
安室の指示に従い、3人がガンプラの箱を開ける。
「まずは、パーツが全部揃っているか確認して…「にぇぇぇぇぇ!!」っておいおい!?」
包みを開いてパーツを取り出した途端に手でもぎ取ろうとするみこを慌てて安室が制止する。
「今説明したばかりだろう!・まずはパーツが全部揃っているかどうかを確認するんだ!・稀ではあるが、パーツが足りない事もあるからな。それに、切り離す時はニッパーを使うんだ!」
そう言って安室がニッパーを手渡した途端に…
「お?・おお〜!・本当によ〜切れるにぇ!」
「手当たり次第にすんなー!」
説明書も読まず、滅茶苦茶にパーツを切り取って行くみこにシンのツッコミが炸裂する。
「あれ?・角がどっか行っちゃったにぇ」
「ほら言わんこっちゃ無い!・ほら、此処にあるぺこ!」

数時間後。
「や、やっと…」
「完成したぺこ…」
みこのザク、ぺこらのガンダム、シンのデスティニーが何とか完成した。
「お、お疲れ様です…」
「てんでダメだな…」
「ま、まぁ、完成には漕ぎ着けたから良しとしようじゃないか。な?・」
苦笑しながら労いの言葉を贈る聖と、呆れた様に批評するレイジ。
竜也が辛くもフォローを入れるが、やはり呆れ果てているのが目に見えており、苦笑いを浮かべていた。

「じゃ、じゃあ早速動かしてみようか。作ったガンプラを持ってついて来てくれ」
安室の指示に従い、一同は部屋を出て、バトルシステムのある部屋へと向かう。
道中でＧＰベースを受け取り、目的の部屋に到着すると、バトルシステムが既にプラフスキー粒子を散布しながら待機していた。
「この中でガンプラは戦うのか…」
「ビームや弾丸、被弾した時の破損や爆発も、この粒子によって視覚的に演出されるんだ。前会長のマシタＣＥＯが持ち込んだ技術だよ」
「つっても、アイツはウチからアリスタ盗んだだけだけどな」
安室の説明に茶々を入れるかの様に吐き捨てるレイジ。
彼からすれば、自分の家から盗んだものを使って莫大な金儲けを働いた挙げ句、世界大会で散々自分と聖の妨害を謀ったマシタの事はもう思い出したくもないのだろう。
だが、そのマシタによって開発されたガンプラバトルに熱中し、あまつさえ世界チャンピオンの座にまで上り詰めてしまった事に皮肉を感じてもいるレイジであった。

『Ｓｅｔ　ｙｏｕｒ　ＧＰｂａｓｅ』
バトルシステムのアナウンスに従い、貸与されたＧＰベースをセットする３人。
ＧＰベースにプレイヤー各々の名前と、使用するガンプラの機種が表示される。
『Ｐｌｅａｓｅ　ｓｅｔ　ｙｏｕｒ　ＧＵＮＰＬＡ』
３人がそれぞれガンプラを台座の上に置くと、カタパルトが展開され、発進準備が完了する。
「シン・アスカ、デスティニー！行きますッ!!」
「みこ、ザク、行くにぇ!!」
「ぺこーら、行きまーす!!」

３人の掛け声と共にガンプラが発進する。
ステージは【コロニー】が選択されており、カタパルトから射出された機体の眼前には宇宙空間が広がっていた。
「凄いな、こんな高いレベルで再現できるなんて…でもあのコロニーの形、何時見ても慣れないなぁ」
デスティニーを操作しながら呟くシン。
Ｃ．Ｅの砂時計型のコロニーしか知らないシンにとって、他のガンダムシリーズで主体となっている円筒型コロニーはやはり違和感が強い。
ガンプラの操縦に関しては、本物のＭＳに比べると細かい操作が利かないが、その分簡略化されていて動かし易い。
慣れるまでにそう時間は掛からないだろう。
「兎田ぁ！ぶつかんじゃねぇにぇ！」
「こっちのセリフぺこだよ！みこ先輩の下手くそ！」
――あっちはそうではないらしいが。
さっきから何度もコロニーの外壁やデブリ、互いに機体にぶつかり、口論しながら飛んでいる。
やいのやいのと言い合っている内に２人共操作に慣れたらしく、流れる様に戦いを開始する。
その様子を、シンは苦笑しながら見ていた。

「にぇぇぇぇぇぇーーーー!!」
咆哮を上げながら斧で斬り掛かるみこのザク。
ぺこらのガンダムはその一閃をシールドで受け止め、ビームサーベルを抜刀し、袈裟懸けに振り下ろす。
サーベルはザクの胸を掠めるが、間一髪で躱し切る。
「見せて貰うにぇ！兎田のガンプラの性能とやらを！」
スラスターを吹かせて一気に加速を掛け、離れた距離を詰めに掛かるザク。

しかし、ガンダムは襲い掛かって来るザクを少し横にずれるだけで回避してみせた。
「軌道が見え見えぺこ」
「おぶっ!?」
そのままザクは勢い余って、進路上にあった隕石に頭から突っ込んだ。
ギャグ漫画みたいに隕石に頭を埋めるザク。
「勢い付け過ぎたにぇ…」
「アホぺこじゃん」
「うるせぇ！見てろ兎田ァ!!」
だが、事もあろうかザクは姿勢を建て直し、隕石を被った頭で体当たりを繰り出して来た。
「たかが石ころ1つ、こうしてやるぺこ！」
ビームライフルを構え、最大出力で隕石と化したザクを迎撃する。
派手な爆発が起こり、撃ち抜かれた隕石が粉々に砕け散った。
「甘いにぇ！」
爆煙を突き破って隕石の拘束から逃れたザクが姿を現す。
その手には発射準備が完了したバズーカが構えられており、みこは引き金を至近距離で引いた。
「バカたれっ！こんな距離でバズーカを…」
時既にお寿司かっぱ寿司。
爆発に巻き込まれた2機は、纏めて木っ端微塵になった。
「何やってんだあんたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
「ば、爆発オチという事で」
「ふざけんなぺこだよ！」
勝者、シン・アスカ（不戦勝）。

「…」
「ひっでぇザマだな…」
「あはははは…」

呆然とする聖。
呆れ顔で悪態を吐くレイジ。
笑うしか無い竜也と安室。
ギャグマンガじみたみことぺこらの戦いを目にした一同の反応は三者三様だった。
そこへ、何もせずに傍観していただけで勝ち残ってしまったシンが声を掛けた。
「…そろそろ俺と闘りませんか？」
「「!!」」
この言葉に一気に目をギラつかせた者が３人。
チャンピオンコンビとメイジンである。
「流石にこんな勝ち方は消化不良なんで…３人も早くやりたいでしょ？纏めて相手しますよ」
３人はろくに返事も返さずに駆け出し、ＧＰベースとガンプラをセットする。
「やはりファイターとしての血が騒いだか…」
後ろで見守る安室が静かに呟く。
「行くよレイジ！結城先輩！」
「ああ！」
「此方の準備はできている!!」
『Ｂａｔｔｌｅ　ｓｔａｒｔ』
「ビルドガンダムＭａｒｋⅡ！」
「行くぜぇッ!!」
「バリスティックザク！出る!!」
合図に合わせ、待ってましたと言わんばかりに２機のガンプラが発進する。

「オラァァァァァァッ!!」
咆哮を上げながらサーベルで斬り掛かるレイジ。
その背後からは竜也のザクが放つバズーカの弾頭が襲い掛かって

来る。
シンはライフルでバズーカを迎撃しつつ、振り下ろされたサーベルを左手に携えたフラッシュエッジで受け止める。
ＭａｒｋⅡを蹴り飛ばして距離を取り、ライフルを放とうとするが、再びザクのバズーカが火を吹いた。
頭部ＣＩＷＳで弾頭を撃ち落とし、フラッシュエッジを投げ付ける。
不規則な軌跡を描いて急迫するブーメランに、ザクはバズーカを破棄して囮にする事で難を逃れた。
ザクとＭａｒｋⅡは即座にビームライフルを抜き、射撃戦に移行する。
シンも右手のビームライフルと左手のパルマフィオキーナで応戦する。
「ガンプラの出来は僕達の方が上の筈なのに…！」
「これが…本物の戦場を経験したパイロットの力か！」
自分達の攻撃はデスティニーを捉える事すら叶わず、逆にシンの攻撃は先程からずっと自分達を的確に仕留めに掛かっており、２機で互角の戦いに持ち込むのがやっとだ。
次元の違う強さに歯噛みする聖と竜也。
…その一方で。
「ハハハ…ッ！面白ぇじゃねぇか！」
レイジの眼に火が灯る。
世界で頂点を取ってしまった事でタメを張れる相手がいなくなった事や、故郷の王になる勉学の為に、満足にガンプラバトルを楽しめる環境が少なくなってしまった事で、彼の中には「自分と鎬を削れる程の相手との熱い戦い」への渇望が芽生えていた。
そして、その渇きを想像以上の形で満たしてくれる存在が目の前にいる。
自分が終生のライバルと認めた男であり、メイジンの称号を継いだ竜也とコンビを組んでやっと互角に戦える猛者。
「最高だぜ、お前ッ!!」

闘争への欲求を満たしてくれるシンへの感謝と興奮に、レイジは獣の様な凶暴な笑みを浮かべた。

「思った以上にやるな…！」

２機の猛攻に応戦しながら、デスティニーを駆るシンが呟く。

ガンプラの出来栄えの差や数の差もあるとは言え、実際の戦闘を経験した自分と互角に渡り合っている。

ザフトでも赤服を着れるレベルだろう。

チャンピオンとメイジンの名は伊達ではない、という事か。

「!!」

ＭａｒｋⅡのバックパックが分離し、自律ユニットとなってビームを連射しながら襲い掛かって来る。

更にザクの肩部に増設されたコンテナからファンネルが射出され、ビームでデスティニーの動きを封じ込める。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーッッ!!」

「ッ!!」

ビームを回避する事に意識を割いていたシンの隙を突いてＭａｒｋⅡがサーベルを振り下ろして来る。

ステップでギリギリ回避したが、ビームライフルが真っ二つに両断され、爆散する。

「チッ…！」

慌てて距離を取り、フラッシュエッジを投擲する。

弧を描いて飛翔するブーメランが、ＭａｒｋⅡの飛行ユニットのライフルを切り飛ばした。

更にシンはブーメランにパルマフィオキーナのビームを放つ。

掌から放たれたビームはブーメランのビームと相互干渉、拡散され、ザクのファンネルを全機撃ち落とした。

「何!?」

「今のは…！」

「ビームコンフューズか…ッ!!」

ビームコンフューズ。
ブーメランの様に投擲したビームサーベルにビームライフルを放つ事で、そのビームを拡散させ、広範囲に攻撃を行う、機動戦士Ｚガンダムの主人公【カミーユ・ビダン】が使用した戦術だ。
シンの場合は精密な操作ができるブーメランなので、より簡単に行う事ができるのだ。
「くっ…！」
ビームライフルを構え、デスティニーに照準を合わせるザク。
しかし、シンの方も既に迎撃準備ができており、右手のパルマフィオキーナを構え、互いにトリガーを引く。
双方の銃口が同時に火を吹き、ザクのライフルが右腕ごと破壊される。
デスティニーもまた右腕を撃ち抜かれる。
「チャンスだ！レイジ!!」
「貰ったぁぁぁぁぁぁぁ!!」
一気に距離を詰め、ビームサーベルを突きだすＭａｒｋⅡ。
サーベルはそのままデスティニーを貫いた。
…筈だった。
「嘘だろ、オイ…！」
ＭａｒｋⅡのサーベルが貫いたのは、デスティニーの頭部だった。
完全な回避が不可能だと判断したシンは、機体を僅かに下にずらす事で辛うじてコックピットへの直撃を避けたのだ。
そしてとどめを刺すべくＭａｒｋⅡが距離を詰めて来た事を逆手に取り、逆にデスティニーのフラッシュエッジでＭａｒｋⅡの胴体をバックパックごと貫いた。
しかし、此処でレイジが思いも寄らぬ反撃に出る。
「！」
自身の腹部を貫いたデスティニーに組み付き、拘束したのだ。
「今だ！ユウキ!!」
レイジの叫びに応える様に、長大な斧【ダブルビームトマホーク】を構えたザクが斬り掛かって来る。

「このォ!!」
しかし、シンも只ではやられない。
フラッシュエッジの柄から手を離し、自身に組み付くＭａｒｋⅡの右腕をパルマフィオキーナで粉砕して拘束を解き、同武装でザクを迎え撃つ。
「うおおおおおおおおおおおおおおッッ!!」
斧がデスティニーへと振り下ろされ、掌の光がザクの腹部へと突き出される。
そして…

「見事な勝負だったよ、４人共」
汗だくでへたり込む４人に、安室がスポーツドリンクを手渡す。
システムの上には、バラバラに大破した３機のガンプラが横たわっていた。
「いや～、負けた負けた。物の見事に負けちまったぜ」
「何言ってんだよ…相討ちだろ、あれは」
「いや、レイジ君が隙を作ってくれなければどうなっていたか…あれは実質、負けた様なものだ」
「やっぱり本物のガンダムパイロットは凄いや…！」
爽やかな笑みを浮かべながら互いの健闘を讃え合うシン達。
「何かもう…全然次元が違ったにぇ」
「ぺこーら達のバトルがまるで子供の喧嘩に見えて来るぺこ…」
バトルのあまりの凄まじさに開いた口が塞がらないぺこみこの２人。
「なぁ、またやろうぜ。今度は勝つ！」
「ああ、次も負けないぜ」
そう言って、シンとレイジは握手を交わす。
ＭＳの戦いをこれ程までに楽しいと感じる日が来るとはな、と感慨に耽りながらシンは笑みを浮かべた。

因みにこの案件の動画の再生回数は１日で３００万回を超え、シンのチャンネル登録者数も５６万人に跳ね上がったのは嬉しい誤算だった。

# 第８話「泳ぐ時は水着を流されない様注意しろ」

照りつける太陽。
青空を羽ばたくカモメの鳴き声。
さざ波の音。
「シン君、こっちこっち～！」
「はいはい」
そらに先導されるがまま、道具を抱えてついて行くアスランとシン。
今彼等がいるのは真夏の海である。
新しいファンブックの為の写真撮影に来ているのだが、自由時間がスケジュールの半分以上を占めており、ほぼほぼ社員旅行と言っても過言ではない。
この為にわざわざビーチを近隣のリゾートホテル含めて貸し切りにしたのだと言う。
「何か俺の場違い感凄ぇな…」
「実際、お前はまた別枠で女性向けとして撮るらしいからな」
水着姿ではしゃぎ回る皆を眺めるシンの呟きにアスランもそう返す。
余談だが２人も水着姿であり、シンは赤い海パンにフードの付いた白い半袖の上着、額にはスポーツサングラスを掛け、アスランは青い海パンに赤いアロハシャツという普段の服装からは考えられない程はっちゃけた格好だ。
何だかんだ彼等も若者。
遊べる時は遊ぶ気満々なのである。
「シン君！あっちでビーチバレーやろ！」
「ちょっ、メル先輩!?」
メルに腕を引っ張られて行くシンを見送っていると、傍にいた友人Ａが溜め息を吐きながら呟いた。
「何で私達まで水着なんですか…」
「俺に聞かないでくれ」

「それも、のどかちゃんに比べて何で私は…」
「あ、あはははは…」
友人Ａのぼやきに苦笑する後輩スタッフの【春先のどか】。
彼女達も何故かホロメン共々被写体として扱われており、友人Ａは競泳水着、のどかは白いビキニ姿だ。
「とりあえず…ほら、これを」
「えっ？」
そう言って、自分が着ていた上着をのどかに着せるアスラン。
「そんなに派手な水着だと、日焼けしたら大変だろう？気休め程度にしかならないと思うが…」
「あ…ありがとうございます…」
「アスラーン、ビーチバレーの準備手伝って下さーい」
「おっと…わかった！今行く！では俺は先に行っているぞ」
シンに呼ばれて手伝いに向かうアスランをぼんやりと見詰めるのどか。
「…のどかさん？」
「ひゃ、ひゃいっ!?」
「何だか顔が赤いですよ？夏風邪ですか？」
「ふぇっ!?だ、大丈夫です！ひ、日焼けでもしちゃったかな…あはははは」
笑って誤魔化すのどかと、どうにもぎこちない彼女の返答に訝しげな表情を浮かべる友人Ａ。
一方ののどかは…
「（あ、あれ～…？何かドキドキした様な…）」

「ふぅ…これで一通り終わったか」
建てたポールにネットを張り、砂浜にラインを引いて、ビーチバレーのコートを遂に完成させたシンとアスラン。
「流石元軍人だね～。力仕事はお手の物かな？」
ツインテールの女性…ホロライブ1期生の【アキ・ローゼンタール】

の称賛に対し、内心「あんた程じゃねーよ」とツッコミを入れる。
彼女とノエルの力に比べれば、自分達等足元にも及ばないだろう。
あの華奢な手足の何処にデスティニーのハッチを力ずくで抉じ開ける程の人間離れした力があるのだろうか。
アキもそんなノエルに次ぐレベルのパワーリストであり、ムキロゼとまで呼ばれている程だ。
「パッと見ただけで鍛えてるってわかるよね～」
「お2人共すっごくセクシーですよね～、どうですかぁ？あっちの岩陰で船長とイイ事しまｓ「よし、早速始めようか。審判は俺がやろう」ね”え”え”!?無視しないで下さいよぉ!?」
関心していた0期生のロボット【ロボ子さん】に続ける様に2人を誘惑しようとしたマリンの言葉を遮り、アスランがビーチバレーの開始を宣言した。

「シン君、パス！」
「でぁぁッ!!」
そらが打ち上げたボールをシンが相手のコートに叩き込み、
「オーライ！ノエちゃん！」
「せぃ!!」
それをフレアが受け止め、ノエルが打つ。
「うぐぁ…ッ!!」
飛来するボールをシンが真正面から受けるが、余りの威力に腕に痺れが走る。
それでも何とか打ち上げ、そらに繋ぐ。
「そら先輩！」
「えぇい!!」
思い切り腕を振り下ろすそら。
「「あっ!?」」
ボールは指先を掠めてフラフラと落ちて行くが、辛うじてネットを超えており、そのまま地面に落下。

強烈な一撃が来ると読んでいたノエルとフレアは反応が遅れ、ボールを拾い損ねてしまう。
こうしてシンとそらは決勝点となる２５点目を獲得し、無事勝利を掴み取った。
「危なかったぁ…」
「ま、結果オーライって事で」
そう言ってハイタッチを交わすそらとシン。
「ごめんね、ノエちゃん…」
「う～、大胸筋ぷるぷる大作戦は失敗じゃったか」
「いや何ですかその作戦！」
どうやら自分達の胸の大きさを利用してシンを誘惑し、彼の集中力を削ぎ落とそうとしていた様だ。
全く効果は無かった様だが。
「（危ね～…目に毒だったよちくしょう…）」
…前言撤回。
表に出さなかっただけでかなり効いていたらしい。
まぁ年頃の男の子だし、仕方無いよね。
「…」
一方のそらは、頬を膨らませながら自分の胸に触れる。
一応彼女も巨乳に分類されるレベルの大きさはあるが、それでもやはりノエルやフレア、ちょこの様な爆乳レベルと比べると若干見劣りしてしまう。
「やっぱり大きい娘の方が良いのかなぁ…」
「大きい方が良いって何の話ですか？」
「ひゃあ!?」
背後からシンに声を掛けられ、思わず素っ頓狂な声を上げてしまう。
「（しまった、口に出ちゃってた！）」
その事に気付いた時には既に時遅し。
邪な感情の一切無い純粋な疑問として問うて来るシンの目が逆に痛くて、恥ずかしくて、何も言い出せなくなってしまう。

「あ～、その…ごめん、こっちの話」
辛うじて捻り出せた返答も無意識に目が泳いでしまい、かなり苦しい言い訳なのが自分でもよくわかる。
「？よくわかんないですけど…取り敢えず、そろそろ昼飯にしますよ」
「う、うん。そうだね。私もお腹減っちゃった」
バレなくて良かった、とホッと息を吐きながら、そらも調理の準備を手伝い始めた。

暫くして昼食時。
シンが金網の上で肉や野菜、魚介類を焼いていると、後ろからも何かを焼く音が聞こえて来た。
「…あっちで何やってんですか？」
「焼きそば作ってるのら」
「…何ですか、この甘ったるい様な酸っぱい様な臭いは」
「…ハアチャマッチャマ―」
「…あんたって人はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
「ヴェェ!?何でバレたのぉぉぉぉ!?」

# 第９話「火薬に火を点けなければ花火は上がらない」

「夏祭り…ですか？」
「うん、この近くであるんだって～」
夕方、写真撮影と海水浴をたっぷりと楽しみ、ホテルの部屋で寛いでいた時。
部屋に押し掛けて来たロボ子がそんな話をして来た。
因みに彼女は既に朝顔の花が描かれた真紅の浴衣を身に纏っており、行く気満々である。
「ＹＡＧＯＯが浴衣も用意してくれたんだ～♪」
「本当用意が良いな、ＹＡＧＯＯのおっさんは」
「シン君のもあるよ～、ほら」
「マジですか」
ロボ子が取り出したのは、濃紺色の男性用浴衣。
「じゃあ下で待ってるね～」
そう言ってロボ子は部屋を出て行った。
残されたシンは、髪を掻きむしりながら1人ごちる。
「…浴衣って、どうやって着るんだ？」

「お待たせしました～…」
「遅かったわね」
「あはは、浴衣なんて初めて着たんで…」
浴衣に着替えてエレベーターから出たシンに、ちょこが声を掛ける。
ネットで調べながら浴衣を着終え、ホロライブの面々が待つホテルのロビーへと下りる頃には、既に２０分が経過していた。
既に皆浴衣に着替えており、今度着方を教わっておこう…とひっそりとシンは考える。
…因みにアスランは更に１５分遅れてやって来た。

「色々あるんだな…」
道中の屋台で購入したホットドッグを齧りながら、シンはぼそりと呟く。
辺りは既に人で賑わっており、綿飴、タコ焼き、焼きそば、お好み焼き、かき氷、林檎飴、輪投げ、金魚すくい等、様々な屋台が並んでいる。
これを全部見て回るのは大変だろう。
…その中に金髪と銀髪の２人組の青年が経営する炒飯の屋台や、チリソース派の女性店員とヨーグルトソース派の中年男性店員が揉めているケバブの屋台があったが、シンは見なかった事にした。
というより、見てはいけない様な気がした。
「ァ〟ァ〟ァ〟ァ〟」
何処かで聞いた様な声が響く。
声の主を探して辺りを見回すと、射的の屋台で銃を片手に奇声を上げるちょこの姿があった。
「ハハハ、残念だったな姉ちゃん」
「うぅ〜…」
涙目で唸るちょこを見兼ねて、シンも同じ屋台へと向かう。
「おっさん、俺もお願いします」
「はいよ、１回５００円ね」
代金を支払って銃と弾を受け取った後、傍で涙ぐむちょこに声を掛ける。
「何が欲しいんですか？」
「え？えっと…あの縫いぐるみ」
ちょこが指差した先にあるのは、やや大きめな黒猫の縫いぐるみ。
「…わかりました」
一気にシンの目付きが変わる。
こういうのは高価な物、大きな物から狙ってはいけないという鉄則があるのだが、簡単に取れる様な小さな菓子類等は的が小さくて狙いづらいという落とし穴がある（作者談）。

銃に弾を込め、狙いを定める。
そして…
――銃声が響く。

「マジかい、あんちゃん…」
「ガチぃ?」
結果、シンは3発でちょこが欲していた縫いぐるみを仕留め、残りの4発で隣にあるチョコ菓子の詰め合わせを撃ち落とした。
「あっ、これ、どうぞ」
撃ち落とした景品をちょこに手渡すシンの顔からは、既に先程の戦士の雰囲気は消え失せていた。
「…ありがとう、シン様」
「ちょこ先〜!かき氷買って来たよ〜!」
其処にホロライブ2期生である魔法使いの少女【紫咲シオン】と紫玉ねg…ゲフンゲフン、メイドの少女【湊あくあ】の2人組が人混みを掻き分けて来る。
2人の手には苺、レモン、ブルーハワイのかき氷が握られている。
「あっ!?」
次の瞬間、あくあが大きく態勢を崩した。
後ろにいた他の客がぶつかったのだ。
「!!」
彼女が手に持っていたかき氷が宙を舞い、ちょこの胸元へと吸い込まれ…

「うっわ、冷てっ…大丈夫ですか?」
…間に割って入ったシンの浴衣をびしょ濡れにした。
「え、ええ、大丈夫よ」
「うわー!シン君ごめん!」
慌てて手に持っていたポケットティッシュでシンの身体を拭き始

めるあくあ。
「シン様こそ、折角の浴衣が…」
「別に良いですよ。先生の方が浴衣似合ってますし、そっちの方が汚れたら大変だ」
「…っ」
優しく微笑むシンの顔に、ちょこの胸がトクン、と微かに高鳴りを覚える。
――あれ？
ちょこ、何でこんなにドキドキしてるの？
「ってかあくあ先輩、そのティッシュ何ですか？」
「…くじ引きの残念賞」
そんなちょこを尻目に、シンは何食わぬ顔であくあが持っていたティッシュについて雑談していた。
この男、平然と臭い台詞を言ってしまえる割に鈍感属性持ちなのである。
そんなシンをジト目で見詰めるシオン。
「どうしたんです？シオン先輩」
「…無自覚女誑し」
「はぁぁ!?」
唐突に女誑し呼ばわりされ、頭に血が上るシン。
一方のちょこは、シオンに自身の胸の内を見透かされた事に気恥ずかしさを覚えていた。
結局、アスランによる仲裁が入るまで2人の言い争いは続いた。

「そろそろ花火大会が始まる時間ね」
「そうですね」
時刻は既に7時45分を回っており、辺りは暗くなり始めている。
8時から花火が上がり始め、祭りも終わりを迎えるのだ。
「花火を間近で見られたら、凄くロマンチックでしょうね～」
「いや、流石にそんな事できる訳…」

其処まで言った所で、シンの言葉が止まる。
ちょこが怪訝な顔を浮かべながら、シンの顔を覗き込む。
「…ありました、傍で花火見る方法」
「ガチぃ？」
「ついて来て下さい！」
シンがちょこの腕を引いてやって来たのは、ホテルの駐車場。
其処に停めてある黒と黄色で彩られたサイドカーに近付き、ヘルメットを投げ渡す。
「シン様、バイクなんて持ってたの？」
「先月買った俺の愛車です」
…ボディに『ＳＭＡ〇Ｔ　ＢＲＡＩＮ』とかいうロゴが刻まれているのは気にしないでおこう。
「じゃ、行きますよ！」
そう言ってシンはサイドカーのエンジンを噴かし、ホテルの駐車場から走り去った。
道中、シンはずっと考えていた。
「（…この角どうなってんだ？）」
…ヘルメットから透過して突き出ているちょこの角を見ながら。

「これって…」
「…こんな形でまた動かす事になるなんてな」
目的地に着いたシンとちょこの目の前にあるのは巨大な扉。
シンが扉の近くにあるタッチパネルにパスワードを打ち込むと、ゴゥン…と重々しい音が響き渡り、ゆっくりと扉が開いて行く。
そして、扉が完全に開くと、其処にあったのは…
「よう…よく眠れたか？相棒（デスティニー）」
…涙を流し、大きな翼を背負った、鉄灰色の巨人の姿。

コックピットに座り、機体のセットアップを開始する。
「ねぇ、シン様」
「何ですか？」
起動シークエンスを続けながら、後部に増設されているサブシートに座るちょこからの質問に答える。
「まさか…これで花火の近くまで行くって事？」
「正解です」
コックピット内の各種コンソールが起動し、点灯して行く。
システムの起動と共に中央のディスプレイがポップアップし、ＯＳが起動する。
『Ｇｕｎｎｅｒｙ
Ｕｎｉｔｅｄ
Ｎｕｃｌｅａｒ－
Ｄｅｕｔｒｉｏｎ
Ａｄｖａｎｃｅｄ
Ｍａｎｅｕｖｅｒ
ＳＹＳＴＥＭ
ＺＧＭＦ－Ｘ４２Ｓ　ＤＥＳＴＩＮＹ』
ＯＳの起動が確認され、デスティニーの目が点灯する。
「シン・アスカ、デスティニー、行きます!!」
装甲がトリコロールカラーに色づき、赤い光の翼を広げながらデスティニーが空を翔る。

「綺麗ですね～」
「ああ、そうだな」
祭りの会場から少し離れた所にあるベンチで、アスランはのどかと共に花火を見上げていた。
「今日はリードしてくれてありがとう。こういった催しは初めてだったから、助かった」

「いえ、お役に立てたなら良かったです！」
所謂「良い所育ちのお坊っちゃん」であるアスランにとってこういった騒がしい催しは余り馴染みが無く、今日はのどかにサポートして貰いながら祭りを楽しんだ。
何処と無く良い雰囲気が漂う２人。
――グオオオオオオオオオオオオオッ!!
「!?」
そんな２人の上空を、轟音を上げて何かが飛んで行く。
驚いた２人が自分達の真上を飛んで行った何かを目で追うと、赤い翼を広げた巨大な物体が飛んで行った。
「い、今のって…」
「…デスティニー…だったな」
ぽかんとした表情を浮かべる２人の視界で、デスティニーは周りの風景に溶け込む様に姿を消した。

「…これで周りからは見えない筈ですよ」
「凄い…！」
ミラージュコロイドを起動させ、姿を消したデスティニーのコックピットの中でシンとちょこは花火を鑑賞する。
間近で見る花火は迫力も美しさも段違いであり、シンも思わず息を呑んでしまう。
本当は嘗ての相棒を痛々しい姿のままにしておきたくはない、という酷くロマンチストじみた考えで修復したのだが、まさかこんな形で役に立ってくれるとは。
目の前で次々に打ち上げられる花火を録画し、デスティニーのデータベースに保存して行く。
それは、再び役に立ってくれたデスティニーへのちょっとしたご褒美。
「シン様」
自分の隣で花火を眺めていたちょこが、ふと声を掛けて来る。

「…ありがとう」
そう言ったちょこの顔がほんのり赤くなっている様に見えたのは、きっと花火のせいだろう。
「…どういたしまして」
シンが返事をしたのと同時にちょこの傍に打ち上がった花火がハートの形をしていたのは、きっと深い意味は無い筈だ。

# 第１０話「誕生日は大人になるとそんなに特別な日でもなくなる」

「皆が隠し事を？」
「はい…」
仕事を終え、一息吐いていたアスランの元にシンが相談を持ち掛けて来る。
シンの話では、どうも1週間程前からホロライブの面々が内緒話をしている事が多いらしい。
盗み聞きも良くないだろうとシンも当初は特に気にしていなかったが、余りにもその頻度が多く、遂に何の話をしているのか直接聞いてみたが「デリカシーが無い」とミオに怒られてしまった。
「悪口とかじゃないから安心しろ、とも言われたんですけど…」
「ふむ…わかった、俺の方からも聞いてみよう」
「すいません、お願いします。じゃあ先帰ってますね」
あ、今日の夕飯はロールキャベツですよ、と最後に付け加えて事務所を出るシンの姿を見送ると、アスランはスマホで誰かに連絡を取り始める。
「もしもし、俺だ。シンが違和感に気付き始めている…ああ、そろそろ誤魔化すのも限界だ。慎重に慎重を重ねて計画を進める様に、良いな？…よし、では各員の健闘を期待する」

「皆の様子がおかしい？」
「はい、何か心当たりありませんか？」
翌日の朝、出勤して来た友人Ａとのどかに尋ねるシンとアスラン。
「内緒話、ですか…私は何も。のどかさんは？」
「私も特に心当たりは…」
「２人も知らないか…すまないな、忙しい所」

「すいません、何かあったら私とのどかさんも手伝いますので」
めぼしい情報は何一つ得られなかったが、一先ず協力者は得られた。

「いや、私は何も知らないけど…」
「ＹＡＧＯＯのおっさんも知らないのか…」
次に尋ねたのは、社長のＹＡＧＯＯ。
だが、やはり心当たりは無いとの事。
「あんまり気にする事も無いんじゃないか？何か悪い事たくらんでるって訳でも無さそうなんでしょ？」
「それはそうですけど…」
「女同士の話にづけづけ突っ込むと、デリカシー無いって怒られるよ？アハハハ」
「もうミオ先輩に怒られました」
「いや手遅れかよ!!」

「結局、えーちゃん達もＹＡＧＯＯのおっさんも何も知らないみたいですね」
「まさに八方塞がりだな…」
何一つ情報を得られなかった事を残念がるシンと、彼に話を合わせるアスラン。
「一先ず、また明日から調査を再開しよう。今日はもう遅い」
「そうですね」

草木も寝静まる深夜。
シンとアスランが暮らす家の中、アスランの自室。
作業台の照明のみを光源にして1人作業に没頭するアスランの姿があった。

無数のコードでパソコンに繋がれた金属製の物体をはんだごてで溶接しながら、配線を繋ぐ。
その作業を終えると、パソコンのキーボードを操作してプログラムを入力して行く。
「よし、後少し…後少しだ」
そう呟きながら思考の海へと沈み込んでいくアスラン。
彼の作業が終わったのは、朝日が上り始めた頃だった。

「…アスラン？大丈夫ですか？」
「ああ、大丈夫だ…」
朝起きると、自室から出て来たばかりのアスランと遭遇したシン。
彼の目元には青黒い隈が浮かんでおり、「機材の整備やアップデートをしていたらそのまま朝を迎えてしまった」との事。
シンは微かに違和感を覚える。
機械弄りが趣味と豪語しており、社内でも異次元レベルの技術力を持っているアスランが徹夜する程の整備とは一体どれ程のものなのだろうか？
――――まぁ、アスランがそう言うなら信じよう。
そう決めて詮索を止めるシン。
…しかし、彼は大事な事を失念していた。
目の前にいる男は、２度もザフトを裏切っている人物なのだと。
「（作戦決行まで…あと６日か…）」
アスランはカレンダーを見て、誰にも聞かれる事無く心の中で呟いた。

「…」
「シン君、機嫌悪いね…」
「痺れ切らしてるのかも…」

こそこそと小声で話をするのは【雪花ラミィ】と【桃鈴ねね】。
その日、シンは事務所で1日中ブスッとした表情を浮かべていた。
無理も無いだろう。
皆自分に隠して何か計画を立てており、完全に除け者にされてしまっているのだから。
仲間外れにされている苛立ちが徐々に募り、それが遂に表に出始めたのだ。
「何かねね、流石に可哀想になって来たんだけど…ラミィちゃん何とかしてよ」
「いや無理だよ！絶対にバラすなってアスランさんにも言われてるし…！」
「お～っす、どしたの？機嫌悪いじゃん」
そんな中、2人の同期であるホワイトライオンの獣人【獅白ぼたん】がシンに声を掛けた。
「別に…」
「いやいや、無理しなくて良いよ？相談なら乗るから」
そう言って拗ねるシンにコーラの缶を手渡すぼたん。
シンは受け取った缶のプルタブを開け、コーラを煽ると、ふてぶてしい顔で同じ質問をぶつけた。
「ははぁ～、それで拗ねてたって事ね」
「別に、何か俺に都合の悪い事考えてるとかじゃないらしいんで気にしてないです」
「いや、気にしてるよね絶対…」
自身もモ〇エナを喉を鳴らして飲むと、ぼたんは口を開いた。
「一応あたしは知ってるよ？皆が何してるか」
「え？」
「でもごめんね～、『その日』が来るまで教えるなって言われてるんだよね」
「その日？」
新しいワードに首を傾げるシン。
端で聞いていたラミィとねねがビクッ、と身体を跳ねさせる。

「ま、シン君は『その日』が来るまで楽しみにしてなよ。そうすればわかるから」
「あ、ありがとうございます…」
まだ詳しい事はわからないが、これで1つ真相に辿り着けた喜びでシンの表情が解れる。
ラミィとねねは、バレなかった事に安堵の息を吐いた。

『…そうか、ヒントを与えたか』
「ごめん、あのまま本格的に機嫌悪くされるよりはマシかなと思って」
『いや、俺も君の判断に賛成だ。よくやり過ごしてくれた』
シンをやり過ごして10分程経った頃。
トイレの個室に隠れてアスランと電話するぼたんの姿があった。
「あと少しだね」
『ああ、君達の協力が無ければ此処まで上手くいかなかっただろう。後は俺に任せてくれ、何とかしてみせる』
「うん、わかったよ」
そう言って通話を終了するぼたん。
「過保護だねぇ…」

「引っ越し…ですか?」
夕方、事務所から帰宅して夕食の準備をしているシンにアスランが話を持ち掛けた。
「ああ、タレントと一部スタッフ専用の社員寮ができるらしくてな。お前はどうする?正直、家賃の掛かる借家暮らしより良いと思うんだが…立地も快適性も、その寮の方が遥かに良いらしい」
「…わかりました。じゃあ引っ越しましょうか」
暫く考え込んだ後、シンは話を承諾。
「(…よし、これで条件は全てクリアされたな)」

「…すっげぇ」
6日後、今までの仮住まいを出て社員寮のある住所へ愛（サイド○ッシャー）車を走らせたシンが目にしたのは、富豪が建てた豪邸と見間違える程のやたら豪勢な社員寮だった。
「1階はロビーと食堂になっている。2階がスタッフ、3階がタレントの居住エリアと大浴場だ」
「へぇ～…」
バイクを駐車させ、横に『ホロライブハウス』と書かれた看板が掛かった玄関口の扉を開けるシン。
…その直後、炸裂音が響き渡る。
「!?」
反射的に扉を閉じ、陰に隠れる。
…しかし、追撃が何時まで経っても来ない。
不審に思いながらゆっくりと扉を開けると。

「「「「お誕生日おめでとう！シン君!!」」」」
「…へ？」
目の前には発射直後のクラッカーを構えたホロライブの面々と、派手な装飾を施されたロビーがあった。
彼女達の傍には、これでもかと積み上げられたプレゼントの山が聳え立っている。
「驚いた？この為に皆で準備してたんだよ！」
「この建物も本来はお前のパーティー会場として造られたんだ。皆の要望を盛り込んだ結果、予定を変更して寮として使う事になったがな」
中心に立っているそらと、シンの横に立つアスランが嬉しそうに説明する。
どんな反応をしてくれるだろう…驚くだろうか？
喜んでくれるだろうか？

そう期待を込めて準備していた為、興奮もひとしおだ。
そして、シンの反応は…

「あ…今日俺の誕生日でしたっけ。ありがとうございます」
「…あれ？」
かなり淡白なものだった。
感謝の気持ちに嘘は無いのだろうが、何と言うか…まるでさほど特別な日とも思ってない様な雰囲気だ。
「は、反応薄いね」
「あ～、はい。家族が死んでから誰も誕生日祝ってくれる人がいなかったんで、そんなに特別な日って感じでもなくなってたんですよね。何なら今日が誕生日だって、皆に言われるまで忘れてましたし」
「…」
思っていたよりも重めの回答が来た。
皆が掛ける言葉に迷う中、メルが1歩前に出て来る。
「じゃあさ、今年から毎年お祝いしよう！もう誕生日だって事、忘れない様に！」
「毎年、ですか？」
首を傾げるシンに、メルの言葉に続ける様にそらが答える。
「うん。今日から私達、同じ屋根の下で暮らす家族なんだから、ね？良いでしょ？」
「家族…」

『『お誕生日おめでとう、シン』』
『お兄ちゃん！ハッピーバースデー！』
想起される前の世界の記憶。

故郷(オーブ)で家族と過ごしていた日々。
あの時も、毎年誕生日になると祝ってくれる家族がいた。
プレゼントや豪華な料理を用意してくれた両親。
部屋を派手に飾り付け、手作りのお菓子を作ってくれた妹。
もう、取り戻せないあの日々。

「シン君？」
「…っ」
メルに名前を呼ばれ、ハッと我に返る。
自分の目から一筋の水滴が零れ落ちていた。
「…すいません、目にゴミが入ったみたいで」
慌てて雫を拭い、笑顔を浮かべるシン。
もう、誕生日を祝ってくれる家族はいない。
死んでしまったのだから、戻って来る筈も無い。
それでも…
「…今日は俺の為に…本当、ありがとうございます」
祝ってくれる仲間がいる。
今は、それで良い。

「これだけの準備するの、大変だったでしょ？」
「うん、その上バレない様にやれ！ってアスラン君に言われてたからね」
ロビーの傍にある食堂で行われている立食パーティーの最中、シンとそらが料理を片手に談笑していた。
皆思い思いに料理や飲み物を楽しみ、ある者は派手に騒ぎ、ある者はへべれけで女同士イチャ付き、ある者は追加の料理を作ろうと非常食組(兎と羊)を追い掛け回し、ある者はそういった騒がしい連中にツッコミを入れたりと、楽しいながらもかなりカオスな空気が生成されてい

た。
「…俺らが何かやると大体騒がしくなりますね」
「あ、あはは…」
苦笑しながら騒ぎ散らかす仲間を見詰めてごちるシンと、苦笑するそら。
「でも…凄く楽しいです。ありがとうございました」
「…どういたしまして」
すると、シンの元へ青いカブトムシの様なメカが飛んで来る。
「これって…」
「カブトムシ、かな？」
シンの周りを旋回するカブトムシに続く様に、アスランが2人分の飲み物が入ったグラスを持ってやって来た。
「俺が造ったペットロボだ。携帯電話機能を兼ね備えた、名付けて『ビートルフォン』。お前への誕生日プレゼントだよ」
「アスラン君が造ったの!?」
目を見開いて驚くそらとは対照的に、シンは呆れた様にツッコミを入れる。
「何が『名付けて』だよ…これ仮面ラ○ダーWのあれですよね」
「あはは…シンは特撮好きだからな、再現してみたんだが…気に入らなかったか？」
「めっちゃ嬉しいですありがとうございました」
シンは早口でそう伝えてから手のひらをそっと差し出すと、ビートルフォンは空中で携帯電話に変形し、彼の手の上に着地した。
「喜んで貰えたなら何よりだ。それとほら、ジュースでもどうだ？」
「「頂きます」」
2人はアスランからグラスを受け取り、口元へと運ぶ。
すると、シンがほんの2、3滴程度口に含んだだけでグラスを口から離した。
「アスラン、これ酒！カクテルですよ！」
「何!?」
慌ててシンからグラスを受け取り、アスランも舐める程度に飲む。

甘酸っぱさと一緒にアルコール特有の苦味が舌に広がった。
間違い無く酒だ。
「すまない、間違えた」
「ったく…この世界じゃ俺まだ未成年ですよ？」
C．Eでは既に成人年齢に達しているシンだが、この世界ではまだまだ未成年。
酒など飲めないのだ。
「すまない、そら。違うものが飲みたいなら取り換えて…」
そらに向き直り、謝罪するアスラン。
しかし…
「…あれ～？何か頭がポーッとする～」
「…まさか、もう酔っ払ったのか？」
そらのグラスの中は既に半分近く減っており、彼女は顔を赤く染めていた。
「あ～、シンく～ん！」
「うわぁぁ!?」
シンの姿を視界に入れるなり、思い切り抱き付くそら。
しかし、これだけで終わらない。
「ちゅ～～～～～っ♡」
「「「「「「!!??」」」」」」
事もあろうかシンの顔を両手で抑え、口にキスをした。
場の空気が一斉に凍り付くが、既に酒が回り、スイッチが入ってしまったそらには関係無い。
「んちゅっ♡れろっ♡はむっ♡じゅるっ♡」
「ん～！んん～～～～～っ!!／／／」
そのまま舌を口内へ潜り込ませ、濃厚な口付けを交わす。
酒など殆ど飲んでいないのに顔が一気に熱くなり、目線で周りに助けてくれと訴える。
ある者は愕然とし、ある者は顔を赤くして慌てふためき、ある者はスマホでこの場面を写真に収めている。
撮影してるヤツは後でぶん殴ろう、などと考えていると、そらは漸

くシンの口から自分の唇を離す。
２人の間に唾液の橋が掛かっていた。
「えへへ～♡シン君とちゅ～しちゃった♡私、幸せぇ…♡」
恍惚とした表情でそう言い残し、そらはそのままシンにしなだれ掛かる様に倒れた。
「おっと！そ、そら先輩…!?」
「ぐぅ～…すやぁ…」
シンが具合を尋ねようとすると、そらは幸せそうな表情を浮かべて寝息を立て始めた。
「シ…シン様が…そら先輩と…!?」
そんな中、余りのショックの大きさにちょこが膝から崩れ落ちる。
「あ…ああ…シン様の…ファーストキスが…」
「ちょこ先生ぇぇぇぇぇぇーーーーーー!!??」
ちょこの身体がクリムゾンスマッシュを喰らったオルフェ〇クの如く灰塵と化し、メルの絶叫が響き渡った。

「ふぅ…これで良し」
「すいません、ありがとうございます…」
あの後シンは友人Ａと共にそらを彼女自身の居室へと運び、ベッドに寝かせた。
社員寮は外見だけではなく、居室までもがかなり豪勢に造られており、簡易的だがダイニングキッチンやリビング、トイレと個別にバスルームまで用意されている。
ベッドに使われている枕とマットレスも硬過ぎず、柔らか過ぎずの絶妙な反発力で、寝心地も良さそうだ。
「何か疲れたなぁ…俺も自分の部屋に戻りますね」
「すいません、そらがご迷惑をお掛けして…」
「いや、えーちゃんが謝る事じゃないですって。じゃ、おやすみなさい」

平謝りする友人Ａを優しく宥め、シンも部屋へ戻った。

――そんなに恥ずかしがらないで♡
――どう？気持ち良い？
――あっ、それ、イイ…！
――やぁん…イク…っ！
――大好きよ、シン様。

「ハッ!?」
目が覚める。
窓の外には太陽が昇っており、雀の囀ずる声が窓越しに耳に届く。
時刻は既に朝の８時半を指しており、普段に比べると少し起きるのが遅めだ。
「…何つー夢見ちまってんだよ、俺は…！」
自己嫌悪に襲われ、乱暴に頭を掻き毟って吐き捨てる。
「落ち着け俺、あれは夢だ！気にするな！」
頬を両手で叩き、意識を切り替える為に洗面所で顔を洗う
歯磨きまで終わらせ、寝間着にしていたジャージから私服に着替え、そろそろ朝食にするか、と1階の食堂に向かった。

「あらシン様、おはちょこ～ん♡」
「お、おはよう、シン君…」
「おはようございます」
食堂に下りると、そらとちょこが先に下りて来ていた。
ちょこが朝食を作っているらしく、フライパンの上で２人分のフレンチトーストがジュージューと音を立てている。
「シン様も朝御飯？」

「はい」
「じゃあ一緒に作っちゃうわね」
「良いんですか？ありがとうございます」
ちょこはフライパンの上にもう1枚フレンチトーストを追加した。
「シン君、その…き、昨日はごめんなさい！私、とんでもない事しちゃった！」
涙ながらに頭を下げるそら。
顔は青ざめ、声も震えており、かなり責任を感じているのが伝わって来る。
「別に大丈夫ですよ、あれは事故みたいなもんですから。強いて言うならジュースと酒を間違えたアスランのせいです。まぁ、今度から気を付けてくれればそれで良いですよ」
「うん…本当にごめんね」
「じゃあ俺、コーヒー淹れて来ますね。そら先輩とちょこ先生は？」
「あっ、じゃあオレンジジュースで…」
「う～ん、ちょこは…カフェオレをお願いできる？」
「わかりました」
席を立って厨房に入るシンを見送り、そらはシンが下りて来る前のちょことの会話を思い出していた。

「ねぇ、そら先輩？」
「何？ちょこちゃん」
起床後、部屋から出たちょこと遭遇し、一緒に食堂へ下りて来たそら。
ちょこが纏めて朝食を用意すると言うので任せて待っていると、調理しながら唐突に声を掛けて来た。
「そら先輩…シン様の事好きでしょ？」
突然投下される爆弾。
数秒の沈黙の後、ぎこちない口調で返事をする。
「も、勿論だよ！大事なホロライブの仲間だもん！」

「そういう意味じゃないわ。異性としてって事」
獲物を狙う様なちょこの目線。
完全にバレてしまっている事を察し、そらは赤面する。
「…どうして、わかったの？私がシン君を好きって」
「普段のそら先輩を見ていればわかるわ。シン様とお話してる時、凄く楽しそうだもの。確信に変わったのは昨日だったけど」
「え？私何かしたっけ？」
「忘れちゃったの？仕方無いわね」
ちょこの瞳が紫色の光を放つ。
すると、そらの瞳も共鳴する様に紫色に光った。
…そして、泥酔状態にあった為に抹消されていた記憶が一気に蘇って来た。
「…あっ…わ、私…何て事を…！／／／」
「シン様にちゃんと謝っておくのよ？」
ゆっくりと頷くそら。
想いを寄せる男性とキスできた嬉しさも無い訳ではないが、それ以上にシンを嫌な気持ちにさせてしまった申し訳無さ、嫌われてしまったかもしれないという不安、皆に見られた恥ずかしさの方が圧倒的に勝った。
「それにしても、そら先輩が…ねぇ。強力なライバルができちゃったわね」
「えっ…ま、まさか…ちょこちゃんも!?」
頬を染めながら頷き、肯定を示すちょこ。
「ああ…ごめんなさい！シン君のファーストキス、勝手に奪っちゃって…！」
「気にしないで。確かに悔しかったけど…その分ちょこも楽しませて貰ったから」
「えっ？」
「…そら先輩だけにこっそり教えるけどね？」
調理を中断し、そらに近寄ると彼女の耳に唇を寄せ、何かを耳打ちで伝える。

すると、そらの耳から首までが一気に真っ赤に染まった。
「そ、そ、そ、そんな事までしたの!?／／／」
「ええ、終わった後にシン様の意識と記憶を書き換えさせて貰ったけどね。多分、夢の中での出来事とでも思ってるんじゃないかしら？でも…凄かったわぁ…／／／」
うっとりとした表情で語るちょこ。
「そ、そこまでやっちゃったなら…私、引き下がった方が」
そらの言葉は、唇に押し当てられたちょこの人差し指によって遮られた。
「…逆よ、そら先輩。ここまでさせておいて引き下がったりしたら許さないわ」
そう語るちょこの目は鋭かった。
やってしまった事に対して正面から向き合え、と目線で呼び掛けて来る。
「ちゃんと正々堂々、勝負しましょう。どっちがシン様に振り向いて貰えるか」
鋭い視線を和らげ、穏やかな表情で宣戦布告して来るちょこ。
過ちを気にせず、遠回しに「チャンスをくれる」と言ってくれている彼女の優しさにそらは涙を流す。
ちょこは優しくそらを抱き締め、慰める。
「どっちが勝っても恨みっこ無しよ、そら先輩」
「うん…！」

「…そら先輩？」
「ひゃあ!?」
ふと、背後から声を掛けられ、回想が強制的に終了する。
「飲み物、持って来ましたよ」
「あ、うん、ありがとう」
シンはお盆の上に載ったオレンジジュースのグラスをそらの前に置くと、自分も席に着いてコーヒーを飲む。

「(私が勝てるのかな…ちょこちゃんに)」
ちょこは強敵だ。
顔も身体付きも同性の自分ですら憧れてしまう程色っぽくて美しく、悪魔でありながら聖母の様な慈愛に満ちた清らかな心を持ち、家事全般も得意。
とても自信を持って『勝てる』と言える相手ではない。
「(…ううん、勝てるか勝てないかじゃない!)」
心の中で首を横に振り、迷いを捨て去る。
此処で諦めたりしたら、それはちょこの宣戦布告に対する冒涜だ。
「(ちょこちゃん、私…絶対に勝つから!)」

# 第11話「結局、何故風呂上がりにはコーヒー牛乳なんだろうか」

「ほら、シン君！見えて来たよ！」
「あ、本当ですね」
電車に揺られる事約2時間、シンとメルの視線の先に立派な和風の建造物が見えた。
時を遡る事1週間前、突然メルに「一緒に温泉旅行に行こう！」と誘われたシン。
何でも福引きで3泊4日の温泉旅行を当てたのだが、チケットに「2名様」と書かれており、一緒に行く相手を探していたとの事。
シンも丁度その日は予定が空いていたので快諾し、今に至るという訳だ。

「（よし、今の所は順調！）」
心の中で密かに呟くメル。
彼女もまた、シンに想いを寄せる1人…という訳ではないが、シンに想いを寄せるちょこに好意を抱いていた。
2人組ユニット【メルティーキッス】としてシンとアスランが転移して来る以前から活動していたメルとちょこ。
2人の仲はすこぶる良く、配信の度にイチャイチャするその姿は、最早夫婦と呼んでも過言ではない程だった。
同性婚が認められていない日本では実際に交際する事ができない以上、『友達以上恋人未満』止まりではあったが、それでもちょこの事が大好きなのは変わらない。
…だが、そんなちょこが自分以外の人物に好意を寄せ始めたのだ。
ちょこが惚れ込んだ男…シンに対して強くヤキモチを妬くメルだったが、その反面、ちょこのハートを撃ち抜いたシン・アスカとい

う少年に興味が沸いた。
――――どうやってちょこ先生を堕としたんだろう？
ちょこ先生は彼のどんな所に恋をしたんだろう？
気になったメルは、シンと交流を深め、彼の秘密を知りたいと思う様になった。
福引きで温泉旅行を当てたのは、まさに僥倖と言えただろう。
丁度２名様用だったので、迷わずシンを誘ったのだ。

「２名様でお越しの夜空様ですね、ようこそお越し下さいました。お部屋にご案内致します」
チェックインを終え、女将の案内で部屋へと歩みを進める２人。
２人が案内されたのは『青龍の間』と書かれた札の掛かった、この旅館の最高クラスの部屋である。
「凄～い！広いね！」
「流石最高ランクの部屋だなぁ…」
高級感と風情溢れる立派な和室に感嘆の声を上げるメルとシン。
窓を開くと、豊かな自然や人で賑わう温泉街が広がっている。
「シン君、少しお出掛けしない？ずっと此処にいるのもあれだし」
「そうですね、じゃあ行きましょうか」
２人は持って来た荷物を置くと、財布や携帯と言った必要最低限の所有物を手に取り、街へと繰り出して行った。

「はぁ～…気持ち良い～…♪」
「無駄に色気出して言うのやめて下さい」
聞く者の興奮を誘う様なうっとりとした声を上げるメルにシンの冷静なツッコミが刺さる。
２人は現在、まったりと足湯を堪能していた。
足だけ温泉に浸かる事に違和感を感じていたシンだったが、いざ浸

かってみると中々に心地良い。
「この後何処行きますか？」
「う～ん、皆にお土産も買いたいし、この温泉街の名物の揚げ饅頭も食べてみたいな～！あっ、近くに世界遺産になってる神社とかお城もあるから行きたい！」
「吸血鬼が神社なんか行って大丈夫なんですか…？」
楽しそうなメルとは対照的に、疑問符を浮かべるシン。
でも考えてみりゃこの人、ニンニクも十字架も平気だし、日光も大丈夫だから案外問題無いのか？
あれ？こうやって見るとこの人本当に吸血鬼なのか？
「む～、シン君何か失礼な事考えてない？」
「いえ、別に？じゃあそろそろ行きましょうか」
「話をはぐらかされた気がする！」
湯から脚を上げて靴を履き、２人は温泉街の物色を始めた。

「この店で合ってますか？」
「うん」
温泉街を巡り、２人は名物の揚げ饅頭を販売する菓子屋へと訪れた。
が、凄い人数の客が並んでいる。
「う～、流石この温泉街の名物だね」
「凄ぇ行列だなぁ…メル先輩は並んでて下さい。俺、売り切れてないか見て来ますね」
そう言って店の中へと姿を消すシンを見送り、メルは列の最後尾へと並ぶ。
「…っ!?」
ふと、凄まじい不快感が背筋を逆る。
後ろに並んだ２人組の男が、自分の尻を撫で回していた。
「フゥ～、滅茶苦茶可愛いじゃん」
「超俺好みのケツしてるぜ、ヒヒヒ」

小声でボソボソと会話する男達。
殴り飛ばしてやりたいが、こんな所で暴れて騒ぎにしたくない。
だが、我慢などした所で助けてくれる者がいる訳でもない。
「(怖い…助けて…!)」

「ぐふぇっ!?」
後ろから自分の尻を触っていた男が変な声を上げると同時に、誰かに身体を抱き寄せられる。
気が付くと、シンが右腕で自分の身体を抱き寄せ、左手で自分の尻を触っていた男の顔面に裏拳を叩き込んでいた。
「シ、シン君…?」
「…本当ならその腕千切ってやっても良かったけど、そんな事したらメル先輩にあんたの汚ぇ血がかかっちまうからな」
指をボキボキと鳴らしながら、男達に殺気を込めた視線を向ける。
「次は無いぞ…?」
「ひ、ひいいいいいいいいッ!?」
アニメ版顔負けのラスボス顔にビビった2人組は悲鳴を上げながら無様に逃げて行った。
やがて2人の姿が見えなくなると、シンはふぅ、と息を吐いて表情を幾分和らげながらメルに向き直る。
「大丈夫ですか?」
「う、うん…ありがとう」
「すいません、女の子1人で残しとくのが間違いでしたね」
自分の配慮の至らなさを謝罪する一方で、メルの胸中には奇妙な感覚が芽生え始めていた。
「(シン君の身体、凄く逞しかった…)」
細身でありながらも鍛えるべき箇所が極限まで鍛えられているのが服の上からでも伝わって来て、とてつもない頼もしさを感じる。
「…メル先輩?どうかしたんですか?」
「ふぇっ!?あ、ごめん!ボーッとしちゃってた」

「そ、そうですか…とりあえず、揚げ饅頭はまだ残ってるみたいです」
「そう？なら良かった～…メルが奢ろっか？」
「え？悪いですよそんなの」
「助けて貰ったお礼だよっ、先輩命令！」
「はぁ…わかりました」
先輩命令を使われ、渋々引き下がるシン。
この男、押しには弱いのである。

「ん～♪美味しい…♪」
揚げ饅頭を頬張りながら幸せそうに微笑むメルを見やりつつ、自分も手に持った揚げ饅頭を齧るシン。
サクッとした衣、もっちりとした生地、熱を帯びた甘い餡の組み合わせが産み出す完全調和（パーフェクトハーモニー）が口の中に広がる。
饅頭と併せて自動販売機で購入した緑茶を呷りながら2人がやって来たのは、世界遺産にも登録されている神社。
仕事運、金運、健康運など、様々な御利益があると有名であり、特に恋愛運に効果があると評判が高く、多くのカップルが参拝に訪れるという。
端から見れば自分達もカップルに見えるのだろうか、などと考えながらメルは歩みを進める。
「俺あんまり神様とか信じてないですけど…何か雰囲気違いますね、この神社」
「パワースポットとしても有名だからね～。あ、そうだ！折角だから絵馬に何か書いてこうよ！」
「絵馬って確か、木の札に願い事書いて吊るすあれでしたっけ…良いですよ」
2人は絵馬を購入すると、願いを記入するスペースで願い事を書き込み、吊るす。
「ねぇねぇ、シン君は何て書いたの？」
「別に大した事じゃないですよ？『今の平和な暮らしがずっと続きま

す様に』って書きました」
「…きっと切実な願いなんだろうね」
何気無い願いだが、書いた人間の経歴が経歴故に酷く重苦しく感じてしまう。
談笑しながら神社を後にするシンとメル。
…絵馬の中に、名前を書く欄に『T・S』と『Y・C』と記された『好きな人と両想いになれます様に』という全く同じ願いが書かれた2枚があった事には触れない事にしたメルであった。

「せいっ！」
「はい」
「おりゃ！」
「ほい」
所変わって、宿泊先の旅館。
卓球に勤しむメルとシンの姿があった。
近辺の観光を終えて戻って来たものの、夕食までにはまだかなり時間があるという事で、浴衣に着替えた後、暇潰しがてらにこの旅館にある卓球場にやって来たのだ。
だが、男女の体力差故か、時間と共にどんどん点差が開いて行く。
「はぁ、はぁ…やっぱ強いな～、シン君」
「そろそろ終わりにします？」
「まだまだ！1点だけでも取るよ！」
そう言って球を投げるメル。
ラケットを振りかぶり、球を叩いた所で…悲劇は起こった。
激しく動き回った末に緩んでいた浴衣の帯がメルの腕の一振りと共に…完全に解けた。
「…っっ!!」
「あ…っ!?」
即座に目線を逸らすシン。

帯が解け、浴衣がはだけ、中に隠されていた白い素肌が露になる。
幼女の如き華奢な肉体と、それに不相応な胸が衣類の圧迫から解放されて揺れ動きながら外の空気に晒され…
「…きゃあああああーーーーっっ!!??／／／」
可愛らしい悲鳴を上げながらその場に踞るメル。
そんなメルを歯牙にも掛けず、シンは卓球場の入り口の扉に駆け寄り、鍵を掛ける。
「今の内に浴衣直して下さい！他の客が来る前に！」
「…っ、う、うん…！」

「…メル先輩、大丈夫ですか？」
「な、何とか…」
先の一件で卓球を続行する意欲が削がれてしまったメルを連れて部屋へと戻るシン。
大丈夫かと尋ねるが、明らかに意気消沈してしまっており、足もおぼつかない。
他の客が誰もいなかった事が幸いだった。
誰かいたら再起不能になっていただろう。
「うわっ！」
ふと、メルが躓いた。
「危ない!!」
シンが慌てて背後から抱き止めた事で、辛うじて転倒する事は免れた。
…転倒する事は。
「…っ？」
シンの両手に、何やら妙に柔らかいものが触れた。
――あれ？この感触、何処かで…
…そう思う暇すら与えられる事は無かった。
「きゃあああああああああーーーーーー!!!／／／」
「ぐふぇっ!?」

メルの裏拳がシンの頬を正確に捉える。
「あわわわわわわわぁぁっ!!!／／／」
あたふたしながら逃げて行くメルを目で追いながら、シンは今自分が触れていたものが何だったのかを理解する。
「…部屋に戻ったら謝んないとな」
掌をチベットスナギツネの様な眼差しで見詰めながらそう呟く。
この状況に慣れ始めている自分にほとほと嫌気が差すシンであった。

「…」
メルはシンを殴り飛ばした後、1人部屋に戻り、蹲っていた。
「酷い事しちゃったなぁ…」
何度目かもわからない溜め息を吐くメル。
彼は転んだ自分を助ける為に支えてくれただけであり、胸を触られたのは完全な事故だ。
なのに、自分を助けてくれた彼を思い切り殴ってしまった。
「メル先輩」
「あ、シン君…」
部屋の扉が開き、シンが中に入って来る。
「その…」
「あ、えっと…」
「さっきはすいませんでした（ごめんね！）」
同時に同じ言葉を発した。
呆気に取られた両者の間に数秒間の沈黙が流れる。
「いや、だって俺、メル先輩の胸を…」
「それはメルを助ける為でしょ!?なのに思い切り殴っちゃったし…」
やいのやいのと遠慮合戦を始める2人。
「ぷっ、ふふふっ…あはははははは！」
やがて、メルが心底可笑しそうに笑い出した。
「メ、メル先輩？」

「あ〜、ごめんね…シン君って、結構可愛いなぁって」
「…っ」
恥ずかしい様な、不満げな様な表情を浮かべながらそっぽを向くシン。
そんなシンの様子が可愛くて、面白くて、メルの頬が一層緩む。
…すると、メルの腹の虫がぐぅ〜、と鳴いた。
「あっ…／／／」
今度はメルが頬を染める番。
シンがふっ、と微笑みながら部屋の扉に手を掛ける。
「そろそろ晩飯の時間ですしね、行きましょうか」
「う、うん…」

夕食を終えた後、メルは露天風呂に浸かりながら星空を見上げていた。
流石に混浴ではない。
「ちょこ先生がシン君を好きになるの…わかる気がするなぁ」
今日1日シンと過ごして、シンの強さ、優しさ、そして可愛らしさを十分に理解したメル。
悔しい気持ちもあるが、ちょこが彼を愛した理由も頷ける。
現に自分も彼に助けて貰った。
あの時自分を庇ってくれた細くも逞しい腕の感触と体温が、すぐに甦って来る。
「…っ？」
思い出した瞬間、何故か酷く頬が熱くなる。
逆上せたのだろうか？
だが、先程から感じているこの胸の高鳴りは何なのだろう？
――――え？まさかとは思うけど…
「…シン君の女誑し」
ボソッ、と呟いたメル。

「へっくし!ズズッ…風邪でも引いたかな?」
同時に隣の男湯にいるシンがくしゃみをした。
「でも風邪は引かない様に調整されてる筈だし…誰か噂でもしてんのかな?…ま、良いか」
気にせず温泉を堪能する事を選ぶシンであった。
…尚、2人が温泉旅行から帰った後、ヤキモチを妬いたちょこにメルがお仕置き（意味深）されたのは完全な余談である。

# 第１２話「ハロウィンでは騒ぎ過ぎない様にしましょう」

「…これで一先ず買い出しは終了か」
そう呟きながら、沢山の食材がぎっしりと詰まった買い物袋を持ってスーパーから出て来るシン。
今日は１０月３１日。
一般的にハロウィンと呼ばれる日であり、同時にメルの誕生日でもある。
誕生日ライブ後の打ち上げで作る料理の食材を仕入れる為、シンは数日前から四方八方走り回っていた。
袋を手に、自身の愛（サイド〇ッシャー）車が停めてある駐車スペースへと戻ろうとする。
「…ん？」
「…！…、…!!」
「…、…♪」
何やら、長い金髪の女性と２人組の男が言い争っている。
若干離れた所にいる為、内容は聞き取れないが、女性の方はかなり困っている様子を見せている。
「はぁ…仕方無いなぁ…」
困っている人を放っておくのも何だか後味が悪い。
シンはその男達の元へ歩みを進めた。

「（めんどくさいのに絡まれたなぁ…）」
私…『ニュイ・ソシエール』にとって今日は厄日なのだろうか。
折角の誕生日だと言うのに、よりによってナンパに出くわすとは…。
さっきから散々断ってるのにしつこく食い下がって来るし、本当にめんどくさい。

私が本気出せば軽く捻り潰してやる事など雑作も無いが、余り騒ぎを起こすのも億劫だ。
はぁ、カッコ良く助けてくれる白馬の王子様でも現れてくれないもんかなぁ…
「…おい、そこのあんた達」
声がした方向にいたのは、黒い髪に赤い瞳の、若干ショタっぽい雰囲気の漂う超絶イケメン君。
…願ってから王子様登場するの、早すぎて草。
あれ？何かこのイケメン君、どっかで見た様な…？

「あ？何だこのガキ？」
男達の意識が金髪（ニュ）の女性（イ）から唐突に現れたシンに向けられる。
どう考えても歳上且つ柄の悪い男達を目の前にしていながら、彼は全く怯む様子を見せない。
「そこの女の人嫌がってんだろ？さっさと離してやれよ」
「んだテメェ？ブチのめされてぇか！」
「ガキンチョ、痛ぇ目に会いたくねぇならさっさと帰んな」
口々に脅迫の言葉をぶつける男達だが、シンは極めて冷静に振る舞いながら、袋の中から胡椒の瓶を取り出し、弄り始める。
「…ってか、あんたとあんた、この前見た事あるぞ？メル先輩に痴漢してたヤツだろ？」
「…？あっ！テメェあん時の!!」
「よくもやってくれたな!!」
どうやら向こうも思い出したらしく、怒りを露にしながら食って掛かる。
「そりゃこっちの台詞だよ！で、何だ？痴漢の次はナンパか？懲りないヤツだな」
「んだとこのクソガキがぁ！」
男の1人が拳を振り上げる。
シンは少しも慌てる事無く、手に持っていた胡椒の瓶の蓋を開け、

目の前の男達にぶちまけた。
「うわっ!?目が…ぶぇっくし!?」
「へーっくし!この野郎、やりやがっ…えっくしっ!」
「逃げますよ!」
「うわっとと!?」
男達がくしゃみと目に入った胡椒で動けなくなっている隙を突き、シンはニュイを連れて近くに停めてあるサイドカーの元へ走る。
ニュイが座ったのを確認すると、一旦彼女に荷物を預け、サイドカーのアクセルを吹かしてあっという間に走り去った。

「ふぅ…此処まで来れば大丈夫でしょ」
先程のスーパーから1km程離れた所にあるコンビニの駐車場にサイドカーを停めると、シンはヘルメットを外す。
「いや〜、ありがとねお兄さん!助かったわ!」
「いえ、それにしても…何してたんですか?」
「別に?買い物してたら絡まれてさ〜。誕生日なのにもう最悪!」
心底うんざりした様に言いながらニュイもヘルメットを外す。
「へぇ、誕生日なんですか?奇遇ですね。俺も事務所の先輩が今日誕生日なんです」
「成る程ね〜、事務所の先輩がねぇ。それでその大量の食材って事か」
「あれ?ソシエじゃん!何やってんの?」
声がした方向を振り向くと、赤い髪をバッサリとショートヘアにした女性がいた。
「おっ、アンちゃん!」
「あれ?隣の男の子って…」
「あ〜、ナンパされてたら助けてくれたんだよね…って、アンちゃん?」
ニュイの話にはろくに耳を傾けず、隣にいるシンをまじまじと覗き込む赤髪の女性(アンちゃん)。
「…あーっ!君あれだよね?シン・アスカ!」

「え？『ホロライブＡｎｏｔｈｅｒ』の？」
　驚いた様に声を上げる赤髪の女性。
　因みに、ホロライブＡｎｏｔｈｅｒとは、従来のどの期生にも属さない、ホロライブ初の男性Ｖｔｕｂｅｒという事でシンの為にわざわざ用意された特別枠であり、此処からホロスターズの誕生へと繋がって行く…多分。
　要するに作者による後付け設定である。
「俺の事知ってるんですか？」
「ま～同業他社の人間だからね～。因みにあたし『アンジュ・カトリーナ』。にじさんじ所属だよ」
「え？あの『にじさんじ』ですか？」
「他にどのにじさんじがあんの？あ、私『ニュイ・ソシエール』だよ」
　そう言って自己紹介する２人の女性。
『にじさんじ』とは、ホロライブと双璧を為す大人気Ｖｔｕｂｅｒグループであり、どちらかと言うと男性Ｖｔｕｂｅｒの方が強い人気を誇っている。
　こういった勢力を二分するグループというと基本ライバル関係にある事が多いが、ホロライブとにじさんじのタレント同士の仲は非常に良好であり、コラボ等も頻繁に行っている。
　一方で、技術面などのライバルとして競い合うべき部分はしっかりと競い合っており、切磋琢磨して互いを高め合う関係が築かれている。
「ホロライブ所属のシン・アスカです。改めて宜しく」
「はい、宜しく…ってかソシエ、時間大丈夫？」
「え？…あーっ！もうこんな時間！」
　腕時計を見て声を張り上げるニュイ。
「どうかしたんですか？」
「私の誕生日ライブの準備があるの！」
「ライブか…俺もメル先輩のライブの準備しないと…あっ、そうだ！」
「？」

『こんかぷ～！ホロライブ1期生、夜空メルです！』
『こんにゅい～！にじさんじ所属、ニュイ・ソシエールだよ～』
「…よし、作戦は成功だな」
スマホで2人のライブ配信の様子を確認すると、シンは満足そうに微笑む。
「すいません、俺の無茶振りに付き合って貰って」
「別に良いよ～、一々視聴者取り合うのも面倒だしね」
気の抜けた声で答えるのはおかゆ。
あの後ホロライブとにじさんじ、双方の事務所に相談し、合同ライブにしてしまおうという提案を急遽飲んで貰ったのだ。
別々に同じタイミングでライブを行うと、瞬く間に視聴者の取り合いになってしまい、ホロライブとにじさんじの間に変な溝が生まれてしまうかもしれない。
ならいっそ合同ライブにしてしまった方が視聴者も多く確保できるし、話題性も上がるだろうと判断したのだ。
「にじさんじの皆さんも、協力ありがとうございました」
「いえいえ！だって合同ライブなんて面白そうじゃないですか！」
シンの謝罪ににこやかに答えるのは『鷹宮リオン』。
ニュイと同じく、にじさんじ所属のＶｔｕｂｅｒである。
メルとニュイのライブにゲストとして参加すべく、にじさんじからもアンジュを始めとした何人かのタレントが会場に集まっていた。
「そう言って貰えて良かったですけど…それはそれとして、取り敢えずこれからパーティー用の料理作り始めるんでそこのコアラ連れ出しといて下さい。動物は衛生的に問題あるんで」
「だれがコアラだ！ボクはいかいのおそろしいあくまだぞ～っ！」
シンがそう言って摘まみ出して貰う様要求したのは『でびでび・でびる』。
コアラに見えるがれっきとした悪魔であり、角や翼もちゃんとある。
人間に近いちょこやトワに比べて、この差は何なんだろうか？

「皆さ～ん、そろそろ出番ですよ～」
「「「「は～い！」」」」
友人Ａに呼ばれてぞろぞろと出て行くゲスト達。
彼女達を見送りながら、シンはパーティー用の料理を準備し始める。
食材を凄まじい速度で切り刻みながら２種類の鍋を同時に操作し、オーブンでピザやグラタンを焼いて行く。
戦争で家族を喪い、身の回りの世話を１人で行わなければならなくなったが故か、この男の家事スキルは異常なまでに成長してしまった。
今やホロメンの料理上手組と１０回食戟をやっても５、６回は勝ててしまう。
そして何より、料理を振る舞う相手がいると、自然と作るのにも気合いが入るというものだ。
「～♪」
気が付くと鼻歌を奏でる余裕さえ出て来る。
２人のライブを楽しみながら、圧倒的な手際の良さで料理を進めて行くシン。
彼女達を見ていると、自分も腕によりを掛ける甲斐があるというものだ。
「よし、良い感じだ…！」
どんどん手が早くなる。
勢いのまま、１品、また１品と作りあげて行く。

『寄せて寄せて♪上げて上げて♪そ～れそ～れそ～れそ～ｒ』
その作業妨害用ＢＧＭが流れ始めた途端、シンはモニターの電源をぶち切った。
「…ライブ、アーカイブで見るか」
そう呟いて、寂しい無音な空気のまま、黙々と作業に没頭し続けた。
用意したパーティー料理自体は皆に大好評だったのがせめてもの

救いと言えよう。

# 第13話「石田彰の中ではアスランは31位で犬より下らしい」

「あ、犬がいる！」
「可愛い～！」
　ある日の事務所。
　何処からか現れた犬にメロメロになっているホロライブ4期生の羊の獣人『角巻わため』とゴリラの獣人（撲殺）…天使『天音かなた』の姿があった。
「でも、何でこんな所に犬が？」
「シン君何か知らないの？」
「いや、俺が来た頃にはもういたんで…」
　何時の間にか事務所の中にいた犬。
　誰かが連れ込んだ訳でもないらしく、3人は首を傾げる。
　…この3人は気付いていないが、実はこの犬、アスランである。
「（皆気付いてくれ！俺だ！アスランだ！）」

　時を遡る事、数時間前。
「ふぅ…これで一段落着いたな」
　誰も居なくなった真っ暗な事務所の中でパソコンを操作するアスランの姿があった。
　彼は現在、2ヶ月後に控えたシンの初のワンマンライブの準備に勤しんでおり、柄にも無く明朝まで残業しているのもその為である。
「…いや、あの作業もやってしまえるな。もう少し続けよう」
　休憩に入る事も無く次の作業を開始するアスラン。
　大事な弟分の初ライブなのだ。
　できる限り最高レベルの完成度で迎えたい。
　その方がシンも観客も喜ぶ筈だ。
「とは言ったものの、流石に疲れたな…ふぁ～…」

欠伸をしながら首をゴキゴキと鳴らす。
正直な話、既に早過ぎている位には準備の方は進んでいるのだが、できるだけ早い内にノルマを終わらせ、その上で改良すべき点やバージョンアップできる点はやってしまおうという魂胆でやっている為、加減というものを知らないかの如き勢いで進めているのだ。
だが、流石にノンストップで作業を続けていた為か、疲れが溜まって来ていた。
「仕方無い…少し休むか」
そう言って仮眠室へ向かう為に席を立ったその時、自分の机の上にある物が置かれている事に気付いた。
「これ…クッキーか？こんな物あったか…？」
何時の間にか犬の形をした数枚のクッキーが載った小皿が置かれていた。
1枚摘まみ上げてまじまじと見詰め、その後に事務所を見回すアスラン。
「誰が置いたんだ…？」
やはり自分以外誰もいない。
きっと友人Ａかのどか辺りが差し入れとして置いてくれたんだろう。
アスランは疲れた頭でそう結論付ける事にした。
「後で礼を言わなければな」
そう言って、アスランはクッキーを齧った…齧ってしまった。

そして、今に至る。
「(何なんだあのクッキーは!?誰だあんな所に置いたヤツは!?)」
「…何か言いたげですね」
「お腹減ってるのかな？」
「(違う！腹は減ってるが違うんだ！気付け！)」
シンとかなたの会話を全力で首を横に振って否定するアスランだが、当然の如くその想いは届いていない。

「「「(何やってんだあの人)」」」
否、フブキ、ミオ、ころね、こよりの犬科４人組には届いていた。
彼女達は気付いているが、決してそれを口にしない。
何故なら…
「「(面白そうだから放っとこ)」」
この考えがリンクしているからである。
「(楽しんでるな、この状況を…)」
…唯一の良心であるミオだけは違った様だが。

「食い物探したんですけど、葱とチョコしかありませんでした」
「(何故ピンポイントで危険なヤツしか残ってないんだ!?)」
最早わざとか、とツッコミたい衝動に駆られるアスラン。
シンはわざとではない…筈である。
多分、きっと、そうだと思いたい。
皆さんも犬に餌をやる時はちゃんと調べましょう。
「ほ～らお食べ～」
「(ええい！) イヌヌワン!!」
「うわっ!?吠えた！」
葱とチョコを手ににじり寄ってくるかなたに威嚇の咆哮を上げると、彼女はビビって後退りする。
「腹減ってるんじゃないみたいですね」
「トイレ行きたいのかもねぇ」
「でも犬のトイレなんてここにはありませんよ?」
「なら彼処があるじゃん」
「(そんなの砂か何かで良い！そもそもトイレでもない!!)」
相も変わらず、的外れな話をしている3人にアスランのツッコミが飛ぶ。

「隣に廃材置き場あったじゃない？」
「（何て所でさせようとしてるんだお前はぁぁ!?）」
かなたの発言にツッコミを入れるアスランだが、当然の如く届く訳が無い。
事実上ツッコミ不在の恐怖が完全に醸成されていた。
すると、シンが何かに気付いて声を張り上げる。
「あ、そうだ！フブキ先輩達なら何かわかるんじゃないですか？」
「（そうか！彼女達なら今の俺の言葉がわかる筈！よくやった、シン!!）」
シンの思いがけない助け船に歓喜するアスラン。
彼女達なら自分がアスランである事も理解している筈だ。
暗闇の中に差し込んだ希望の光に歓喜する。
「廃材置き場大好きって」←フブキ
「貴女方に一生尽くしますって」←ミオ
「餌は生の豚が良いって」←ころね
「好きなだけ実験動物として使って下さいって」←こより
「（コイツらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!）」
やりたい放題に吹き替える犬科４人組に盛大に怒号をぶつけるアスラン。
所詮彼女達はホロライブ。
芸人魂には逆らえないのである。
「（鬼かコイツら！）」
ころねとこよりに視線を向け、心の中でそう叫ぶミオ。
悪乗りした時点でお前もお前だよ、とかツッコんではいけない。

「あれ？」
「わため先輩？どうかしました？」
「あそこ！」
わためが指差した方向を見ると、犬化したアスランにそっくりなもう１匹の犬がいた。

「(もう1匹?まさか、俺以外にも…)」
あのクッキーを食べてしまった者がいるのだろうか?
なら協力して元に戻す方法を探さねばならない。
…因みに、もう1匹の犬の正体は。
「(どうやら余だけではなかった様だな)」←あやめ
「(お前かぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ!!)」
翌朝起きたら2人共元に戻っていたそうな。

# 第１４話「サンタクロースって本当にいるらしいね、プレゼント配ってるかどうかは別として」

クリスマス。
それは、今年1年間悪い事をせずに過ごしていた子供達にサンタクロースがプレゼントを配って廻ると言われている日だ。
子供の頃はサンタクロースの正体を突き止めてやろうと、夜遅くまで起きていた読者の方々も多いのではなかろうか？
ホロライブには、更に一周回って…
「今年こそサンタ捕まえてやるぺこだよオオオオオオオオ!!!」
「にぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!」
「余オオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」
「んなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
サンタを捕まえようとしている者がいる。
「…あれは一体何の騒ぎだ？」
「見ての通りです」
呆れた表情で問うアスランに、慣れた様に返答する友人Ａ。
兎田ぺこら、さくらみこ、百鬼あやめ、姫森ルーナの４人がギラついた目で咆哮を上げていた。
「…何をあんなに騒いでいるんだ？」
「スバルにはあたおかの気持ちはちょっとわかんないっス」
質問する対象をスバルに変えるが、冷たくあしらわれてしまう。
「付き合ってられねぇ」とでも言う様な雰囲気が立ち上っていた。
「…そもそも自分を捕まえようとしているヤツの所にサンタなど来るのか？」
アスランの疑問にみこがチッチッチッ、と人差し指を振りながら答える。
「アスランは何もわかってないにぇ、別にみこ達の所にサンタが来なくても良いんだにぇ」
「何？」

「ウチには絶対にサンタが来る天使がいるのら」
「お前は先輩を何だと思ってるんだ!?」
ルーナの言う天使…そらの事だろう。
確かに清楚と良心の塊である彼女の元にならサンタは来るかもしれない。
…え?本物の天使はどうしたって?
あれはゴリｒ（首が折れる音

「サンタさんか～、懐かしいなぁ…ウチは高校の時にお父さんがバラしちゃったなぁ」
「「「えぇっ!?」」」
そらの返答に絶望の声を上げる４人。
「不味いぺこ…サンタの正体を知ってる子の家にサンタは来ないぺこ!」
「それは元々来てないだけなんじゃないのか」
「つかサンタにそんなルールあんの?」
意味不明なぺこらの理屈に対して冷静にツッコミを入れるアスランとスバル。
「くそっ、これでは余の家に代々伝わるサンタ探知機の出番が…!」
「お前の一族代々サンタ狩りしてんのかよ!」
謎の機械を取り出しながら悔しそうに吐き捨てるあやめ。
「おはようございま～す…あれ、どうしたんですか皆」
そこに現れたシンの姿を見たサンタ狩り達の目が光った。
４人はまるで最後の希望に縋る様にシンに近付く。
「シンちゃ、サンタさんっていると思うのら?」
「え?サンタさんって…サンタクロースですか?」
うんうんと頷く４人。
「いや、俺ガキの頃から父さんと母さんが普通にくれてましたから…そもそもＣ．Ｅって宗教的なのは殆ど廃れてましたし」

シンの言葉にだろうな、と心の中で頷くアスラン。
彼の言う通り、Ｃ．Ｅでは宗教は全くと言って良い程馴染んでおらず、神様というものを信じている人間は極めて少なかった。
嘗て亡命したオーブには国教があったが、それも「困った時のおまじない」程度のものだった。
自分がクリスマスの時もサンタクロースがどうこうという事は無く、両親から直接プレゼントを貰っていた。
「でも、この世界なら案外本当にいるんじゃないですかね？悪魔やら天使やら色々いますし」
「「「!!」」」
サンタ狩り達の目に凶暴な光が宿る。
危険を察知したアスランが駆け出そうとするが、時既に遅し。
「オルァ!!」
「むぐっ!?」
ぺこらがシンの口に試験管を突っ込み、中に入っているピンク色の液体を流し込んだ。
「んぐっ!?ぐふっ!ぶはっ!ゲホッ、ゲホッ…」
液体を半分近く飲んでしまったシンは酷く噎せ返りながら試験管から口を離す。
「シン!?お前、何を飲ませた!?」
「こよちゃんが作った薬ぺこ！」
「こよりが作った薬…まさか!?」
嫌な予感に襲われたアスランがシンの方を振り向くと、その身体がみるみる内に縮んでいき、子供の姿になった。
何とも久々の登場である『アホトキシン４８６９』。
「…なんでおれまたこどもにされたんですか？」
「子供の方がサンタが来る確率高ぇのら！」
「そんなりゆうで!?」
「…」
アスランは面倒臭そうに頭を掻き毟りながら、シンの面倒を見てくれる人物を探す為に電話を掛け始めた。

『こちらみこ、現在異常ありません、どーぞ』
「こちらスバル、同じく異常無しっス、どーぞ」
『こちらアスラン、同じく異常無しだ。さっさと終わらせて寝たい、どーぞ』
『こちらぺこーら、早くサンタが来るのを祈ってて下さいぺこ。因みにこっちも異常無しぺこ、どーぞ』
『こちらあやめ、異常無しだぞ～。あとお腹空きました、どーぞ』
『こちらルーナ、異常無しなのら。後ではあちゃまに何か作って貰うからそれまで待ってるのら、どーぞ』
『それただの拷問だ余、どーぞ』
深夜のホロライブハウス内。
各々の自室で定点カメラの映像を確認するサンタ狩り＋αの姿があった。
因みにスバルとアスランは無理矢理手伝わされただけであり、全くやる気が無いのが声や口調から伝わって来る。
哀れなり、アスランとスバル。
尚、現在シンの面倒はミオが見ている。
「これで本当にサンタは来るんスか？」
『まぁ、万全とは言えないがやれるだけの事はやった。後は信じて待つ事しかできないさ』
「はぁ…とりあえず1回点呼取るっスよ～」
『了解』
『にぇ』
『ぺこ』
『んな』
『ぐうううう～～…』
「何でスバルがこんな事に…」
ぼやきながら無線機の通信を切った所で…
「あれ？ちょっと待って、今誰かぐうぅ～って言ってなかったっスか

？今ぐぅ～って言ってたっスよね!?」
最後に聞こえた変な音に気付く。
まさか寝落ちでもしたのだろうか？
いやまさかそんな筈は無い。
あれだけ気合い満々でサンタを捕まえてやろうと意気込んでおいて、付き合わされた側の自分やアスランを差し置いて寝落ちなどあり得ない。
慌てて無線機を再起動させ、再び点呼を取る。
「もっかい点呼取るっスよ…？」
『にぇ』↑みこ
『ぺこ』↑ぺこら
『んな』↑ルーナ
『ぐぅぅぅぅぅぅ～～』↑あやめ
『《ドンドンドン、ドンキ～♪ドンキホーテ～♪》…あっ、しまった』↑アスラン
「おいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ!!??」
最後の1人の通信機越しに聞こえたBGMに絶叫する。
「1人完全にドンキホーテ行ってたろ!?おいふざけんなよ!?いや無理矢理誘われて嫌だったのは同じだからわかるけどさぁ!?せめて誘えよぉ!!」
再び通信機を繋ぎ、叫ぶスバル。
「すぐ帰って来い！ドンキホーテのヤツ!!」
『《ドン》にぇ』
『《ドン》ぺこ』
『《ドン》んな』
『《ドンキ～》ぐぅぅぅぅぅ～～…』
『《ドンキホーテ～♪》お、デザイアドライバーがこんなに安く…シンへのプレゼントにしてやろう』
「全員ドンキ行ってんじゃねーかぁぁぁぁぁ!!ちょっと待てぇ！ぐぅのヤツ、ドンキで寝てたんかよ!?一体どんな状況だよ!!?」
漏れ無く全員の通信機越しにドンキのBGMが聞こえ、声が枯れん

ばかりの勢いでシャウトするスバル。
アスランは兎も角何でオメーらまで行ってんだ。
サンタ捕まえるのどこ行った。
「付き合ってられるかよ！・もうスバル寝ｒ」

『お！・サンタ探知機が反応したぞ！・』
ドンキで寝ていた筈のあやめが目を覚ました。
「いやお前寝てたんじゃないの？」
『やっとサンタが出てきたのに寝ていられれん！・今帰るぞ！・』
「いや今から帰るっておま」
『もう皆持ち場に付いてるぺこよ』
「早ぇな?!」
言われてみればもうドンキホーテのＢＧＭは聞こえて来ない。
あの一瞬で戻って来たんかテメーら。
速すぎんだろオイ。
『しっ、誰か入って来たぞ！』
アスランの呼び掛けに応え、一同は息を殺して気配を消し、モニターに映る監視カメラの映像を注視する。
暗くて今一映りが良くないが、何やら巨大は袋を背負った人影が彷徨いている様子が映っていた。
『でっけぇ袋持ってるぺこな…』
『あの中にプレゼントが入ってるのら…』
『…待て、何か様子がおかしくないか？』
人影はシンの部屋の扉を開け、部屋の中を物色する。
そして、箪笥の中や机の抽斗等を開けて中を覗き込む。
やがて、部屋の中を一通り観察し終えた人影は、シンの机の抽斗から取り出した長方形の物体を懐に仕舞うと部屋を出て行った。
『…アイツが持ってったの、何だったにぇ？』
『…財布だな』
「「「「…スゥーッ」」」」

全員で大きく息を吸い込む。
「「「「「泥棒ォォォォォォォォーーーーーーーーーーーーーーッッ!!!!」」」」」
6人は弾かれた様に部屋を飛び出し、泥棒を追いかけた。

サンタ狩り達が部屋を出て数十秒程経った後、新たな人影がシンの部屋の中へと入った。
人影はベッドの上で眠るシンと、その隣に布団を敷いて眠るミオに近付くと、2人の寝顔を見て満足げに微笑み、枕元に煌びやかな包み紙とリボンに覆われた箱を置いた。
――ガシャアアアアン!!
下の階からけたたましい音が響き、人影はびくん、と背筋を跳ねさせる。
サンタ狩り達が泥棒と戦っているのだ。
「ふぇっ!?」
「何今の音!?」
飛び起きるシンとミオ。
既に2人から離れた所にいた人影は、気付かれる事の無い様に気配を殺しながら速やかに姿を消した。

「全く…お前達がサンタを誘き寄せる為とか言って鍵を開放しておくから!」
「ごめんにぇ…」
「すいませんぺこ…」
それから数十分後、泥棒を捕まえて交番に突き出したアスラン達は再びホロライブハウスへの帰路に付いていた。
「サンタさんの正体って泥棒だったのらか?」
「あやめのサンタ探知機、泥棒探知機だったんスか?」
「う〜ん…故障してたのかもしれん」

「はぁ…取り敢えずサンタはいなかったという事で良いな？俺は疲れたから寝るぞ」
どっと疲れが押し寄せ、アスランはダルそうに欠伸をする。
ホロライブハウスに到着し、部屋へ戻ろうとすると、ロビーに降りて来たシンとミオに遭遇した。
「あれ？皆何してんの？」
「ああ、さっき泥棒が入って来てな…今捕まえて交番に突き出して来た所だ」
「どろぼう？ああ、さっきのおとってそのときの…」
アスランの説明にああ、と納得した様な表情を浮かべるシン。
「それよりミオしゃ達は寝てたんじゃなかったんスか？」
「いや、何か大きい音してウチもシン君も目ぇ覚めちゃって…もっかい寝る為にホットミルクでも飲もうかなと」
「それより…おれとミオせんぱいのまくらもとにプレゼントおいたの、アスランですか？」
「は？何の話だ？」
出し抜けに何の心当たりも無い事を聞かれ、アスランは怪訝な声を上げる。
確かにシンへのプレゼントに買って来たデザイアドライバーがあるが、あれはまだ自室の中だ。
「え？じゃあ…」
そう言って、シンは自室へと戻り、何かを持って来た。
「…これ、だれがおいたんですか？」
「「「「…あーっ!?」」」」
彼が持って来たのは、『Ｍｅｒｒｙ　Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ』と書かれたメッセージカードが添えられた、華美な装飾が施された箱だった。
…因みに、同様の箱がホロメン達の枕元にも置かれていたと言う。

# 第15話「現実のバレンタインも血のバレンタインである」

「はぁ…」

夜、自室のベッドの上で仰向けになり、溜め息を吐くそらの姿があった。

今日は2月11日。

2月14日(バレンタインデー)が目前まで迫って来ている。

「チョコ、どうしよう…」

そう、女の子なら誰でも悩むチョコ問題。

作るか、買うか、誰に渡すか。

同性の友達か、それとも気になる異性か。

彼女の場合、もう渡したい相手は決めている。

黒い髪に赤い瞳の少年。

決めてはいるのだが…

「『血のバレンタイン』だもんなぁ…」

血のバレンタイン。

農業用プラント【ユニウス7】が地球連合の過激派による核ミサイル攻撃で壊滅した事件だ。

この惨劇によってユニウス7にいた24万人以上の人々が亡くなり、その中にはアスランの母親【レノア・ザラ】も含まれている。

この一件はコーディネーター殲滅を訴える連合の過激派【ブルーコスモス】が戦犯と言われているが、プラントの独立をそもそも認めていなかった当時の連合にとっては、高額な投資の元に完成させたプラントをコーディネーターによって不法占拠されたも同然であり「核はやり過ぎだが、報復されたのはプラント側の自業自得である」と考える視聴者も少なくない。

またその後に起きた【エイプリルフール・クライシス】による過剰

な報復も、連合に同情する人間を増やす要因となっている。

…いささか話が逸れたが、そんなこんなで元ザフト軍人である２人にとっては、バレンタインデーは余り良い印象の無い日である筈。

下手にチョコなど渡すのは不謹慎だろうか…と考えてしまい、今一積極的になれない。

…それでも、この絶好の機会に想いを伝え、自分の気持ちにいい加減決着を付けたいと考えている自分がいるのも事実。

「どうすれば良いのかな…」

考えても考えても、答えは出ない。

…スマホの着信音が鳴ったのはそんな時だった。

「ん…？お母さん？もしもし？」

『もしもし、そら？元気？』

電話を掛けて来たのは母親だ。

「うん、元気だよ？」

『あら、本当？何だか元気無さそうだけど』

「あはは、やっぱりお母さんは誤魔化せないか…」

渇いた笑いを浮かべるそら。

長年自分を育てて来た母の観察眼と洞察力には恐れ入る。

「まぁ、ね…バレンタインのチョコ、あげた方が良いのかあげない方が良いのか迷ってて…」

『あら？バレンタインのチョコなら何時もあげてたでしょ？』

「うん、そうなんだけど…その人のいた国、バレンタインはあんまり縁起の良い日じゃなくて…」

『成る程ねぇ…』

「その人自体はバレンタインにトラウマとかある訳じゃないんだけど…やっぱり控えた方が良いのかなって…でも…」

『でも？』

「…どうしても、その…伝えたい気持ちがある…って、言うか…」

上手く声に出せず、ゴニョゴニョと口籠るそら。

しかし、電話の向こうにいる母親はからかう素振りも見せず、穏やかに答える。
『う～ん、難しいわよねぇ…でも、そういう時は自分の気持ちを優先しなさい』
「私の気持ち…？」
『ええ。こういう事はやらずに後悔するより、やって後悔した方が傷は小さくて済むわ』
「…」
『どう？参考になった？』
「…うん、ありがとう、お母さん」
母に礼を言って通話を終了しようとした、刹那…
『と～こ～ろ～で～…』
母がおどけた様な口調で言葉を紡ぐ。
『その相手って…前デートしたシン君？』
「ふぇっ!?／／／」
そらが短い悲鳴を上げると同時に、電話口の向こうから『バリン！』と何かが割れる音が聞こえた。
『貴方！女同士の話に聞き耳立てないで…』
どうやら父が食器を落としたらしい。
母親に気持ちを見透かされた恥ずかしさと、突然響いた物が割れる音に対する驚愕とが相まって、そらは反射的に通話を切ってしまう。
「もう、お母さんったら…！」
顔から火を吹きそうな感覚に囚われるそら。
だが、何だかんだで適切なアドバイスをくれた事に対する感謝も感じていた。
…そして、自分が決着を付けなければならないのは、自分の気持ちに対してだけではない事を思い出す。
「…私だけフライングなんて…ずるいもんね」

所変わって、ちょこの自室。

下手くそな鼻歌混じりにチョコ作りの準備をするちょこの姿があった。
…ちょこ先がチョコ作りって、書いててややこしいなこれ。
――コン、コン。
「ん？は～い！」
ドアを叩く音が響き、ちょこは一旦手を止めて入り口に向かう。
扉を開けると、そこにはそらの姿が。
「あら？そら先輩？」
「お邪魔します…あ、チョコ作ってたの？」
「ええ、シン様にあげる為にね。不謹慎かな～って思ったけど、アスラン様に頼まれちゃったから」
「アスラン君に？」
首を傾げるそらに、ちょこは首を縦に振って答える。
『こっちの世界のバレンタインに慣れさせてやって欲しい』ってね。アスラン様なりの気遣いだと思うわ」
「そっか…」
恐らくアスランは「血のバレンタイン」の印象を払拭させれば、シンがC・呪縛Eに負けずに前へ進む一助になるかもしれない…と判断したのだろう。
「…それで、そら先輩は何か用？」
「ちょこちゃん…」
深呼吸をして、ちょこの目を真っ直ぐに見詰めるそら。
そして、意を決して宣言する。
「…そろそろ、決着を付けよう！」
沈黙が辺りを支配する。
1秒が1分にも1時間にも感じられる、長い長い静寂が続き…
「…そうね」
フッと微笑み、ちょこもそらからの宣戦布告を受諾する。
「どっちが勝っても、恨みっこ無しよ」
「うん…！」

「「ちょっと待ったー!!」」
２人だけの宣誓に待ったを掛ける声。
そらが振り向くと、そこにはメルとノエルの姿が。
「あら、メル様にノエル様？」
「どうしたの？」
「その勝負…メル達も混ぜて貰うよ！」
「…ええっ!?」
驚愕の声を上げて固まるそら。
ちょこも思わぬライバルの追加に目を見開き、メルとノエルを眺める。
「シン様、本当にモテモテねぇ…」
「あ、あはは…」
申し訳無さそうに苦笑するノエル。
「…よし！じゃあ対等に勝負できる様に、皆でチョコ作っちゃおう！」
「「おーっ！」」
そらの提案に拳を上げて同調する３人。
こうして、シン争奪戦は最終章を迎える…！

「…」
その様子を、物陰から観察する者が１人。
チョコ作りを開始する４人の姿を見届けると、スマホを使って何処かへ連絡を始めた。
「あ、もしもし？うん、僕。ちょっとお願いがあるんだけど…」

「そら先輩、急に呼び出してどうしたんですか？」
そして迎えた２月１４日。
そらに呼び出され、彼女の部屋にやって来たシン。
扉を開けると、そらの他にメル、ちょこ、ノエルが並び、シンを出

迎えた。
「私達、シン君に受け取って欲しい物があって…」
そう言って、４人は背後に隠していたチョコを手渡す。
そらが作ったハート型のチョコ。
メルが作った生チョコ。
ちょこが作った小さめのガトーショコラ。
ノエルが作った動物型のチョコクッキー。
形も種類も様々なチョコレート菓子が、シンの前に差し出された。
「良いんですか？こんなに貰って」
「うん。シン君とアスラン君にとってバレンタインってあんまり縁起の良い日じゃないから、本当はやめた方が良いかな…って思ったんだけど、どうしても伝えたい事があって…嫌だった？」
「…いえ、凄く嬉しいです。ありがとうございます」
差し出されたチョコを受け取り、お礼を言った所で、シンはハッとする。
「…ん？伝えたい事、って何ですか？」
「…」
そらは何も答えず、シンを真正面から見据える。
そして、シンの目の前に歩み寄り…
「そ、そら先輩…？」
シンの顔を両手で抑え、
「っ!?」
唇を重ねた。
「!?!?!?!?」
「ん…っ」
そのまま数十秒程の沈黙が流れた後、そらは唇を離す。
そして、頬を紅く染めながら内に秘めた想いを伝えた。
「私…シン君が好きです！」
「ええっ!?」
伝えられた愛の言葉に戸惑う間も無く、今度はメルが前に出て来る。

「シン君…メルもシン君が好き！」
「え…んんっ!?!?」
間髪入れず、自身より身長の高いシンに合わせて爪先立ちし、唇を重ねて来るメル。
メルがキスを終えると、今度はちょこが。
「もう、皆せっかちなんだから…っ」
「っっ!!」
押し寄せるキスの嵐に、目を白黒させる事しかできないシン。
「ぷはっ…チョコレートだけじゃなくて、ちょこ先生も貰ってくれる？」
「あ、あの、その…」
しどろもどろになっていると、今度はノエルが。
「シン君、団長も…んっ」
「〜っ!!」
キスには抵抗があると話していたらしいノエルですら唇を重ねて来る。
幾ら正常な判断ができない状況でもわかる。
彼女達の想いは本物だ。
「…っ、み、皆…？」
「ごめんね、驚かせちゃって…でも、私達本気なんだ」
真剣な眼差しで見詰めて来るそら。
だが…
「…すいません、やっぱり…すぐには答えられない、です」
パニックからまだ完全に戻っていない頭で、何とか捻り出した返事がこれだった。
無理も無いだろう。
1人の女性から告白されただけでも戸惑うのに、ましてや複数人だ。
「うん、団長達もすぐ答え出るなんて思ってないからええよ」
「ゆっくり考えて、シン様自身が納得できる答えを出してくれれば良いわ」

優しく諭してくれるノエルとちょこに心の中で感謝しつつ、シンも真剣に目の前の４人と向き合う。
「…わかりました、時間は掛かると思いますけど、できる限り誠意のある答えを出します」
皆、自分を救ってくれた恩人であり、尊敬できる先輩であり…そして、とても魅力的な女性。
その中から１人を選ぶとなると、骨が折れるどころか砕けるレベルだろう。
それでも、こんな自分の事を愛してくれた以上、誠実に向き合うのが俺の義務だ。
シンは己の心に強く言い聞かせた。

『速報です。日本政府が少子高齢化対策の一貫として、一夫多妻制の試験的導入を決定しました』
「何でだァァァァァァァァァァァァ!!!」
翌朝。
食堂でニュースを見ていたシンの叫び声が木霊した。
何で昨日あんな事があった後に、その中からたった１人を選ばなければならないと責任を感じていた翌日にこれなんだ？
テレビはそんなシンの叫び声を無視するかの如く、試験運用の期間については検討に検討を重ね、慎重に検討を進めて行く旨や、試験運用期間中に複数の相手と婚姻を結んだ夫婦は期間終了後も夫婦として生活する事を認める旨が語られている。
「お、ココは上手くやってくれたみたいだね！」
そう発言するのはホロライブ４期生の天使（ゴリラ）『天音かなた』。
彼女の言うココとは、元ホロライブ４期生であり、現在は実家のヤクザ稼業【桐生会】の会長職を継いでいるドラゴン【桐生ココ】の事である。
「いや何したんですか一体!?」
「この前そら先輩達が話してるのを見ちゃってさ、ココに頼んで重婚

を許可する法律を通す様に日本政府と『Ｏ　ＨＡ　ＮＡ　ＳＨＩ』して貰ったんだ♪」
「絶対世間一般のお話じゃないですよねそれ!?」
「シン君！」
そこへ、そらが息を切らしながら2人の会話に割り込んで来る。
興奮を抑えられず、走って来たのだろう。
「今朝のニュース見た!?」
「み、見ましたけど…でも、流石に…！」
倫理的にどうなんだ、とツッコミを入れたくなるが、頬を輝かせて喜ぶそらの姿を見ると強く言い出せない。
「やった！これで…シン君とずっと一緒だぁ！」
「そ、そら先輩…！」
シンに抱き着いて喜ぶそら。
そして、シンは…
「まぁ…それで皆が喜んでくれるなら良いか…」
そう呟いて、考えるのをやめた。
だがシン自身も気持ちを落ち着かせる期間が欲しい為、まずは恋人としての交際から始めようという事になり、４人はそれを承諾。
こうして、シン争奪戦は思わぬ形で決着を迎えたのであった。

# 第16話「オンドゥルルラギッタンディスカ」

「はぁ…緊張する…！」
ソファーに座り、深呼吸しながら自分の胸を抑えるシン。
今日はとある俳優との対談配信であり、シンは彼の所属する事務所に来ていた。
応接室で目的の人物を待つ事十数分。
部屋の扉が開き…その人は現れた。
「お待たせしました。椿タカユキです」
「弟子の熱木正義です！」
「…っ！初めまして、シン・アスカです」
現れた2人に頭を下げ、シンは挨拶する。

椿タカユキ。
【仮面ライダー剣】の主人公【剣崎一真】等、数々の映画やドラマ、舞台に出演している大物俳優であり、弟子の『熱木正義』と共に自身も動画投稿者として活動している側面を持つ人物だ。
「お会いできて光栄です、今日は宜しくお願いします！」
「こちらこそ宜しくね」
緊張気味に頭を下げるシンに、朗らかな笑顔で挨拶する椿。
シンも仮面ライダーシリーズの中で剣はかなり上位に君臨する程好きな作品であり、剣崎一真は同シリーズ作品の登場人物達の中で最も好きな人物だ。
信頼していた仲間に裏切られたり、家族を喪った経験から「守る存在」になる事を願ったりと、自身と似通った部分が多いからだ。
「俺、剣崎一真がほんと大好きで…だから今日の対談、凄く楽しみにしてました！」
「俺もだよ！ガンダムの主人公と話せる機会なんて絶対無いだろうからね」
「師匠はガンダム大好きですからね！お台場のガンダムベースにも師

匠が作ったＯＯライザーが展示されているんですよ！」
「そうなんですね！今度俺のインパルスとバトルしませんか？」
　和気藹々とした空気が漂う会話。
　思った以上に気さくな椿の態度に、シンも徐々に緊張が解れて行くのを感じる。
「え～、今日は椿さんにリスナーから色々質問を預かって来てます。まず１つ目良いですか？」
「良いよ！どんどん聞いて」
「では１つ目『俳優になりたいと思った切っ掛けは何ですか』？」
「俳優になりたいと思った理由かぁ…」
　腕を組み、少し唸りながら答える椿。
「ヒーローに憧れてたから、かな」
「確かに以前テレビで言ってましたよね、子供の頃の夢が正義のヒーローになる事だったって」
「うん、それで大人になってからもその気持ちは消えなくてね…だから『ヒーローになれる仕事』をしたいなって思ったんだ」
　ヒーローになれる仕事…確かに、そう考えると役者はうってつけだろう。
　仮面ライダーやスーパー戦隊は俳優の登竜門と呼ばれ、多くの有名な役者を産み出している。
　現実ではヒーローなどというものは存在しないが、物語の中だけでもヒーローになれる役者という仕事に興味が向くのは当然なのかもしれない。
「シン君も声だけなら仮面ライダーですよね！」
「『お前倒すけど良いよね？答えは聞いてない』…これで良いですか？ｗ」
「あはは、そっくりｗ」

「じゃあ次の質問いきますね…『俳優になって良かった事と悪かった事は何ですか？』」

「良かった事と悪かった事か…実はこれ、どっちも仮面ライダー関連の事なんだよね」
「どっちも…ですか？」
怪訝な顔で尋ねるシン。
正義のヒーローに憧れて俳優を目指した彼が仮面ライダーで嫌な思いをした、とはどういう事なのだろうか。
椿は少し複雑そうな表情でうん、と頷く。
「仮面ライダーっていう作品のオファーを貰えた時は勿論手離しで喜んだよ。昔から続いてる日本を代表するヒーローになれるって決まった時は、凄く嬉しかった。実際、剣崎は俺の1番のお気に入りだし。けど…『仮面ライダーディケイド』でね…」
「ああ…そういう…」
仮面ライダーディケイド。
シンはそのタイトルを聞いて漸く納得した。
「俺の大好きだった剣崎一真があんな風になってたのは、やっぱり凄く嫌だったよ」
「そう言えば『他人のつもりで演じてた』って言ってましたもんね…」
確かに、仮面ライダーディケイドに登場した剣崎一真はまるで別人だった。
正義感が強く、何時も誰かを護る為に一生懸命で、時に視野が狭くなり…そして、異形の友（相川始）を討つ事無く世界を救う為に自らを犠牲にしたあの剣崎一真と同一人物とはとても思えなかった。
あの豹変ぶりには、やはり椿も思う所があったのだろう。
「始めから『悪役』としての役回りを与えられていたならまだしも、お気に入りの役をあんな風に扱われるのはね…そこはちょっと俺の覚悟が足りてなかったかな」
「俺、許せないです！師匠の誇りである仮面ライダーをあんな風に…」
「まぁ、コンセプト自体は凄く良かったですけど…その辺で大損してる感じは否めないですよね…」
…予め弁護を入れておくと、クロスオーバーを初めて本格化させたという大きな功績を立てたり、響鬼の世界や電王の世界は評価が高

かったりと、光る要素も確かにあった。
　しかし、剣に関しては仮面ライダーカリスを悪役にしたり、仮面ライダーレンゲルをクズキャラにしたりと、「脚本家は剣に恨みでもあるのか？」と考える視聴者も少なくなかったのである。

「では続いての質問『オンドゥル語についてどう思いますか？』あっはっはっはっはっw」
「はははははははw」
「師匠のこれほんとにネタにされますねw　」
　腹を抱えて3人は笑う。
　いやはや、その通り。
　椿の滑舌が悪すぎるが余りに【オンドゥル語】なる謎の言語がニコニコ動画で生まれてしまったのである。
「俺としては仮面ライダー剣により興味を持って貰う為の一助になれば良いかな～、程度に思ってたんだけど…まさかこんなにウケるとは思わなくてw」
「ある程度解読されてる今でも1話の『本当に裏切ったんですか』と『嘘だそんな事』は『オンドゥルルラギッタンディスカ』『ウゾダドンドコドーン』にしか聞こえませんからね…w」
「まぁ皆が笑ってくれるならそれで良いや…って思う反面で『聞き取れない言語喋っちゃってごめんなさい』って気持ちもあるんだよねw」
「リアタイで見てた人達、困ったでしょうねw」
　最終的に東映にすらネタにされてしまったこの言語。
　どうやら本人はまあまあ気に入っているらしい。

「では最後の質問…うっわ、誰だこんな質問入れたの？」
「何て書いてあるの？」
「読み上げますね…？『仮面ライダーは自由と平和を護るヒーローと

して描かれていますが、自由と平和のどちらかしか選べなくなったらどっちを選びますか？』…すいません俺のリスナーが意地悪な質問しちゃって」
「あっはっはっはっはwほんとに意地悪だなぁ…w」
　申し訳無さそうに謝罪するシンに対し、ケラケラと笑う椿。
「でも、師匠がどっちを選ぶのかは凄く気になります！」
「どっちを選ぶかって言われてもなぁ…w『時と場合による』としか言えないんだよね」
「時と場合…ですか？」
　シンの問い掛けに対し、椿は穏やかさの中に一抹の真剣さを湛えた眼差しで答える。
「人間ってさ、感情がある以上はどうしても争いを捨てられない生き物なんだよね。本当に争いの無い世界を作るとしたら、それこそ【ディエンドの世界】みたいな事をしなきゃいけなくなると思う」
　ディエンドの世界。
　先述した仮面ライダーディケイドに登場する【仮面ライダーディエンド】に変身する青年、海東大樹の故郷だ。
　その世界では、管理人（フォーティーン）と呼ばれる存在が、彼の考案した教育プログラムを用いて人々から感情を奪い取っていた。
　人間を文字通りの社会の為に生きる歯車とする事で、世界の平静を保っていたのだ。
　…デスティニープランも、突き詰めすぎるとああなっていたのかも知れない。
　そんなシンの気持ちを察してか知らずか、椿が言葉を紡いだ。
「でも…安定と再建から成り立つ平和があって初めて自由をやる余裕が生まれる、っていうのも紛れも無い事実だからね。平和が無いのに自由をやろうとしたら、その自由はすぐに無秩序に変わっちゃう。シン君が住んでた世界がまさにその好例でしょ？あんな世界を平和にしようとすると、それこそ『デスティニープラン』なんてものを思い付いちゃう人がいるのも俺は仕方無い事だと思うよ」
「俺も最初はこんな政策間違ってる！って思ってましたけど…時間が

経ってから見返すと、あんな政策が必要になるぐらい酷いあの世界が悪すぎるって思う様になりましたよ…シン君、ほんとよく頑張ったっスね」
　椿と正義から同情と労いの言葉を掛けて貰い、心が少し軽くなるのをシンは感じる。
「だから『時と場合による』としか言えないんだよ。その世界にまず『何が必要か』って所を知らなきゃ、どっちが大事か、なんて決められる訳も無いしね。もしデスティニープランをこの世界でやろうとする人がいたら、シン君はその人に賛同できる？」
　それを聞いて、シンはハッとする。
　互いが互いを同じ【命】として認め、共に歩む事を受け入れているこの平和な世界で。
　仲間と共に同じ未来を見て、夢を追い掛けて、自分らしく輝く事が許されているこの自由な世界で…
　…漸く椿の言いたい事が完全に理解できた。
「…肯定派として戦ってた俺が言うのも何ですけど、この世界でやっても百害あって一利なしだと思います」
「でしょ？そういう事だよ。何が正しいかなんて誰にもわからないし、答えは無い。正義なんて人それぞれだからね。その人がどんな環境で産まれて、どんな経験をして、最終的に何を思うかで変わるんだよ。だから仮面ライダーは正義を名乗らないんだ」
　そこまで言った所で、椿は一息吐いてから再び言葉を紡いだ。
「まぁ、何が正しくて何が間違いかなんて、結果が出なきゃわからないからね。その結果に自分が納得できたなら、それは正しかったって事だよ。だから…シン君もさ、自分の行いとか想いとかがどうだったかなんて、簡単に決め付けちゃダメだよ。この世界はC・Eと違って時間と余裕ならたっぷりあるから、ゆっくり考えれば良いよ。今までの事も、これからの事もね」
　そう言って、椿は慰める様にシンの頭にポンと手を置く。
　その様子はまるで挫折した息子を励ます父親、或いは進路に迷う生徒の相談に乗る教師にも似て見えた。

「今日はありがとうございました！」
「今度はガンプラバトルの動画録ろうね」
全ての過程が終わり、別れの挨拶を交わす3人。
背中を向けて事務所を後にするシンを見守りながら、正義は椿に尋ねた。
「…最後の質問、あれ本当にリスナーさんからの質問だったんですかね？」
「多分、リスナーさんの質問に便乗したんじゃないかな？シン君としても聞きたい事ではあったんだろうけど…シン君の性格なら、そんな回りくどい事せずに直接聞くと思うしね」
椿はふっ、と微笑みながら去って行くシンの背中を眺める。
（色んな事に挑戦して、色んな経験をして…カッコいい男になるんだぞ、シン君）

# 第１７話「興味持ったＶｔｕｂｅｒを調べたらとっくに引退してたって事、まぁまぁあるよね」

「…よし、必要な機材は買い揃えたな。すいません付き添って貰って」
「ふふーん、部下の面倒を見るのも総帥たる我輩の勤めだからな♪」
「いつ俺があんたの部下になったんですか」
ドヤ顔を浮かべる巨大な角のある紫メッシュが入った銀髪の少女…ＨｏｌｏＸ総帥【ラプラス・ダークネス】にツッコミを入れるシン。
故障した機材の代わりになる機材と次の配信でプレイするゲームを購入した帰りである。
…え？ヒロイン一同はどうしたって？
まだ未登場のホロメン出したかったからお留守番して貰っｔ「じゃあ敵だね？」えっ（斬

「待てーーーーーーーー!!」
「ひったくりーーーーーーーーっ!!」
後ろから聞こえる叫び声。
「「ん？」」
背後を振り向くと、帽子にサングラスにマスクと言ったいかにも不審者ですといった服装の男と、それを追い掛ける薄紫色の髪の女性と、先端をグラデーションの淡紅色に染めた銀髪の女性の姿が。
逃げる男の脇には、高級そうながらも到底男が持つ様な物ではない女物の鞄が抱えられている。
あれが盗まれた鞄だろう。
「どけぇぇぇ!!」
「…っ！」
仕方無いから俺が捕まえてやろうか、とひったくり犯の進路上に出たシンの眼が、ひったくり犯の右手に携えられた光る物体…ナイフを

捉えた。
――このままじゃ先輩を巻き込んじまうな。
シンは冷静にそう判断し、やむを得ずラプラスを手で制しつつひったくり犯に道を譲る…様に見せ掛けて。
「…ふッ！」
「あっ…!?がぁぁぁぁぁ!!」
…すれ違いざま、雷光の如き疾さで脛を蹴り抜いた。
激痛に悶えながら転倒するひったくり犯。
シンは一切気を緩める事無く、流れる様に組み付き、ザフト式対人格闘術の訓練で身に付けた固め技でひったくり犯の動きを完全に封じた。
「ぐぎゃあああああああっ!!?」
「総帥、警察！早く!!」
「わ、わかった！」
ひったくり犯を抑えながら鋭い声でラプラスに要求する。
それから数分もしない内に近くの交番から警察が派遣され、ひったくり犯はあえなく御用となった。

「ふぅ…お陰で助かったわ。ありがとう、イケメンのお兄さん♪」
「どういたしまして」
ひったくりが連れて行かれるのを見届けた後、薄紫の髪の女性がシンに感謝の言葉を告げる。
すると、相方の銀髪の女性が声を掛けて来る。
「ねぇ、今からちょっと時間ある？」
「え～っと…はい、ありますけど」
「ウチのお店に来てよ！お礼したいから！」
「店？」
女性の言葉に首を傾げるシン。
銀髪の女性に捕捉する様に、薄紫の髪の女性が説明する。
「この近くに私達がやってる喫茶店があるのよ、ついて来てくれる？」

「着いたわ、此処よ」
２人が連れて来られたのは、モダンな雰囲気が漂うこぢんまりとした喫茶店。
「ＨＯＮＥＹ　ＳＴＲＡＰ…？」
看板に書かれている店の名前に、何処かで聞いた様な…とシンが考えていると、２人の女性が入る様に促す。
「さぁ、入って」
「どーぞどーぞ！」
扉を開けて中に入ると、露出の多いメイド服の様な恰好をした２人の女性がいた。
青い髪に褐色肌の女性と、右眼に眼帯を付けた短い緑の髪の女性。
「いらっしゃいｍｓ…あ、パトちゃんメアちゃん、お帰り～」
「お客さん？」
「ただいま～…さっき荷物ひったくられちゃってね、この２人が捕まえてくれたのよ」
「ふ～ん、じゃあおもてなしするって事でおっけー？」
「いや、ほんとに気ィ遣わなくて良いんで…うおっ!?」
そう行って隣にいる薄紫の髪の女性を見たシンが驚愕の声を上げる。
一瞬目を離した隙に、隣にいる２人の服装も変わっていた。
２人はシンとラプラスの前に出て、改めて向き直る。
「「「ようこそ、喫茶ハニーストラップへ！」」」
漸くシンは既視感の正体に気付く。
彼女達はホロライブ、にじさんじに次ぐ大手Ｖｔｕｂｅｒグループ【７７４．ｉｎｃ】のメンバーだ。
元々は現在この喫茶店にいるメンバーで【ハニーストラップ】というグループ名で活動していたが、最近運営事務所がグループを統合したのだ。

シン自身は面識は無いものの、先輩タレント達がコラボしていたので顔と名前だけはやんわりと記憶に残っていた。
薄紫の髪の女性【西園寺メアリ】。
緑の髪に眼帯の女性【堰代ミコ】。
褐色肌に青い髪の女性【島村シャルロット】。
そして、この中で現在唯一事務所から独立した個人勢として活動中の銀と淡紅色の髪の女性【周防パトラ】。
…他にも1人いたが、シンがこの世界に来る前に実家の都合で卒業したとの事。
因みに種族は全員悪魔である。
「そこの席座ってどうぞ～」
ミコに案内され、窓際の席に座る2人。
「何食べたい～？」
「苺パフェ！」
「俺は…じゃあティラミスとアイスティーのセットお願いします」
「は～い」
注文を受け、厨房の中へと消えて行くミコ。
「…ねぇ、君何処かで見た事あるんだけど…」
そう怪訝な顔で覗き込んで来るのはシャルロット。
「あれ？気付いてないの？その2人、ホロライブのメンバーだよ」
「え…？ああ、通りで見た事あると思った！」
「はい、シン・アスカです。こっちはｈｏｌｏＸ総帥のミロカロス山田です」
「ラプラス・ダークネスだ！誰だミロカロス山田って!!」
シンのボケにツッコむラプラス。
2人がコントを繰り広げている内にメアリが注文の品を運んで来る。
「はいはい、コントはそこまで。ティラミスのアイスティーセットと苺パフェお待ち遠様」
「ありがとうございます、頂きます」
「お～、でっかいし可愛い！」

出されたパフェに大喜びのラプラス。
そんなラプラスに内心微笑ましい気持ちになりながら、シンもティラミスを口に運ぶ。
チーズのコクとコーヒーの風味が完全調和（パーフェクトハーモニー）を奏でながら口の中に広がった。
アイスティーもすっきりした上品な味わいで、かなり上等な茶葉を使っている事が見て取れる。
「ん…旨いですよ、これ！」
「なら良かったわ♪」
嬉しそうに微笑むメアリ。
隣でパフェを頬張るラプラスもご満悦の様だ。
すると、ふとシャルロットが口を挟んだ。
「でもホロライブに男性タレントなんていたんだね」
「あれ、知らないの？あのガンダムの主人公がホロライブからデビュー！って話題になってたのに」
「うん、だってシャル、ガンダム好きじゃないし」
ミコの問いかけにそう返すシャルロット。
意見は人それぞれとは言え、シンは自分が歩んだ物語も含むシリーズを悪く言われる事に少し複雑な気分になる。
「だってさ、『戦争の中で主人公が人間として成長する物語』なんておかしいじゃん。普通戦争なんか経験したら心病むでしょ？メカデザインとかはカッコいいし、戦争物としての出来も良い方だとは思うけど…幾ら何でも嘘を教えるのはダメだよ」
シンはそれを聞いて成る程な、と納得する。
戦争を経験し、精神疾患を患った人の体験談はメディアやネット、動画サイトなどでも簡単に知る事ができる。
実際、自分もあの戦争で酷く心をやられたものだ。
レイの言葉で自分の意思を取り戻せなかったら、この世界に来れなかったら…ずっと殺し殺されの繰り返しでトラウマに苦しめられ続けていただろう。
そこに今度はメアリが。

「そういう意味では割と現実的な結末だったシン君ならシャルは結構気に入るんじゃない？」
「え？そうなの？」
「そうそう、何かよしよししてあげたくなっちゃうのよね～♪」
「…あんまりそういう事軽々しく言ってると痛い目見ますよ」
若干照れ臭そうに忠告する。
自分としては漫画の方を見て欲しいものである。
「もう、恥ずかしがっちゃって♪そういう所が可愛いんだから～♪」
「だーっ！彼女持ちの男誘惑しないで下さいって!!」
頭を撫でて来るメアリに、仄かに頬を染めながら拒否するシン。
ちょこ先生みたいな人だなぁ、と密かに思った。

「今日はありがとう、お陰で助かったわ」
「いえ、俺達の方こそご馳走様でした」
やがて夕方になり、４人の悪魔達に挨拶して店を出るシンとラプラス。
店を去る２人を見送ると、メアリがふと呟く。
「結構可愛い男の子だったわね～」
「わかる～、何か凄く真っ直ぐって言うか」
「彼女４人もできちゃう訳だよね」
口々に返すシャルロットとミコ。
「…私もその中に入れて貰おうかしら？」
「「…今何て？」」
ボソッと呟くメアリと、聞き返すシャルロットとミコ。
「…メアリお姉様も？」
「「ゑ？」」
そこに追い打ちを掛けるパトラ。
…そしてまたしても何も知らないシン・アスカ。

「むむっ！」
同刻、ホロライブ事務所。
突然自分のアホ毛がピクピクと動いた事に気付いたメルが勢い良くソファから立ち上がる。
一旦作業の手を止め、尋ねるアスラン。
「どうした、メル？」
「今、シン君専用フラグ探知機が反応した!!」
「いつから君にそんな特殊能力ができたんだ」
アスランは呆れながら再び作業に戻る。
彼が操作するパソコンのモニターには、『ＰＲＯＪＥＣＴ　ｈｏｌｏｓｔａｒ，ｓ』の文字が映し出されていた。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
白と蒼の装甲を纏った人型の機械が、その手に握られた光る剣で緑色の単眼の人型の機械を両断する。
「はぁ、はぁ、はぁ…これで…全滅…！」
荒い息を吐きながら、白い機体の中で赤い髪の女性が敵の殲滅を確認する。
そこへ黒い単眼の人型が近寄って来て、通信を繋ぐ。
モニターに映るのは、褐色肌にオールバックにした金髪の男。
『おいおい、あんまり無茶すんなって言ってんだろ？〇〇〇〇〇』
「…平気です。今の私には、これしかありませんから」
『…そーかい』
そっけなく返す黒い機体のパイロット。
――――ま、あんな事があったんじゃこうもなるわな。
そんな胸の内の呟きは、口に出さなかった。
仲間を、愛する人を失い、妹とも絶縁に近い状態になり、彼女の中には既に何も無くなってしまった。
…彼も、こんな気持ちで戦っていたのだろうか。
自分が愛した、燃える様な赤い瞳の少年も。
『…テロの発生件数が明らかに右肩上がりで増えているな。終戦から

まだ間もないと言うのに…』
２人の他にもう１機、白い単眼の機体から通信が入り、モニターに銀髪ボブカットの男が映る。
「戦い…全然終わらない…」
『…』
苦々しげな女性の呟きに、２人は何も言えなくなる。
これが、自分達を救ってくれたあの人への恩義に背いた十字架だという事はわかっていたつもりだったのに…。
自分達の行為の皺寄せを喰らった被害者である筈の彼女まで巻き込んでいる。
一体何の冗談だろうか。

…突然、機体が揺れた。
『『「!?」』』
まるでミキサーに掛けられているかの様な衝撃が襲い、機体の制御が効かなくなる。
『どうした!?』
『わからねぇ！機体が…言う事聞かねぇよ!!?』
「何!?何なのよ、もう!!」
動揺する３人の目に、一瞬、ある物が映った。
「何…これ…?」
それは、宇宙空間に開く大きな【穴】。
突然現れたそれは、抵抗する余裕すら与えず、３体の機械を飲み込んで行く。
『ぐっ…クソぉぉっ!!』
『ヤベぇ！吸い込まれる!!』
「きゃあああああああああーーーーーーーっっ!!!」
宇宙空間に開いた穴は瞬く間に３人を喰らい…消えた。

# 第１８話「旅行先で知り合いと出会った時の気まずい雰囲気、何とかならんか？」

「ふぅ…中々良かったですね、あのプール」
「うん、すっごく楽しかったね！…ちょっとはしゃぎすぎちゃったけど…／／／」
「気持ち良かったね～♡メルの水着、どうだった？」
「すっごく似合ってたわよメル様～♡」
「団長はちょっと胸キツかったかなぁ…そろそろ買い替えんと」
何やら甘ったるい空気を漂わせながら街中を歩くシンとその彼女達の姿が。
彼女達は現在、次のコラボイベント先であるリゾート施設へ下見に行っていた帰りだ。
…まぁ、下見と言いつつ本命の目的はただのデートだったのだが。
今日は本来休館日だったが、支配人の許可を得て特別に遊ばせて貰う事ができたのだ。
誰もいない施設で遊ぶのは自由度が高くて中々楽しめた様だ。
…その最中で誰の目も無いのを良い事に少し羽目を外して派手にイチャイチャしたのは別の話。

――――ドゴオオオオオオオオオオオオッ!!
「「「「!?」」」」
突如、轟音が鳴り響いた。
「今の音…事務所の方からだったわね？」
「…こりゃまた誰か何かやらかしたか？」
「こよちゃんじゃろか？」
「いやロボちの可能性も…」
「じゃあメルはシオンちゃんに一票」
…至って冷静に事務所へと歩を進める一同。

この日常に何だかんだ馴れつつある自分にシンは少し呆れを抱いた。

「あ、シン…来たか」

「嘘だろぉ…？」

帰って来たシンを困り顔で出迎えるアスラン。

この世界にやって来て騒がしい毎日に馴れつつあるシンも、現在目の前に広がる光景には流石に目を疑った。

瓦礫の山と化した事務所…その上で横たわる物体。

「シン様、これって…」

「…『インパルス』まで来るなんてなぁ」

嘗ての愛機【ＺＧＭＦ―Ｘ５６Ｓ／α　フォースインパルスガンダム】が瓦礫を下敷きにして眠っていた。

傍らには黒い【ザクウォーリア】と白い【グフイグナイテッド】が倒れている。

「この機体のパイロット…十中八九あいつ等だろうな…」

「…取り敢えず、中のパイロット助けない事には始まらないですね」

「じゃあ団長抉じ開けて来っから待っちょってね」

「だから何でも力で解決しようと…」

「行って来まーす」

そう言い終える前に、ノエルは瓦礫の山を登ってインパルスの元へ向かう。

「だぁっ！話してる途中でしょうがぁぁぁぁ!!」

慌ててノエルの後を追い掛けるシン。

ノエルがインパルスの元に歩みを進め、瓦礫の山を登る最中…ハッチが一人でに開き、赤い宇宙服を纏った人間が姿を現した。

「う、うぅ…」

意識が浮上する。

「一体…何が…？」
機体の状況をチェック。
――――エンジン出力低下。
――――各部マニピュレーターに異常発生。
――――スラスター出力低下。
――――損傷度合、軽度。
「取り敢えず…まだ生きてるか…隊長と副長は…？」
…一先ず状況確認をした方が良いだろう。
そう考え、女性はスイッチを操作してハッチを開く。
「っっ!!」
刹那、視界を焼き尽くす白い光が飛び込んで来る。
「…これ、太陽の光…って事は…地球…!?」
外に出て辺りを見回すと、周囲に建ち並ぶビルの森に、群がる人だかり、ＭＳの下敷きになった瓦礫の山が。
ギギギ…と音が聞こえ、振り向くと各々の乗機から姿を現す隊長と副長の姿が目に入る。
２人も自分達が置かれた状況に酷く驚いている様だ。
すると、ザッ、ザッ、ザッ…と瓦礫を踏みながら誰かが近付いて来る足音が聞こえる。
「お～い、大丈夫ですか～？」
音のする放送を見ると、やって来たのは中世の世界から来た様な肩当てと胸当て、手甲を付けた銀髪の女性。
そして、その後を追ってやって来たのは…
「シ…ン…？」
「えっと…久しぶり、だな」
見紛う筈も無い。
服装こそ私服だが、その黒い髪と燃える様に赤い瞳の少年。
自分が愛し、そして…死んだ筈の戦友。
視界がボヤける。
懐かしくも愛しい顔が目の前にあるのに、全く見えない。
「シン…シン…っ！うわぁぁぁぁぁぁぁぁん!!」

溢れ出る感情のまま、シンに抱き付いて胸に顔を埋める。
シンも一瞬戸惑う素振りを見せるが、やがて優しく微笑みながら泣きじゃくる女性…【ルナマリア・ホーク】の頭をそっと撫でた。

「…で、今はこの世界で生きてるって訳だよ」
「ぐすっ…そう、だったんだ…にわかには信じ難いけど、どんなオカルトであれシンが生きててくれて何よりだわ」
ルナマリアが落ち着いた所で、自分がこの世界に来た経緯を説明するシン。
「アスラン貴様ぁ！生きていたなら連絡ぐらい寄越さんか!!」
「無茶言うなよ、異世界にいたなんてあらゆる意味で言える訳ねぇだろ」
「あはは…まぁそういう事だ」
そのすぐ傍では、アスランに詰め寄る隊長（イザーク・ジュール）と、それを宥める副長（ディアッカ・エルスマン）の姿が。
相変わらず騒がしいヤツだ、と内心苦笑しながらも、何も変わっていない戦友にアスランは懐かしさを覚えた。

「…で、ずっと気になってたんだけど」
「何が？」
「そこの金髪の人、何時までコスプレしてんのよ？」
ルナマリアが指さした先にいるのはちょこ。
…どうやら、彼女の角と翼、そして尻尾をコスプレだと思っている様だ。
「あー、もしかして…あれ、コスプレだと思ってるのか？」
「当たり前じゃない。コスプレじゃないなら何なの？」
「…触ってみる？」
妖艶に微笑みながら歩み寄るちょこ。
そこでルナマリアも漸く、ちょこの尻尾が蛇の様にクネクネと蠢い

ている事に気付く。
「…え？」
「…どうする？」
「じゃ、じゃあ…お言葉に甘えて…」
ちょこの尻尾に手を伸ばすルナマリア。
ぐにぐにと少し力を入れて揉み、軽く引っ張ったりすると、ちょこが甘ったるい声を上げる。
「あっ♡そんな♡激し…っ♡やんっ♡」
「変な声出さないでよ！気まずいから!!／／／」
仄かに頬を染めながら声を張り上げるルナマリア。
なるべく意識しない様にして、尻尾を調べた結果…
「…これ、直に生えてる!?」
「はぁ？おいおい、んなバカな話あっかよ」
「ほんとですって！副長も触って…あ～、触るなら角にしてあげて下さいね！」
「へいへい…ちょっと良いですかね？」
「角はそんなに敏感じゃないからどうぞ～♪」
ちょこに許可を得て、ディアッカは角を触診し始める。
「…!?」
数秒後、ディアッカの顔が驚愕の色が浮かべて固まる。
「どうした？」
「グ…グゥレイトォ…本物だぜこりゃあ…」
「はぁ？貴様まで何を言って…」
「触ってみりゃわかるっての！」
訝しげな顔でちょこの角に触れるイザーク。
そして、２人同様にその顔を驚愕で染め上げた。
「…俺はどうやらおかしくなってしまった様だな」
「現実逃避してんじゃねーよ！」
疲れた様な表情で空を仰ぐイザークにすかさずツッコミを入れるディアッカ。
その横で、ガラガラッと音が響いて瓦礫が崩れ、下敷きになってい

た5期生のフェネックの獣人【尾丸ポルカ】が姿を現した。
「うがーっ！死ぬかと思った！」
「あ、大丈夫ですかポルカ先輩？」
「大丈夫に見えるか！何？ガンダムキャラは事務所壊すのがお家芸か!?」
「先輩達だって事務所しょっちゅう壊すでしょ」
すました顔でツッコミながらポルカを救出するシン。
「ねぇ、シン？もしかしてその娘の耳と尻尾も…」
「ああ、本物だよ。触りたいなら本人に許可貰えよ？」
「い、いや、遠慮しとくわ…それにしても色んな人…人？なんか、まぁ…色んなのがいるのね、この世界」
辺りを見回しながら、ルナマリアは嘆息する。
他にも角やら耳やら翼やら尻尾やら、人間には無い特徴を持つ者達が往来するのが見える。
なのに、彼等はそんな事を気にする様子は一切無い。
遺伝子を弄っているか否かですぐに相手を滅ぼす為の戦争を始めてしまう世界に住んでいた彼女達にとっては、目に映る光景の何もかもが新鮮だ。
「…よくこんだけいて戦争しねぇもんだな」
「失礼な言い方しちゃうけど…こんな人達があの世界にいたら、真っ先に化け物扱いされて終わりよね」
酷く感心した様な眼差しを浮かべる3人とは対象的に、シンは哀しげに吐き捨てる。
「…今の俺に言わせれば、ちょっと遺伝子弄ってるってだけですぐ滅ぼし合うあの世界の人間の方がよっぽど化け物に思えるよ」
その呟きに対して返す言葉を、3人は持たなかった。

「…で、何でこんな事になったんです？」
閑話休題（それはさておき）。
何故こんな事になったのか、原因を考え始める一同。

「実は…」
しかし、案外すぐに判明した。
アスランが挙手して経緯を話し始めたのだ。
何でも、異世界とこの世界を繋ぐ装置にトラブルが発生し、偶然C・Eと繋がってしまったらしい。
新プロジェクトの候補生達を呼び出す為に起動した矢先の出来事だったという。
「…要するに貴様のせいかァ!!」
「落ち着けって」
アスランのせいとわかるや否や、早速掴みかかるイザークをディアッカが宥める。
「で、俺達帰れんの?それだけ知りてぇな」
「まぁ一応…だがイレギュラーな事態だからな、またC・Eと繋げて帰れる様にするまでは暫く掛かるぞ」
「マジ?」
アスランの言葉に落胆するディアッカ。
「…ま、休暇取れたとでも思っとけば良いんじゃないですか?折角だから、俺もルナにこの世界を紹介したいんで」
「その間住む場所どうすんのよ?」
「ホロライブハウス(ウチの社員寮)の空いてる部屋使わせて貰える様に交渉してみるよ。YAGOOのおっさん…社長なら二つ返事で許可くれると思うぞ」
そんなにホイホイ断言して良いのか、と内心不安なルナマリア達だったが、他に方法も無いので彼等の厚意に甘えさせて貰う事にした。

「しっかし、お前らも災難だったよなぁ…口封じの為に処分されるなんてよ」
「は?」
その後、YAGOOに相談して空いている居室を使う許可を貰った

一同はホロライブハウスへと向かっていた。
その最中、唐突にディアッカが訳のわからない事を口にし、シンとアスランは首を傾げた。
「まさかデュランダル議長に都合の悪い情報を知ったせいで、仲間から殺されるなんてよ…」
「いや、何の話ですか？俺達を殺したの、オーブとクライン派の連中なんですけど」
「な、何ィ!?」
「んだと…？」
シンの言葉に思わず絶句するイザークとディアッカ。
ルナマリアも声には出さなかったが、かなり驚いている様子だった。
聞く所によると、「シンはデュランダル議長が隠している後ろ暗い秘密を知ってしまったが故に口封じの為に殺され、アスランはシンを庇おうとした結果敵の砲撃に巻き込まれてしまった」という事になっているらしい。
「はぁ!?何だよそれ…」
「つまりあれは…ラクス議長のでっち上げた作り話という事か…!?」
怒りを通り越して呆れるシンと、思わず目眩がして転びそうになるイザーク。
「お前、あんまり驚いてねぇけど…知ってたのか？」
「まさか？話が出来すぎてるし、怪しい人事編成もあったから『何かあったな』とは思ってましたけど…これは流石に予想できませんって…」
一方で、ディアッカに問われたルナマリアは違和感自体は感じていたと答える。
実際あり得ない話ではない。
嘗てヤキン・ドゥーエ戦役の時もクライン派は当時の戦犯【ラウ・ル・クルーゼ】に全ての責任を擦り付けて隠遁していたのだ。
その上、極一部の人間以外…それこそキラ・ヤマトにすら内緒で兵器の開発やフリーダムの修復を行ったりもしていた。

恐らくルナマリアが言った人事編成というのは、身内が働いた仕打ちが外部に漏れない様にする為の措置の一環なのだろう、とシンは考える。
「…何ですか？やっぱ俺がオーブやクラインに対して持ってた印象って正しかったんですか？」
「…」
今回ばかりは、流石のアスランも何も言い返せなかった。
一方でシンは「俺達の住んでた世界、本当に魔界を超えた魔界だったんだな」と何度目かもわからない実感を覚えた。

「へぇ…良い部屋住んでるのね」
「だろ？」
ホロライブハウスに着いた一同は、その後宛てがわれた部屋へと3人を案内した。
「ありがとう、何から何までやってくれちゃって」
「気にすんなよ、同期のよしみってヤツさ」
ここで2人きりでいるのは、シンから聞きたい事があったからだ。
「…あれから、ミネルバ隊はどうなったんだ？」
嘗ての仲間達のその後を知る為。
「…解散させられた。メサイア戦役の責任を取らされてね」
彼女の話ではこうだ。
艦長を務めていた【タリア・グラディス】がデュランダル議長と共にＭＩＡになり、次点での最高責任者であった副長の【アーサー・トライン】が責任を問われ、地方にあるザフト駐屯地に左遷になった。
他のミネルバ隊のクルーは今回のザフト上層部の対応に嫌気が差し、全員が辞職届を叩き付け、辞めて行った。
「ルナは辞めないのか？」
「ううん、辞職届は私も出してやった。ただ、自分で言うのも何だけど、短い間とは言えミネルバ隊の主力だった時期もあったからね。手続きに少し時間が掛かっちゃったみたい。今は退職予定日まで

ジュール隊で最後の奉公中…って訳」
　ルナマリアの説明にシンは成る程な、と頷く。
　そして…
「…死んだのか、ヨウラン」
　アカデミーで同期の整備士【ヨウラン・ケント】の死。
　∞ジャスティスがミネルバに向けて放ったリフター攻撃によって爆発に巻き込まれたとの事だ。
「やっぱ恨んでるか？アスランの事」
「まぁね…戦闘行為だったって弁えてはいるけど、そう簡単に割り切れる話でも無いし。此処に来るまで何度殺そうとして思い留まったか、もうわかんないわ」
「ははは…よく我慢できたな」
「そういうシンの方はどうなの？」
「まぁ…アスランと話して、向こうの言い分も間違ってないってわかったからさ。デュランダル議長が悪だったとも思ってないけど。それに…助けて貰ったのは事実だしな。でも…何か複雑な気持ちではある…かな」
　そこまで言った所で一息吐き、だから、と言葉を紡ぐ。
「明日アスランをぶん殴りに行く。事情を知れば、1発や2発ぐらい甘んじて受けてくれるだろうさ」
「…じゃあ私もご一緒させて貰うわ」
　ふふっ、と顔を見合わせて笑う2人。
「じゃ、私そろそろお風呂行っても良い？戦ってすぐだったから、疲れちゃってて」
「ああ、お休み」
　そう言って、シンは自室へと戻った。

「へぇ～…じゃあ私達の世界ってアニメとかコミックになってるって事？」
「そういう事ね」

所変わって大浴場。
現在ルナマリアはそら、メル、ちょこ、ノエルの４人と裸の付き合いで絶賛ガールズトーク中である。
「あ、でもルナちは観ない方が良いかも」
「何でですか？」
「シン君も含めてザフト全般はものすごく扱い悪いから」
「そんなにですか？」
そらの説明に軽くショックを受けるルナマリア。
どんな描かれ方してんの私達。
「それはそれとして、聞きたいんですけど」
「何？」
首を傾げるメルに、ルナマリアは質問した。
…してしまった。
「…この４人って、シンとどういう関係ですか？他のホロライブの娘達と比べてもすっごく仲良さげでしたけど」
「ふっふ～、聞いて驚け…ガールフレンドだよ♪」
「…は⁉」
思わず声を張り上げてしまうルナマリア。
「ガ、ガールフレンド…って…ええっ⁉」
「あはは…シン君とは結婚を前提にお付き合いさせて頂いてます…」
気まずそうに苦笑しながら、結婚前の挨拶の様に説明するそら。
――ビシッ！
ルナマリアの中の何かに、音を立てて亀裂が入る。
「え…？何？それ…４股って事…？」
「そういう事じゃなぁ…シン君は誰か１人にしようとしちょったけど、後輩の娘が政府に圧力掛けて重婚オッケーの法律作ってくれてな？」
――ビシッ！
また亀裂が入る。
「…因みに…皆…シンとは、何処まで進んでるの…？キス、ぐらいは…した？」

「嫌だわルナマリア様～♪そこまで聞いて来ちゃう？」
「ご、ごめんなさい…念の為、教えて、頂けると…」
そして、ちょこから帰って来た返答は…
「もう身体の関係まで作っちゃってますわ♡」
――ガシャァァァァァァァァァァン!!
ルナマリアの中で何かが壊れてしまう。
遂に彼女はショックで気を失い、湯船の中へ沈んでしまった。
「ちょっ、ルナち～～～!?」
「大丈夫!?」
慌ててルナマリアを救出するそらとメル。
「…これ、ルナちゃんもそういう事だったんじゃろか？」
「シン様も罪な男ねぇ」

# 第１９話「完成度が高いからって必ずしも未完成のものより優れてるとは限らない」

その時、４人の間には陰鬱な空気が流れていた。
「貴様ら…揃いも揃って俺を嵌めようとしているな…！」
「それがこの世界のルールなんですよ、乗り込んで来たのはそっちでしょ？」
「弱ければ死ぬ、強ければ生きる、それだけの話ですよ隊長」
「わりぃな、イザーク…」

「よっしゃ、スマッシュゲージＭＡＸ！」←クラウド、残機２
「シン、決めちゃって！」←ミュウツー、残機１
「貴様ぁぁぁぁ！元とは言えザフトの戦士たる者が数の暴力に頼りおって!!」←マリオ、残機１
「戦争なんて元々そんなもんだろ」←ドンキーコング、残機０
「素人の分際で煽りプレイなぞやらかした阿呆は黙っていろ!!」
…仲良くスマブラをしていた。
因みにシン、ルナマリアコンビとイザーク、ディアッカコンビのチーム戦である。
「チッ！何とかゲージの時間切れまで持ち堪えｔ」
「ほいっ」
「貴様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
逃げ回って時間を稼ぎ、逆転のチャンスを伺おうとしたマリオ（イザーク）の動きをミュウツー（ルナマリア）が金縛りで封じる。
「ルナ、ナイス！」
『スキガナカッタナ』
「おのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれ…!!」
何処ぞのＡＵＯの如く喚きながらコントローラーをガチャガチャと操作し、最後の切り札（超究武神覇斬）から逃れようとするが、無駄な足掻きである。

クラウド（シン）の剣撃の嵐によって連続で大ダメージを喰らい、最後の一発で遂に撃墜された。
「ぬわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
「いぇーい」
仲良くハイタッチするシンとルナマリア。
その様子をジュースと菓子を載せたトレーを持ったアスランが眺めている。
「…かなりはっちゃけてるな、お前ら」
因みにアスランの両頬にはガーゼが貼られている（しっかり殴られた）。
「副長が煽りプレイかましてくれたお陰で勝つのが楽だったわ」
「ぷるー〇はぶを参考にさせたのが間違いだったな…あの人上澄み中の上澄みなんで」
「マジかよ…面白ぇ戦い方するなって思ってたから真似したのによ」
「煽りプレイなぞできるのは実力があるヤツだけだ！それぐらいわからんか!!」
溜め息を吐いて落ち込むディアッカをイザークが罵倒する。
アスランは苦笑しながら４人の前にトレーを置く。
生き別れた嘗ての仲間達が、こうして仲良くゲームではしゃいでいる所を見ると微笑ましい気持ちになる。
「それよりシン、頼まれてた物ができたぞ」
「お、思ったより早かったですね」
アスランが取り出したのは、３台のスマホ。
「何それ？」
「異世界と通話できるスマホだよ。アスランと技術班の皆さんに頼んで作って貰ったんだ」
「まぁ、通話機能と…もう１つしか無いがな」
「もう１つ？」
首を傾げるルナマリアに、アスランはスマホを起動し、操作して画面にあるものを表示する。
「これ、次のライブのチケットじゃないですか！」

スマホの画面を見て思わず声を上げるシン。
画面には、次のホロライブのライブイベント、その電子チケットが表示されていた。
「A先輩に頼んでな、独自ルートで用意して貰ったんだ」
「いやAちゃん有能すぎだろ？もう1週間も無いぞ」
自社のスタッフ達の優秀さには何時も驚かされるな、とシンは内心舌を巻く。
実はこれを頼んだのは当のシン本人なのである。
かなりの無茶を言った自覚はあり、多分無理だろうなとは思っていたのだが…まさか本当に用意してくれるとは。
「こんなもの、本当に貰っちゃって良いの？」
「ああ、この世界を案内するにはやっぱり先輩達のライブは外せないからな。どうせならC．Eじゃ絶対に見られないもんを見せたいだろ？」
シンはそう言って悪戯っぽくウィンクしてみせる。
その動作に思わずドキッとしてしまうルナマリアだが、1つ気になった事があったのでそれを質問する事で辛うじて意識を切り替える。
「あれ、シンは出ないの？」
「ん？ああ、俺は基本別枠だからな。配信とかならしょっちゅう絡むけど、ライブは今までソロしかやってないよ。先輩達のライブは専ら観客席にいる」
仲間外れ感がする読者の皆様もいると思うが、【Ｓｈｉｎｙ　ｓｍｉｌｙ　ｓｔｏｒｙ】の中に1人だけ鈴村健一の声が混ざっていたらどう思うか、考えてみて欲しい。
凄まじい違和感を感じる事だろう。
そういう観点から、「入れてあげたいけど入れられない」状況が出来てしまっているのだ。
新プロジェクトが立ち上がったのは、この状況を打開する目的もある（本作の独自設定）。
――――まぁ、俺が来てるって知れば先輩達は…。

出そうになった言葉を、シンは心の奥に仕舞い込んだ。

そして、ライブ当日。
近隣の商業施設で軽く時間を潰した後、４人はライブ会場に向かう。
会場は既に人でごった返しており、見事な寿司詰め状態だ。
「グゥレイトォ…こりゃすげぇ数だな」
「もっと早く来るべきだったか…？」
あまりの観客の多さに、思わず言葉を喪うイザークとディアッカ。
「あんた本当に凄いグループに入ってるのね」
「だろ？」
一方で、シンが現在所属しているホロライブプロダクションの凄まじさを認識するルナマリア。
かのラクス・クラインですら、これ程の人気は無かった。
「只今より開場します！チケットの番号順にお進み下さい！」
係員のアナウンスに従い、一行は人の波に入り込んで中へ入って行った。

観客席へやって来た一行。
辺りにはサイリウムやらファングッズやらで完全武装したファン達が集結している。
ステージの上のスクリーンには、沢山のファンやイラストレーターから寄せられたホロメン達のイラストが映し出されている。
「どれも個性的ね」
「とんでもねえ愛され具合だぜ、こりゃ」
ギャグに全振りしたイラスト、可愛らしさを強調したイラスト、強いメッセージ性を感じるイラスト…各種様々だ。
次に映し出されたイラストにシンは思わず苦笑する。
「こりゃまた、随分俺の心情を巧く再現したイラストだ事で」

肩に銃を担ぎ、瓦礫に凭れ掛かる様に座り込んで項垂れる、返り血塗れのシン。
太陽の光を背に、優しく微笑みながら手を差し出すそら。
そらが差し出した手にシンが己の手を伸ばす場面がそれぞれ描かれ、１つに纏められた、簡単な３コマの漫画形式のイラストが映っていた。
「…ほんとにこんな感じだったよ、ここに来たばっかりの俺」
イラストに描かれた、生気の抜けた虚ろな眼差しのシン。
長い間見る事の無かった、純粋な輝きを瞳に宿した隣にいるシン。
２人のシンを見比べて、ルナマリアは密かに呟く。
「…シンを救ってくれてありがとう、ホロライブの皆」

『会場の皆様、お待たせ致しました！間もなく開演です！』
会場の照明がゆっくりと暗転して行く。
『同じ未来を見ていたい…♪』
『あの夢手にしたい…♪』
そして、歌声が旋律に乗って響き渡る。
『それぞれ♪』
『違った♪』
『ココロで♪』
『走れＧｏ♪』
「「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!」」」」
煌びやかな光がステージに立つアイドル達を照らし、会場のボルテージがいきなり最高潮に達する。
その余りの華々しさに、ルナマリア達は思わず息を呑む。
「すっごい…！」
「これが、ホロライブの真骨頂か…！」
「こっちまで気分がノッて来るぜ…！」
曲に合わせて舞い、歌うアイドル達。

それらが観客達の心を更に燃え上がらせ、その声援がアイドル達を更に輝かせる。
どちらが欠けても成立しない、まるで共生関係にある生き物の様な、儚くも強い眩しさがあった。

「皆〜！こんにちは〜!!」
「「「「わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーー!!!!」」」」
そらの挨拶に対するオーディエンスの返答が、まるで雷鳴の如く会場内に木霊する。
「今日は私達のライブに来てくれて…本当にありがとう！」
「全力で盛り上げて行くから、しっかりついて来てねー！」
「「「「イェェェェェーーーーーーイ!!」」」」
ＡＺＫＩとすいせいの挨拶が終わると、再びそらが静かに面持ちで告げる。
「そして…会場の皆さんに重大なお知らせがあります」
どよめく会場。
そらは大きく息を吸い込むと、一拍置いて大声で叫んだ。
「私達のライブに…シン・アスカ君が来てくれましたーーーーーーーー!!」
そして、変装して観客席内に紛れていたシンをライトの照明が照らした。
観客達の視線が一気にシンに集中し、まるでレーシングカーのエンジンを全開で鳴らした様な、周囲の音が一切聞こえなくなる程の歓声が上がる。
シンは少し気恥ずかしそうに苦笑しつつ頭を掻き毟ると、変装を解きつつステージの上に登った。
「…俺、お忍びで来てたんですけど？」
「まぁ良いじゃん、シン君だけに真打ち(シン)登場って事で」
「面白くないですよ」
ｈｏｌｏＸ(6期生)の幹部【鷹嶺ルイ】の寒いギャグを至って冷静にスルーす

るシンに、観客席からどっと笑いが溢れ出す。
「しょうがないなぁ…飛び入りで歌っちゃいますけど良いよね？答えは聞かないけど!!」
「「「「わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーーー!!!!」」」」
シンの呼び掛けに呼応し、観客達も歓声を上げる。
ステージの上で、シンは音楽に合わせて歌い、踊り、跳ぶ。
パフォーマンスの高さも然ることながら、それ以上に…
「シン…凄く楽しそう…」
嘗て見た事の無い程のシンの眩しい笑顔に、惹かれて行くルナマリアだった。

「…どうだった？ホロライブ（俺の仲間達）のライブは」
「ええ、ほんとに凄かった…！」
「グゥレイト…いや、パーフェクトだぜコイツは！」
「認めよう、実に素晴らしかった。これ程楽しい気分になったのは初めてかもしれん…あの宝鐘マリンとかいう女は意味がわからんかったがな」
「あ、あはは…」
イザークの言葉に思わず苦笑するシン。
マリンのクセが強すぎる楽曲は些か受け付けなかった様だ。
「まぁ、笑いを狙ったパフォーマンスとしてはかなりレベルは高いがな」
と、すかさず弁護を入れるイザーク。
因みにマリンが歌っている最中、ディアッカは終始ツボっており、ルナマリアは笑いを堪えるのに必死になっていた。
「だが…不思議なものだな。ラクス議長よりも遥かに輝かしい筈なのに…ホロライブはまだまだ進化を続ける、そんな気がする」
ぼそっと呟くイザーク。

ラクス・クラインは、歌手としてのパフォーマンスの全てが高い水準で、言ってしまえば完成された歌姫。
一方で、ホロライブの面々は各々の得意分野ではラクス・クラインを圧倒できるものを持つ分、苦手としている穴もあり、未完成と言える。
だが…未完成であるからこそ、己の苦手分野を埋める為に努力を積み重ねたり。
或いは、自分が苦手としている分野を逆に得意としている者達と力を合わせたり。
或いは、同じ分野を得意とする者と力を合わせて、それを何倍にも何十倍にも伸ばしたり。
別々の可能性を持つ仲間と組み合わせる事で、あらゆる姿へと変化し続ける。
故に、彼女達の成長は止まらない。
ラクス・クラインが余裕で霞んでしまう程の輝きを放ちながらも、何処までも進化し続ける。
それが彼女達だけが持つ力だった。

そして、それから1週間後。
「…本当に、良いんだな」
「ああ、世話になったな」
「お陰さんで良い休暇になったぜ」
機材の修復が完了し、3人がC・Eへと帰還する日を迎えた。
「ルナ…本当に帰るのか？」
「うん…正直、私もこの世界が凄く気に入ったけど…まだちょっと向こうの世界でやり残した事があってね。それに、私だけ帰らなかったら怪しまれるし」
「…そっか」
少し寂しい気持ちもあるが、それが彼女の判断なら…と、受け入れるシン。

そんなシンの気持ちを知ってか知らずか、ルナマリアはでも、と言葉を紡ぐ。
「それが終わったら、私もこの世界に引っ越すから。その時はこれで連絡するから、お出迎え宜しくね」
「わかったよ。じゃあ…〝またな〟」
「ええ、〝またね〟」
シンに背中を向けて機体に乗り込み、ハッチを閉めるルナマリア。
3人が各々の乗機を起動させたのを確認したアスランがパソコンを操作し、装置を起動させると、3機のMSの上空に穴が開く。
「イザーク・ジュール、グフ、出るぞ！」
「ディアッカ・エルスマン、ザク、行くぜ！」
グフとザク（ディアッカ）が先行して穴の中へと飛び込んで行く。
「…ルナマリア・ホーク、インパルス、出るわよ！」
そして、少し間を置いてインパルス（ルナマリア）が穴の中へ飛び込み、それを確認したアスランが装置を操作して穴を閉じた。

『一緒に～♪食べれ～ばハッピー♪あ～ふれ～るね～♪そんな時間が♪こんな笑顔が♪大♪好き♪し～しわたクッキング～♪っと』
『おい、あまりそれを向こうの世界で聴くなよ。異世界に行っていたなどと知られれば、それこそ面倒事になりかねん』
『へいへい、そういう事はその大音量で流れてる【いろはすてっぷ！】、止めてから言ったらどうだよ？』
『五月蝿い！向こうでは流石に自重するわッ!!』
やいのやいのとオープンチャンネルで騒ぐディアッカとイザーク。
コックピット内でディアッカは【ししわたクッキング】を、イザークは【いろはすてっぷ！】をそれぞれ大音量で流している。
2人は完全にホロライブのファンになってしまっている様だ。
「…」
『良かったのか？残らなくて』
「え？」

ふと、イザークから通信が入る。
『…アイツと一緒に生きたかったんじゃねぇのか？本当はさ』
イザークの言葉に補強するかの様にディアッカが続ける。
２人はルナマリアの本心を完全に見抜いていた。
――――――帰りたくない。
シンと一緒にいたい。
『どうせ貴様は退役を待つだけの身だ。残っても良かったんだぞ？』
「…良いんです、今の私がいてもシンに迷惑を掛けるだけですから」
自分の気持ちを伝えても、今のシンならばきっと受け入れてくれるだろう。
でも、やっぱり自分だけを見て欲しい気持ちを捨て切れずにいる。
そんな今の自分がいた所で、きっと迷惑になる。
今のシンの恋人達に嫉妬して、互いに嫌な思いをするだろう。
なら…この気持ちにケジメをつけるまでは、離れて暮らした方が互いの為だ。
『…そうか』
『取り敢えず、向こうに戻ってからの言い訳考えねぇとな…異世界にいました～なんて、言える訳無ぇや』
そう話しながら、イザークとディアッカは段々と近付いて来る穴の向こうに広がる別の宇宙…元の世界（C.E）へ向けて機体を飛ばす。
――――――シン、待っててね。
必ずまた会いに行くから。
ルナマリアも心の中でそう呟き、スロットルレバーを前に倒して機体の速度を上げた。

# 第２０話「新入りはできるだけ盛大に歓迎してあげましょう」

「ここがホロライブプロダクションか…」
ホロライブ本社ビルの前。
１人の青年がビルを見上げ、口角を吊り上げる。
…否、中性的な容姿だが、声の高さから察するに女性である事が伺える。
「何かワクワクするね！」
弾む様な声色でそう言うのは、すぐ側にいるオレンジ色の髪の女性。
「此処にそらちゃんとＡＺＫＩちゃん、アイドルの皆さんが…！」
金髪のサイドテールの少女が期待に胸を踊らせ、
「大丈夫かなぁ？周りがインパクト強すぎてはじめ達場違いとか思われたりしない？」
『はじめ』と名乗る金髪ショートカットの少女が不安げに呟き、
「インパクト欲しいなら能面貸すけどいるかの？」
「「「オメーはインパクトありすぎなんだよッ!!」」」
能面を付けた女性に他４人から一斉にツッコミが入る。
「ん〟んっ！」
中性的な見た目の女性が咳払いすると同時に、一同は気持ちを切り替える。
「じゃあ行こうか…【ｈｏｌｏｌｉｖｅ　ＲｅＧＬＯＳＳ】、始動だよ！」

「…」
「シン、少し落ち着け」
一方その頃、事務所の中。

そわそわして落ち着きが無いシンをアスランがやんわりと宥める。
「落ち着けって言われても…初めての後輩ですよ？そわそわするなって言う方が無理ですって」
そう、今日は新しいメンバーがこのホロライブにやって来る日。
シンにとって、初めての後輩タレントができるのだ。
因みに件のプロジェクトとはまた別枠であり、普通に全員女性メンバーである。
名を【ｈｏｌｏｌｉｖｅ　ＲｅＧＬＯＳＳ】と言うらしい。
そわそわしているシンにルイが声を掛ける。
「何の前情報も無く後輩できた私らよりマシでしょ」
「あはは…その節は大変ご迷惑をお掛けしました」
「緊張する必要なんて無いでござるよ」
苦笑しつつ謝罪するシンにいろはが励ましの言葉を掛け、お供（ぽこべえ）の狸がうんうんと短い首を縦に振る。
すると、事務所の出入り口がコンコン、とノックされる。
「あ、どうぞ～！」
友人Ａの呼び掛けに呼応する様に扉が開き、中に５人の女性達が入って来る。
「可愛い女の子と思った？残念青君でした！という事で、初めまして！【ｈｏｌｏｌｉｖｅ　ＲｅＧＬＯＳＳ】の火威青です」
「可愛い！ポジティブ！ジーニアス!!一条莉々華です！」
「ドレミファソラシド～！音楽家の卵、音瀬奏でーす！」
「寄ってらっしゃい見てらっしゃい！儒烏風亭らでんと申します！」
「ぶんぶんぶーん！押忍ッ！轟はじめです！」
「「「「宜しくお願いしまーす!!」」」」
元気良く挨拶する新人達。
その中でシンの視線が、１人のメンバーに釘付けになる。
「お…男…？」
「え？」
相手は火威青。
「…あ、【ｈｏｌｏｌｉｖｅ　ａｎｏｔｈｅｒ】のシン・アスカです！

宜しく」
動揺してしまったが、気を取り直して挨拶を返すシン。
「宜しくお願いします、先輩！」
Ｒｅ　ＧＬＯＳＳのメンバーを代表して、青がシンと握手を交わす。
そして、新メンバーを歓迎する為の宴会が始まった。

様々な飾りで彩られた事務所の中、シンやちょこ、ルイやＡＺＫＩを筆頭とした料理上手組が用意した豪華なパーティー料理が並ぶ。
「ん～♪んまぁ～♪」
「そういやオメーみこより滑舌ふにゃふにゃだったな」
「まさかみこち超えが来るとは…」
「いやぁ～、それ程でも♪」
「「褒めてねーよ」」
轟はじめがｍｉｃｏｍｅｔの２人に滑舌を弄られたり。

「ほう…お前社長なのか！」
「はい！アパレル関連とか、色んな企業を経営してます！」
「我輩も秘密結社のボスだぞ！同じ社長として宜しくな！」
「でもウチの結社って何やってるんですか」
「…」
「「目　を　逸　ら　す　な」」
一条莉々花がラプラス、ルイとビジネス談義に花を咲かせたり。

「そーいやオメー、初配信で随分好き勝手やってたのらなぁ？」
「いや～、トラブル起きちゃったもんで、それならいっそ派手にインパクト残してやった方が良いかなって」
「だからってスロカスヤニカス酒カスを公言するか」

「てかその能面何なのら？クロちゃのマネ？」
「沙花叉はヤニカス酒カスではねーよ!!」
らでんがスバルーナに初配信を弄られ、それがクロエにまで飛び火する珍場面があったり。

「ほ、本物のそらちゃんとＡＺＫＩちゃんに会えるなんて…！」
「そう言って貰えると嬉しいなぁ～♪」
「近い内に一緒に歌ってみたとか撮ろうね！」
「ほ、本当に良いんですか!?うぅ…もう私死んでも良い…!!」
「いや死んじゃダメだよ!?」
感極まった奏がそらとＡＺＫＩを前に死んでも良い発言をしてツッコミを喰らったり。

「騒がしいですね…ｗ」
「悪かったな、これがウチなんだよｗ」
そして、そんな様子を少し離れた所から眺める青。
２人分のジュースを持って来たシンが、片方を手渡す。
「俺もここ来たばっかりの頃は滅茶苦茶で煩くて、このノリについて行けるかな…って思ってたけどさ、慣れると滅茶苦茶楽しいんだよ」
「そ、そうなんですね…ｗ」
「まぁ俺の場合、ここに来るまでが来るまでだったからさ」
「あ～、ガンダムの世界出身でしたっけ？確かに地獄ですもんね」
前情報で知っていた青が納得する様に頷く。
此の世の地獄とも言えるガンダムの、その中でもトップクラスの民度の悪さを誇るＣ．Ｅで生まれ育てば、この世界が天国に見えるのも不思議ではない。
「ま、何か相談あったら乗るからさ」
「ありがとうございます、先輩」
「ああ、これから宜しくな！」

そう言って、シンは肩を組む様に青の右肩手を置く。

「ひゃあっ!?」

直後、青の背中が短い悲鳴と共にびくん、と跳ねた。

反射的にシンも青の肩から手を離してしまう。

「ど、どうした?」

心配になって声をかけるシンだが、何故か青の顔がほんのり赤い。

そこへアスランが口を挟んで来る。

「おいシン、新入りに早速セクハラか?流石に看過できないぞ」

「…は?セクハラ?」

首を傾げるシンに対し、アスランは「お前もかい」と言いたげに頭を掻きむしる。

「…青、説明してやってくれ」

アスランの言葉に頷き、財布から四角い長方形の紙の様なもの…運転免許証を取り出し、シンに見せる。

「…は!?」

そこに記載されている内容に、シンは唖然とする。

青も少し気恥ずかしそうに苦笑しつつ、打ち明ける。

「…僕、女なんだ」

「…はぁぁぁぁぁぁ!?」

衝撃の事実に変な叫び声を上げるシン。

コイツが…女!?

「まぁ、俺は偶然彼女の面接を担当したから知っていただけだがな…」

言いたい事はわからんでもない、とアスランも苦笑する。

っーか知ってたなら最初に言えや、とツッコんではいけない。

「あ、ご、ごめん!俺、まさか…っ」

女だとは思わずにとんだ失礼な事をしてしまった、と言い掛けて思わず口ごもる。

女だと思わなかった、などと女性に言うのは余りに失礼ではないか？
そんな事を言えば、彼女をさらに酷く傷付けてしまう事になるのではないか？
かと言って他にも何と言って謝罪すれば良いのか？
そう悩んで謝罪の言葉が出ずにいるシンに、青が微笑みながら返す。
「大丈夫ですよ、もう慣れてますから」
さも当然の様に言う青に、シンは愕然とする。
こんな女としての尊厳を壊される様な事を何度も経験しているというのか…？
「言われ慣れてるって…本当にそんなんで良いのかよ!?」
「あははは、何ならホストのバイトのスカウトもされた事あるし、一種の持ち味として活かしていこうかなって」
平然と笑って答える青。
その何処か渇いた様な笑みが、シンの心に火を点けた。
「…ちょっと来てくれるか？」
「え？え？」
シンは青の腕を取り、立たせると、ある人物の元へ向かう。

「そら先輩！」
「どうしたの？」
シンが青を連れて来たのはそらの元だった。
「…ちょっと手伝って欲しい事があるんですけど、良いですか」
「何？」
神妙な顔で告げるシン。
一呼吸置いてから、次の言葉を紡いだ。
「…俺、コイツを女にしたいんです」
「…は？」
どう聞いても事案ものの発言に、思わずそらと青は首を傾げた。

# Ｅｐｉｓｏｄｅ　ｏｆ　Ｍｅｌ～Ｒｅ：ｓｔａｒｔ～
## 第２２話「終わりの後には、新しい始まりがある」

メルがホロライブを退所してから、早1ヶ月。
シン、そら、ちょこ、ノエルはメルと共にホロライブハウスを出て、近郊に一軒家を構えてそこで暮らす事にした。
メルがホロライブハウスの居住権を失った為、シン達も彼女を支える為に引っ越したのである。
過ちを犯した原因が彼女自身を取り巻く環境下で起きた不幸や災難の数々による精神的疲弊だった為に、彼女を1人にするのは余りにも危険すぎると判断した為だ。
気が付くと首を吊ろうとしていたり、上の空な状態で手首に剃刀を当てていたりと、本人も無自覚なまま自らを傷つけそうになったり、死のうとしていたりしていた事も何度もある程だったのだ。
「…ごちそうさま」
「メル様、もう良いの？」
「うん…ごめんね、こんなに残しちゃって…」
「…気にしないで。無理矢理食べる方が身体に悪いから」
食事の半分以上が残っている皿を置いて席を立ち、ちょこに謝罪して部屋へと戻って行くメル。
あの件以来、メルは完全に活力を失った抜け殻になっていた。
胃袋の中へ無理矢理かき込む様な食事と、義務的な入浴と排泄の時以外はずっと部屋に閉じ籠りっきりの日々。
顔からは精気が抜け落ち、可愛らしかった声はざらざらで、やつれて体重も減ってしまっている。
美しい金色の瞳からは光が消え、生者であるにも関わらず纏う雰囲気はまるで亡霊の様。
他のホロメン達が心配して見舞いに来ても「合わせる顔が無い」の一点張りで徹底的に拒絶し続けていた。
「メルちゃん、大丈夫かな…」

「あんな事があったんだ…また元気になるまではかなり時間が必要になる筈ですよ」
不安げなそらに対し、シンは仕方無いという風に受け入れる。
だが、苦渋に満ちた表情を浮かべているのは変わらない。
「何とかホロライブに戻してあげられりゃええんやけど…」
「…契約解除はメル先輩が自分で申し出た事だ。なら、もう…俺達に一体、何ができるって言うんです？」
口ではそう言うものの、だからと言ってこのままではメルが永遠に塞ぎ込んだままなのは変わらないのも事実だった。
何か彼女を再起させる切っ掛けがあれば…と一同は俯く。
…その切っ掛けが、間もなく訪れる事も知らずに。

「…メル先輩？入りますよ」
ドアをノックして、メルの部屋へと入るシン。
ベッドの上で仰向けに倒れ込んでいたメルの顔が此方を向く。
「シン君…」
「…大丈夫ですか？」
「うん…大丈夫」
上体を起こしてベッドに腰掛けるメルの隣に、シンも腰を下ろす。
「…すいません、メル先輩が辛い思いしてる事にもっと早く気付ければ…こんな事には…」
「…シン君は気にしないで…事情とやった事は別だし。動機があるからって…泥棒や人殺しが許される訳じゃないでしょ…？」
的を射てはいるものの、自分の過ちを凶悪犯罪と同列に扱う様なメルの言い方に思わず叫びたい気持ちになるが、努めてそれを抑える。
「…メル先輩は、これからどうしたいんです？」
「…ごめん、わかんないや。またかぷ民の皆の前に顔を出したいなとは思うけど…もうできないし、それに…」
一拍置いて言葉を紡ぐメル。
その手が微かに震えている事にシンは気付いた。

「皆も…メルになんか、会いたくないよね…」
「っ、そんな事無い！皆、メル先輩がいなくなるのを悲しんでた！」
「ありがとう、でも…これはメルが背負わなきゃいけない事だから。もうアイドルには戻れないし…戻らない…」
哀しげな表情だが、その瞳には強い意思が感じ取れた。
彼女は、決めたのだ。
己の過ちを、決して消えぬ十字架として背負い続ける事を。
だが…
「…メル先輩、言いましたよね？俺も一緒に背負うって」
「でも…」
「でももクソもあるか！確かに、犯した過ちはそいつ自身が背負うしか無い。だけど…その重さに押し潰されたら、それ以上背負い続ける事だってできやしないんだ!!」
嘗ての自分と同じだ。
自分の過ちを過剰に重く受け止め、潰されるまで背負い続けようとしている。
だが、それは何の償いにもならない。
「でも…あんな事しちゃった以上、もうどのみちアイドルなんかやれないよ…」
「なら新しい場所を見付ければ良い！今までと違った形になるけど、それでもメル先輩を応援してくれた皆にもまた会えるかもしれない！だから…諦めちゃダメだ!!」
「じゃあ…どうすれば良いの…？」
そう聞かれて、シンも思わず言い淀む。
本当はメル自身が探すべきなのだろうが、今の彼女には重荷が過ぎるだろう。
「…待ってて下さい、探してみます！」
そう言って部屋を飛び出すシン。
「シン君…」
その背中を、メルはただ見送る事しかできなかった。

「…くそっ！何か良いのは無いのかよ…!?」
パソコンをヤケクソの様に操作するシン。
メルが再び輝ける場所、それを作る事のできる何か。
…だが、出て来るのはお笑い等の芸能やスポーツばかり。
何れも幼い頃からの経験や、独自のテクニックが必要になるものが殆どだ。
特に芸能関連は今のメルには酷だろう。
「…あれもダメだ…ならこれは…いや、メル先輩が今から始めるには難しい。何か…何か無いのか…!?」
眼を血走らせながら懸命にキーボードを叩き、モニターを凝視して選択肢を絞り込んで行く。
「…？」
そして…見付けた。
運命を変える選択肢を。
「【Ｇ・Ｔ・Ｗ・Ａ（グランツーリスモ・ワールドオーディション）】…？」
キーボードから手を離してマウスをクリックし、概要を確認する。
要約すると、
・ＦＩＡとＳｏｎｙによる合同のレーサー育成プロジェクト
・【グランツーリスモ】のオンラインレースによる入学試験を開催し、合格したプレイヤーはＦＩＡが運営する各国のＧＴアカデミーへの入学を許可される
・ＧＴアカデミーで訓練を受け、優秀な成績を修めた上位十名は、課程修了と同時にチームやメーカーと契約する権利を手にできる（尚、契約はチーム及びメーカー側の指名によるものとする）
・参加者は応募者の中から抽選で選ばれる
…というものだ。
「応募の中から抽選か…この時点でも狭い門だけど、素人でもチャンスがあるのか…まぁ、選択肢の１つとして採用してみるか」
そう言ってページをコピーするシン。
その後も、シンは徹夜で作業を続けた。

「はぁ…結局これ以外は良案無しかよ、くそっ…！」
手にＧ．Ｔ．Ｗ．Ａの資料を持ったシンが溜息を吐く。
既に外からは眩しい太陽の光が差し込み、部屋の中を照らしている。
「まぁ、何も無いよりマシか…」
「シン様～、朝ご飯できたわよ～」
「あっ、今行きます！」
扉の向こうから聞こえるちょこの声に返事をすると、部屋から出て一階へ降りる。
既にシン以外の面々は出揃っており、テーブルの上にはトースト、サラダ、ハムエッグ、コンソメスープ、フルーツヨーグルトと言った朝食の王道とも言える献立が並んでいる。
「頂きます」
徹夜で食欲が無いシンは、メル同様に無理矢理胃袋の中へと料理を押し込んで行く。
料理上手なちょこが手掛けた絶品料理なのにも関わらず、味も香りも殆どわからない。
喉に詰まらせかけては、それをスープやコーヒーを飲んで洗い流すという愚行を何度も何度も繰り返し、漸く平らげた所で口を開いた。
「メル先輩、昨日の話の続きなんですけど…こんなのはどうですか？」
そう言って、シンはメルに印刷したＧ．Ｔ．Ｗ．Ａの資料を手渡す。
そらとちょこが横から覗き込み、驚愕の声を上げる。
「…これ、レーサーの育成プロジェクトだよね⁉」
「まさか…メル様をレーサーにするって事⁉」
「はい、メル先輩がまたファンの皆に会える可能性があるもの、その中で素人からでもチャンスがあるもの…って色々考えて、これなら良いかなって。どうですか？」
暫く目を資料に向けた後、再び顔を上げる。

「…本当に、良いのかな…？」
「はい、後はメル先輩の気持ち次第です」
その答えに、メルは再び俯く。
そして、金色の瞳から涙を溢し、嗚咽を漏らしながら、言葉を吐き出した。
「…あり…が、とう…！」
「泣かないで下さいよ、応募した所で参加できなきゃ意味無いんですから…取り敢えず応募しましょう、話はその後ですよ」
「うん…うん…！」
漸く見えた一筋の光明。
とても小さなものだが、メルの心を覆い尽くした闇を晴らすには十分だった。

そして1週間後。
郵便受けの中に、抽選結果を示す封筒が入っていた。
「…開けますよ」
神妙な面持ちのシンに、頷く4人。
封筒の開け口を鋏で切り開き、中身を確認する。
結果は…
『夜空メル様
この度はG・T・W・Aへのご応募、真にありがとうございます。
厳正なる抽選の結果、貴女は見事当選しました。
2週間後に、GTアカデミーへの入学を決定する【グランツーリスモ】でのオンラインレースを開催致します。
貴女のご健闘を心の底からお祈りしています。
株式会社Ｓｏｎｙ ｉｎｔｅｒａｃｔｉｖｅ ｅｎｔｅｒｔａｉｎｍｅｎｔ』
「…」
静寂が辺りを包み込む。
そして…

「「「やったぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーっっ!!!」」」
シン、そら、ちょこ、ノエルが歓喜の咆哮を上げる。
ただでさえ狭い門、その1つ目をまずはクリアした。
「あぁ…っ！」
メルも思わず息を呑み、喜びの色を浮かべる。
「それじゃあ、俺が配信用に用意したハンコン使って練習しますか？」
「ありがとう…メル、絶対に…勝つから…！」

そして2週間が過ぎ、関東ブロック入学試験当日。
都内にあるレーシングシミュレーターショップを訪れるシンとメルの姿があった。
「…準備は良いですか？」
「すぅ…はぁ～…うん、大丈夫」
店内へ入り、店員に抽選結果の手紙を渡す。
「G．T．W．A入学試験に参加される夜空メルさんですね。では、左奥のシミュレーションをお使い下さい」
店員に指定されたシミュレーションに向かうメル。
「…あれ、メルちゃんだよな？」
「こんな所で何やってんだ…？」
「ってか、さっきの封筒ってまさか…」
客の視線に思わず息が止まりそうになるが、シンがメルの肩に手を載せて諭す。
「…メル先輩、気持ちはわかりますけど、今やるべき事に集中して下さい」
「…うん」
レース用グローブを嵌めてシートに座り、位置を調整するメル。
店員が使用マシンである【ＮＩＳＳＡＮ　ＧＴ－Ｒ　ＮＩＳＭＯ　ＧＴ３】を選択し、リアウィングやタイヤ、エンジン等のセッティングを進めて行く。

「…では、頑張って下さいね！」
セッティングを終え、離れた所で見守る店員と客達。
「全部で１９台…その中のこいつが試験官か…」
同じ白いＧＴ―Ｒの群れの中、１台だけ先頭を走る黒を基調としたカラーリングのＧＴ―Ｒ。
そして画面が切り替わり、モニターにサーキットを走るマシンからの視線が映り、レース開始までのカウントダウンが始まる。
『３』
『２』
『１』
『ＳＴＡＲＴ』
「ッ!!」
一気にアクセルを踏み込むメル。
…今、新たな運命の歯車が回り出す。

# 第２３話「幾らリアルなシミュレーションでもゲームは結局ゲーム」

「今の所１７位か…でもまだ１０周、取り返せますよ。落ち着いて」
「…っ」
遂に開始された予選レース。
ＧＴアカデミーに入るには、試験官より先にゴールが絶対条件だ。
本来であれば無用なバトルは避けるべきなのだが、前にいるターゲットより早くゴールしなければならないというシステム上、どうしても先の順位に進む必要が出てしまう。
周回数を重ねながら焦らず、冷静に、着実に順位を上げて行く。
１５位、１４位、１３位…
「っ！」
「くそっ、２台で塞がれた…！」
１１位と１２位の順位争いによってラインが完全に塞がれてしまう。
ならば…
「外側から抜く！無理矢理でも…！」
リスクを承知でラインから外れる選択を下す。
若干ダートに乗り上げながら、２台を纏めてオーバーテイク。
「よし！良いぞ！頑張れ!!」
５周目にして１１位。
黒いＧＴ―Ｒの順位を見ると、５番手にまで陥落して来ている。
じわじわと距離が詰まって来ているのを把握しながら、メルも順調にマシンを飛ばす。
「ッ！」
突如、前の車がスピンアウトする。
反射的にハンドルを回して巻き込まれるのを回避。
マリオカートと違って圧倒的リアルを追求したグランツーリスモは、本物のレース同様に僅かな反応の遅れや判断ミスが致命傷に繋が

る。
故に、メルは全神経を研ぎ澄ませ、バーチャルレースの世界へと意識をのめり込ませる。
更に１０位、９位、８位、７位と順位を上げていくと同時に、周回数も残り４周、３周、２周と減って行く。
そして、ファイナルラップに突入する直前で…
「っ！いた！アイツだ!!」
６番手を走っている内に、遂に追いついた。
…黒いＧＴ―Ｒ！
「メル先輩、落ち着いて！アイツさえ抜けば終わりだ!!」
「わかってる！ここまで来たんだから…絶対に勝つ!!」
ぎり、と音が聞こえる程ハンドルを握る手に力を入れる。
無理矢理抜くのは禁物だ。
今は置いて行かれない様に慎重について行って、最終コーナーまでに隙を狙う！
前とは既に１秒差も無い。
慎重に、丁寧に、確実に抜ける隙を伺い…
「インが空いた!!」
「ッ!!」
コーナーで黒いＧＴ―Ｒがインを空けた。
極限の集中力を発揮するメルはそのチャンスを逃さない。
若干無理矢理車体をねじ込み…遂に合格ラインを突破した。
「よし！」
そして、マシンは最終コーナーを通過立ち上がり…
目の前のゴールラインを、遂に踏み越えた。
「よっしゃあああああああああああ!!」
「はぁ…やった！」
結果は５位。
ショップ内に盛大な拍手喝采が反響する。
「おめでとうございます!!それではこちらをどうぞ！」
店員から渡されたのは、封筒の中に入った合格証明書。

「メル先輩…！やった！やりましたね！」
「うん…！メル、勝ったよ！」
これで、彼女を新しい道へ進める事ができる。
その事実に歓喜しつつ、シンはメルの身体を抱きしめた。

「一体何でこんな事を!?メルに何をさせようとしてるかわかってるんですか、貴方は!?」
出立の3日前、家に1人の女性が訪れ、批判の声を上げていた。
やって来たのは【夜空あやみ】。
イラストレーターとしても活動しているメルの母親だ。
彼女もまた吸血鬼であり、メルと殆ど変わらぬ歳の様な若い外見をしている。
「じゃあほっとけば良かったってんですか!?あの抜け殻みたいになったままのメル先輩を!!」
「そうは言ってません！でも…レーシングカーに乗るんでしょう!?どれだけ危険か!!」
「ママ、心配してくれるのはありがたいけど…もう決めた事なの」
シンとあやみとの言い合いの中にメルが割って入る。
既に荷物を纏め、出発する準備は完了している。
「…誰が主催者かもわからない合宿なんだよ!?それに、普通の車を運転した事も殆ど無いのに！」
「大丈夫だよ！行くって決めた時から、ずっとレースなら経験してるから！」
「っ、それはゲームの中ででしょう!?本当のレースとは違う!!」
話は平行線なまま、時間だけが過ぎて行く。
「…大体、何でそこまでレースに拘るの？またアイドルに戻っても良いじゃない！確かに、もうホロライブには戻れないかもしれないけど…それでも、別の事務所でやり直せる様に、ホロライブの皆さんが今だって頑張って交渉してくれてるのに!!」

「っ、それだけはダメ！絶対に!!」
肩を震わせながら、メルは自室のテーブルの上に置いてある写真を手に取る。
嘗てホロライブの皆で撮った集合写真。
「…ホロライブの皆の事も、かぷ民の皆の事も、全部裏切ったメルはもうアイドルに戻っちゃいけない…何があっても、同じ舞台には立っちゃダメなの」
「メル…」
「…それでも、皆メルがいなくなる事を悲しんでくれた。辛い筈なのに、メルの事を忘れずに前を向く事を選んでくれた。だから…」
写真をテーブルの上に置き、真剣な表情で向き直る。
「…アイドルとは違った形で、また皆に顔を見せたいの。そして、伝えたい…皆を裏切って、傷付けちゃってごめんなさいって」
己の過ちを十字架として背負いながらも、前へ進む覚悟を決めた眼差しに、あやみも何も言い返せなくなる。
「その為にシン君が用意してくれたのが、レースだった…だから行きたい。シン君がくれた可能性を、シン君の優しさを、無駄にしたくない！」
「…」
どうすれば良いのだろう。
母親として、娘に危険な事などさせたくない。
だが…前に進もうとしている娘の邪魔をするのが、正しいとも思えない。
「あやみママ、メルちゃんの事…信じてあげて下さい」
葛藤するあやみに、そらが優しく声を掛ける。
「ママさんの気持ちはよくわかりますし、俺だってこの選択が正しいのかなんてわかんないです。でも、俺は…メル先輩の彼氏のくせに…メル先輩が苦しんでる時に、何もしてやれなかった…！」
過ちを犯してしまった本人が1番悪いのは、どう足掻いても覆す事のできない事実だろう。
だが、苦しんでいる彼女に自分が手を差し伸べていれば、この悪夢

の結末は避けられたかもしれない。
――――――なら…2番目に悪いのは、俺だ。
彼氏のくせに、恋人である筈のメル先輩を救えなかった。
彼女のファンを泣かせてしまった罪は、俺にもある…！
「…だから、メル先輩に新しい道を示すぐらいはしたいんです。もう…とっくに手遅れだけど…それでも、メル先輩が立ち直る為に、できる事は全部やってやる!!」
手を差し伸べるのが遅すぎた後悔と、それでも彼女を救いたいという情熱の込もった力強い眼差しに、何も言えなくなってしまう。
十字架を背負いながらも新しい道に進もうとする娘と、曲りなりにも娘を救おうとしてくれている彼等に対し、自分が代わりとなる救済案を持ち合わせていない事を認識してしまったからだ。
「あやみママ…メル様の事が心配なのはわかるけど、メル様自身の気持ちもわかってあげて」
「何かあったら団長もメル先輩の事支えっから、今だけはやりたい様にやらせてあげて貰えんか？」
ちょことノエルからの説得を受け、あやみも遂に覚悟を決める。
「…」
何も言わず、そっとメルを抱き締めるあやみ。
「ママ…？」
「怪我、しない様にね」
「…っ！うん！」
メルもまた、母の身体を抱き返す。
この温もりを与えてくれる皆の想いに応えると誓う為に。

そして、出発の日。
「メル様、忘れ物は無い？」
「うん」
家の外には、既にアカデミーのスタッフが運転手を務める車が待機

している。
「メルちゃん、頑張ってね」
「気を付けてね」
「着いたら連絡下さいね」
「何かあったら、相談して下さいね」
そら、ちょこ、ノエル、シンが激励の言葉を贈り、順番に抱擁を交わす。
「…辛くなったら、何時でも帰って来て良いからね」
「大丈夫。今度は最後までやり遂げてみせるから」
最後に、母であるあやみ。
「…じゃあ皆…行ってきます！」
新たな決意を秘めた顔で、メルは車に乗り込む。
期待や不安、様々な気持ちが入り混じる中、５人は発進する車の後ろ姿が見えなくなるまで見守っていた。

# 第２４話「入学式のおめでたい空気は翌日には消える」

「そっか…メルメル、レーサー目指すんだね」
『すいません、お別れの挨拶もさせてあげられなくて…』
　メルを見送った後。
　シンはまつりに電話で彼女がＧＴアカデミーへ向かった事の報告と、見送りに呼ばなかった事の謝罪をした。
「気にしないで。多分まつり達が行っても、気まずい雰囲気になるだけだと思うし。その代わりって言ったらなんだけど、ＧＴアカデミー日本支部の住所と郵便番号、教えてくれる？」
『良いですけど…何で？』
「手紙ぐらいは贈っても良いかなと思ってさ」
『…はい、わかりました。出勤してから教えますね』
　通話を終了するまつり。
「…ありがとう、シン君。メルメルに新しい道を教えてくれて」
　誰にも聞かれる事無くそう呟くと、まつりはある場所へと向かう。
「失礼しまーす！」
　扉を開き、部屋の中へと入る。
　そこに座しているのは…
「お、いたいた！ＹＡＧＯＯ！」
　ホロライブのトップ、ＹＡＧＯＯこと谷郷元昭だ。
「どうかしましたか？まつりさん」
「ねぇＹＡＧＯＯ、ちょっと話あるんだけどさ…」

「ここがＧＴアカデミー…」
　車に揺られる事１時間半。
　メルがやって来たのはＧＴアカデミー日本支部のある静岡県駿東郡小山町。

世界有数の高速サーキット【富士スピードウェイ】だ。
ＧＴアカデミーの日本支部は、この広大な敷地の中にあるという。
「入校式は明後日から始まります。それまではどうぞゆっくり過ごして下さいね」
車を降り、荷物を下ろしてあてがわれた居室に向かう中、聞こえて来るひそひそ話。
「…あれ、夜空メルか？」
「まさかＧＴアカデミーに来るなんて…」
口の中を突き刺す様な苦味が満たし、思わず顔を顰める。
覚悟の上だったとは言え、【元ホロライブの夜空メル】という呪いはやはり憑いて回るのかと思わずにはいられなかった。

「え～っと、５４６号室、５４６号室…ここか」
部屋を探して歩き回る事数分、漸く自室となる居室を発見し、ノックする。
「すみません、今日から同居人になる者です」
『どうぞ～』
気の抜けた返事が返って来て、メルは扉を開ける。
「失礼します」
扉の向こうには、まるでホテルの一室の様に広くて快適性の高い空間が広がっていた。
…その床で、何やら紙のシートを広げてカードで遊んでいる青い髪の少女が１人。
あっちの盤面を操作したと思えば、ぐるっと移動してこっちの盤面を操作。
それを何度も何度も繰り返している。
「…あの～」
「？」
「…何やってるんですか？」
「…バトスピ」

「1人で？」
「うん」
　その後も黙々と1人バトスピを続ける少女。
　ひとまず着いた事を報告しようと、シンにスマホで電話を掛ける。
『もしもし？』
「あ、シン君？メルだよ。今アカデミーに着いた」
『御苦労様です、どうですか？上手くやって行けそうですか？』
「うーん…やっぱり【元ホロライブ】っていう目で見られるのはちょっと億劫かな…少なくとも友達は作れそうに無いかも」
『そうですか…』
「まぁ、これはメルがやらかしたのが悪いんだし。最後まで頑張るよ」
『…無理はしないで下さいね。何かあったら、相談ぐらいは乗りますから』
「ありがとう」
『ちょこ先生とも話しますか？そら先輩とノエル団長は出掛けてるんで無理ですけど』
「うん、代わって」

『もしもし？メル様？』
「ちょこ先生？今シン君から聞いたと思うけど、アカデミーに着いたよ」
『お疲れ様。入校式はいつ？』
「明後日。本格的な課程は明々後日から始まるみたい」
『そう…無理はしないで、怪我とか病気の無い様にね』
「うん」
『偶には電話頂戴ね』
「わかった、できるだけこまめに生存報告は入れる。じゃあ、またね」
『ええ、またねメル様』

…そして、通話終了後。
「…ねぇ…それ、1人でやって楽しいの？」
ずっと1人バトスピに勤しんでいる少女に声を掛けるメル。
「仕方無い。相手がいないから」
「もう…ほら、ルール教えて？メルが相手になってあげるから」
「良いの？」
少女の目がきらりと輝き、メルは苦笑する。
「こんなの1人でやったって面白くないでしょ？」
「…じゃあ、このデッキ使って」
そう言って少女は盤面の上を1度片付けると、使用していたデッキの片方を渡して来る。
渡されたのは攻撃主体の赤属性デッキだ。
「初心者ならまずこれから使うのがオススメ」
「ご丁寧にありがとう」
デッキを受け取り、シャッフルする。
デッキとコアをそれぞれ盤面に置いて、バトルを始めると、突然少女が口を開いた。
「そう言えば…貴女の名前は？」
「え？メルの事知らないの？」
「メル…それが貴女の名前？」
どうやら、眼の前の少女はアイドルやホロライブには余り興味が無い様だ。
それが逆にメルの心苦しさを和らげ、気分を楽にさせる。
「うん、夜空メルだよ。宜しくね」
「夜空メル、夜空メル…うん、覚えた。私、小町永遠」
少女の名を聞いて、思わず苦笑するメル。
嘗ての後輩と同じ名前だ。
「そう、宜しくね、小町ちゃん」
「…下の名前で読んでくれないの？」
「ごめんね、同じ名前の知り合いがいるから、わかりづらくなっちゃうんだ」

「…うん、そういう事なら仕方無い。宜しく、メル」
挨拶を交わし、２人はバトスピを開始する。
…そして当然ながら素人のメルはフルボッコにされ、罰ゲームと称して胸をたっぷりと揉みしだかれたのだった。

『新入生の皆さん、ようこそ！ＧＴアカデミーへ！』
そして、入学式が始まった。
今回の入校生は総勢で８０名。
半年の在学期間を終えれば、レーサーとしてのライセンスを獲得できる。
しかし、レーサーとしての道を確かなものにする為には、成績上位十名に入り、チームやメーカーからのスカウトを得るのが最も確実だ。
困難な道である事に変わりは無い。
それでも…
（…必ずプロになってやる！）
新しい道を示し、送り出してくれた家族の為に、絶対に逃げる事はしない。
どんなに高い壁であっても。
理事長の挨拶を聞く傍ら、メルは固く拳を握り締めた。

# 第２５話「レーサーでもジェットコースターは怖い」

ＧＴアカデミーに入校したメル。
シミュレーター、座学でのレース戦術、身体強化訓練などの修練の数々を経て、徐々に技術を身に付けて行く。
今回はその中の１つ…実車を用いた訓練について見て行くとしよう。

「本日の訓練指導官を務める事になった、バレット・ハドソンだ。今日はお前達に、時速３００キロの世界を経験して貰う」
富士スピードウェイのピットロード上。
レーシングスーツに着替えた生徒が、教官からのレクチャーを受けていた。
彼の傍らには、ペイントが施されていない黒いＧＴ３レーシングカー…【メルセデス・ベンツ　ＡＭＧ　ＧＴ３　Ｅｖｏ】が停まっている。
実車訓練では、本物の元プロレーサーによる指導の下で時速３００キロの世界を体験し、実際に走る技術を身に付けて行くのだ。
「このマシンを運転するドライバーにのしかかるＧは、ロケットの打ち上げの時に宇宙飛行士が感じるＧの２倍と言われている。くれぐれも覚悟して訓練に挑む様に」
「「「「はい！」」」」
「よし。じゃあ、誰から行く？」
教官の問いに、真っ先に名乗り出たのは…
「私からお願いします」
「…夜空メル、だな。心の準備は良いか？」
「はい、何時でも行けます」
（おいおい…何て眼えしてやがる…）
彼女の金色の瞳に宿る気迫と執念に、教官は末恐ろしいものを感じ取る。

他の者達は「レーシングカーに乗ってみたい」という、言ってしまえば新幹線や飛行機に初めて乗る子供の様な興味を抱いている。
だが、彼女は違う。
本気でプロの世界に挑もうという強い意思が見て取れる。
…その中に、どこか強迫観念の様なものもある。
「わかった。じゃあサブシートに座って、ベルトを締めてくれ」
教官に指示されるまま、サブシートに座ってベルトで身体を固定するメル。
本来であれば運転席以外に座席は用意されていないのだが、イベント等での同乗体験の為、ベース車両となる車の助手席が置かれていたペースにサブシートを増設する事も可能なのだ。
「行くぞ？」
「…お願いします」
ドアを閉めると同時に、マシンのエンジンが唸りを上げる。
そして、ゆっくりと動き出し、ピットからコースへと出て行った。
「まずは最終コーナーまでゆっくり回るぞ。コースのレイアウトを覚えてくれ」
「わかりました」
ピットを出て、各コーナーリングをゆっくりと回り、コースのレイアウトを確実に頭に刻み込んで行く。
そして…
「行くぞ…3、2、1、スタート！」
「っ!!」
最終コーナーを立ち上がり、一気にマシンを加速させる。
メルの身体がシートに抑えつけられ、周囲の風景が矢の様に通り過ぎて行く。
1．5ｋｍもの長いストレートをあっという間に通過し、急速にブレーキング。
ＴＧＲコーナーを曲がると、凄まじい遠心力がメルの肉体を襲う。
続けてコカ・コーラコーナー、１００Ｒ、ＡＤＶＡＮ（ヘアピンカーブ）コーナー、３００Ｒと、急加速と急減速を繰り返しながらコースを巡る。

「うっ！ぐぅう…っっ!!」
圧倒的なＧに顔が歪み、全身から絶叫を発しそうになる衝動が駆け巡るが、これに耐えられなければ、プロなど夢のまた夢だと自分に必死に言い聞かせて歯を食い縛り、耐え続ける。
ダンロップコーナー、１３コーナー、ＧＲ　ｓｕｐｒａコーナー、パナソニックコーナーを回り、メインストレートのコントロールラインを通過し、訓練は終了した。

ゆっくりとコースを巡り、ピットへ戻るマシン。
「…凄いな、普通なら初めて乗った時は皆絶叫するもんだが…よく耐えたな」
「はぁ…はぁ…これぐらい、耐えなきゃ…プロになんか、なれませんから…っ、ゲホッ、ゲホッ…！ぜぇ…ぜぇ…っ、ありがとうございました」
全身から汗が吹き出し、胃の中がぐるぐると掻き混ぜられているかの様な不快感に襲われながらも２本の足でしっかりと立ちながらマシンを降りるメル。
（…元アイドルってだけあって、基礎体力や反射神経はかなりのもんだな。何より…凄い執念だ）
メルを冷静に分析し、内心で冷や汗を書く教官。
息が上がってこそいるが、初めてのレーシングカーであそこまで気をしっかり持てるのは最早天才…否、化け物の類だ。
「…よし、次は誰が乗る？」
「じゃあ私が」
次に名乗り出たのは永遠。
「小町永遠か…よし、じゃあ座ってくれ」
サブシートに座り、ベルトを締める永遠。
そして、マシンは唸り声を上げながらピットから出て行った。

「…ありがとうございました」
それから数分が経過し、マシンがピットへと帰還。
恐ろしい事に、降りて来た永遠は汗こそかいているが比較的平然とした様子だ。
メルはその姿に目を見開くと同時に、強い対抗心が燃え上がる。
――――――負けられない。
その後も訓練は続き…まともに立っていられたのはメルと永遠の2人だけだった。

「はぁ…」
今日の訓練が全て終了し、食堂へと足を運ぶメル。
頼んだカレーにスプーンを入れ、口へと運び続ける。
ここの食堂の料理は中々絶品だと評判らしいが…あの日以来、食べ物をこれっぽっちも美味しいと感じた事の無いメルにはよくわからなかった。
甘味、旨味、塩味などが絡み合った複層的な味わいが今の彼女には酷く気持ち悪く感じ、そのくせ痛みである辛さだけは異様に強く感じてしまい、メルはカレーを頼んだ事を後悔しつつ、何とか半分以上を胃袋へ入れて席を立つ。
「…ごめんなさい、残しちゃって」
「大丈夫？顔色悪いけど…」
「大丈夫です、すいません…ご馳走様でした」
返却口で調理師に謝罪して食堂を後にしようとするメル。
すると、背後から1人の男子生徒に声を掛けられる。
「夜空さん、この後皆で親睦会でもやらないか？って話になってるんだけど、どうする？」
彼は離れた席を指差し、複数人の男女が集まって話をしている様子を見せて来る。
「…ごめん、用事あるから遠慮しとくね」

「あ…そっか、わかったよ…」
「…お疲れ様」
そう言って今度こそメルは食堂を後にする。
「…」
その後ろ姿を、永遠がじっと見詰めていた。

「教官を引き受けて下さってありがとうございます」
「気にすんな、あのガキ共には教えなきゃいけないからな…レースの世界の現実ってヤツを」
日が沈み、既に満天の星空が広がるピットで理事長と教官(バレット)が話している。
「ただシミュレーターが上手いからってだけでやって行ける程、レースは甘くない。幾ら一介のゲーマーからプロのレーサーになった前例があるっつっても、それだって血反吐吐く様な努力を積み重ねたからだ。はっきり言って、このアカデミーの発想の元になる計画の発案者は、頭がイカれてる。俺はそう確信してるぜ」
「では、何故この仕事を引き受けてくれたのですか?」
「…とっくに引退した身だが…俺は、やっぱりレースが好きらしい。だからこそ…嘗ての俺の様な思いをするヤツを増やしたくないし、俺の様な思いをしたヤツがいた時に道を示してやれる存在になりたい。そう思ったのさ」
車の下に潜り込んで整備作業に勤しんでいる為、顔は見えないが、その口調や声音から悲しげな表情を浮かべているのだろうという事は見て取れる。
「では、そんな貴方から見て気になる子はいましたか?」
「…そうだな…やっぱり、小町永遠だな。あいつの親の走りは何度も目にしたが…あの親の英才教育を受けてるだけあって、才能は中々のもんだ。それと…」
延々と作業を続けながら答えるバレット。
永遠に対する評価を述べた所で一旦区切り、一呼吸を挟んで再び言

葉を紡ぐ。
「…夜空メル、だな」
「ほう、これはまた意外な…何故です？」
「…シミュレーターの腕はこの中じゃ並より上程度だったが、身体能力や反射神経…肉体面での必要な要素は他のヤツよりもずば抜けてやがる。何より…執念が凄ぇ。苦手にしてる事があっても、努力に努力を重ねて短期間で克服しちまいやがる。間違い無く、本人すら気付いてない才能だな。だが…何か、強迫観念に突き動かされてる節があるから、そこにだけ要注意ってとこか」
「そうですか…」
整備を続けるバレットから視線を外し、遠い眼差しで空を仰ぐ理事長。
こうして、アカデミーの夜は更けて行った。

# 第２６話「休むのも仕事の内、これは法律でも決まっている」

「はぁ…はぁ…あと、１０セット…！」

誰もいないトレーニングルーム。

様々な機材を使ってトレーニングに明け暮れるメルの姿があった。

全身から滝の様な汗を流し、肩で息をしながらも、その瞳は恐ろしい程ギラついており、まるで取り憑かれたかの様に次のトレーニングマシンに歩みを進める。

「えい」

「ひゃあっ!?」

その首に冷たい物が押し当てられる。

「こ、小町ちゃん!?」

振り向くと、ペットボトルのスポーツドリンクとタオルを持った永遠の姿が。

「精が出るのは良いけど、無理は良くない」

そう言ってメルの身体をタオルで拭く永遠。

洗剤の香りとふわふわとした感触が顔に伝わり、少しずつ頭が冷えて行くのがわかる。

汗を拭き取ると、今度は右手に握られているスポーツドリンクを渡して来る。

「飲んで」

「…ありがとう」

ペットボトルを受け取り、キャップを開けて中身を飲む。

相変わらず味はいまいちわからないが、喉を通った冷たい液体が全身に浸透して行く感覚が心地良く、あっさりと飲み干してしまう。

気が付くと、血の代わりにマグマでも流れているかの様に熱かった身体の感覚も元通りになっていた。

「何で、そんなに躍起になってるの？」

「えっ…」

「何がそんなにメルを追い詰めてるの？何だか…見てて、怖い」
「…」
思わず押し黙ってしまうメル。
何としてもプロにならなければならない…その理由を話す事への強い抵抗と恐れが、メルの声を喉の奥底へと押し留めてしまう。
【元ホロライブの夜空メル】という色眼鏡を抜きにして自分を見てくれた、初めての友達。
もし自分の経緯を話せば、彼女までいなくなってしまうかもしれない。
無自覚とは言え、自分を孤独から守ってくれている彼女すら離れて行ってしまうかもしれない。
それが…怖かった。
「…何に苦しんでるのかは知らない。でも、話すだけでも楽になると思う。だから話して」
「っ…メル、は…」
話そうと思っても、上手く声が出てくれない。
「…大丈夫。どんな秘密があっても、ちゃんと受け止めてあげるから。今は言える範囲で良いから、全部話して」
「…っ」
メルの心を覆っていた溶けぬ氷に、罅が入り…遂に、崩れた。

「…そうだったんだ」
「…幻滅した？」
「ううん、私がメルの事を知らないのを不思議がってた理由がわかって、納得しただけ」
遂に永遠に全てを打ち明けたメル。
軽蔑されるかと覚悟していたメルは、至って普通に接して来る永遠に若干の困惑を覚える。
「…案外、似た者同士だね。私とメル」
「え？」

「私もお父さんとお母さんがレーサーだから、色んな眼で見られてた。昔から」
　そして、今度は永遠が自身の過去を語り始める。
「このアカデミーに来た時も、親の七光とか、コネ入学とか…羨む様な眼、妬む様な眼で見られて来た。だから…メルの気持ち、多少はわかるつもり」
「…っ！何もわかってないよ！」
　反射的に叫ぶメル。
「小町ちゃんは、それで誰か傷付けたりした訳じゃないでしょ!!メルは…メルは…！バカみたいな間違いを犯して、かぷ民の皆を！ホロライブの仲間を！全部全部裏切った!!傷付けた!!最低最悪なクズ野郎なんだよ!!!」
　焼け付く様な痛みが喉を走り、血の味が口に広がるが、構う事も無く叫ぶ。
　もうファンの皆に会えない、仲間と同じステージに立てない悲しみ。
　取り返しの付かない愚行を犯した自分への怒り、憎しみ。
　自分の身をズタズタに引き裂いても鎮まらない黒い激情に駆られながら、言葉を血の様に吐き出す。
「…メル、それは違う。自分の過ちで傷付いた皆を思って、そこまで苦しむ事のできるメルは、凄く偉いと思う」
「やめて!!気休めなんかいらない!!!」
「落ち着いて聞いて！…間違えずに生きられる人なんてどこにもいない。人の価値を決めるのは間違えた事じゃくて、間違えた後にどうするか…お祖母ちゃんの受け売りだけど」
「…」
「ちゃんと自分のやった事を受け止めて前に進んでるメルは、凄く立派。だから、あんまり自分を責めちゃダメ。自分を責めすぎても、それは新しい過ちの元になるだけ」
　まるで母親の様に暖かく諭して来る永遠。
「辛かったよね…大丈夫。メルは1人じゃないよ」

恋人や家族から離れ、一時期とは言え1人で生きて行く為に作った心を守る鎧。
外敵を近付けぬ為の、針だらけの装甲。
それが、友達として接してくれた1人の少女によって、ボロボロと剥がされて行く。
「あ…あぁ…!うぁぁぁぁぁーーーーっ!!」
漸く自分の本心を晒け出したメル。
永遠に縋り付き、ひたすら泣き叫んだ。

「落ち着いた?」
「ぐすっ…うん、ごめん…」
永遠が渡したティッシュを受け取り、涙と鼻を拭うメル。
「謝らないで。メルの気が楽になったなら、それで良い」
「っ、ありがと…」
落ち着きを取り戻したメルに、永遠が1つ提案をする。
「…メル、今度の土曜、一緒にお出かけしよう」
「えっ…?」
呆気に取られるメルに構わず、言葉を続ける。
プロレーサーとしての大先輩である両親から嘗て教わった大事な事。
「訓練は勿論大事。だけど…自分の身体の管理も凄く大事。食べられる時に食べる、寝られる時に寝る、休める時に休む…そうやって自分のコンディションを万全に保つのも、一流のレーサーになる為に必要不可欠な要素。パパとママに、口酸っぱく言われた」
「小町ちゃん…」
「カーシェアリングの使用申請なら、私が上げておく。だから、一緒に遊ぼう?メル、ほっといたら倒れるまでトレーニングしてそうだし」
「そ、そんな事しないよっ!…とは…言い切れない、けど…」
もごもごと声が小さくなって行くメルが可笑しくて、ふふっと笑っ

てしまう永遠。
　完全に内面を見透かされている事実に、メルは赤面する。
「…友達できた、って聞いた方が家族も安心するでしょ？」
「…聞いてたの？あの時の電話」
「至近距離だもん。普通に聞こえる」
「はぁ、それもそっか…」
　談話室か何処かに言って連絡すべきだったか、と内心頭を掻くが、既に後の祭り。
「…わかった。その代わり、朝７時からシミュレーターで朝練したいんだけど付き合ってくれる？」
「うん、シミュレーターなら相手がいた方が練習になるしね」
「…じゃあ土曜日、楽しみにしてるね」
「わかった」
　ホロライブの外でできた初めての友達との約束を交わしたメル。
　彼女の闇が完全に晴れるには、まだまだ程遠い。
　だが…非常に小さいながらも、彼女にとっては大きな価値のある前進だった。

「もしもし？」
『あ、メルちゃん？調子はどう？』
　永遠と一旦別れ、シャワーで汗を完全に流し切った後。
　メルはスマホでそらと連絡を取っていた。
「…悪くないです。訓練は大変ですけど、あれに耐えられなきゃプロにはなれない…って考えたら、何とか頑張れてます」
『…そっか。やっぱり大変なんだね』
「でも…最近友達もできたから、これからはもっと頑張れると思います」
『お友達!?良かった…！シン君伝いでメルちゃんが言ってた事聞いてたから、凄く心配してたんだ…！』

「はい、お陰でメルも気分が楽になりました」
『うんうん、凄く良い事だよ！』
「そうですね…シン君はいますか？」
『あ～、今用事でお出かけ中だね。私から伝えておくね、メルちゃんにお友達ができたって』
「お願いします」
『代わりって言ったら何だけど…今1期生の皆が遊びに来てるんだ。お話する？』
「…っ」
はい、と返事をしようとしたメルの声が詰まった。
…本音を言えば、話をしたい。
だが…今話してしまうと、また戻りたくなってしまう。
そして、そうなれば…GTアカデミー（今の自分の居場所）に、戻って来れなくなってしまいそうで。
「…すいません、遠慮しておきます」
メルは、嘗ての仲間達と言葉を交わす事を拒んだ。
『…そっか、わかった』
「代わりって言ったら何ですけど…その…」
『何？』
「…伝言、お願いできますか？【プロになったら、また会いに行くよ】って」
仲間達へのメッセージを、そらに託して。
『…わかった、伝えておくね』
「ありがとうございます」
『…じゃあ頑張ってね。おやすみ』
「はい、おやすみなさい」
そらとの通話を終了するメル。
「…ごめんね、皆」
目を瞑り、内心で同期達に詫びを入れる。
己の贖罪に専念する為にも、今だけは仲間達と距離を置こう。
…何時かの明日で、また友として会う為に。

# 第27話「親しき仲にも礼儀ありとは言うが、遠慮しすぎるのも友情を壊す原因となる」

「じゃあ、行こっか」
「うん」
アカデミー内の駐車場に停まっている車に乗り込むメルと永遠。
今日は約束の土曜日。
永遠の紹介で富士スピードウエイ（アカデミー日本支部）のある小山町を出て、御殿場まで足を運ぶ予定となっている。
メルがシートベルトを締めたのを確認すると、運転席に座る永遠がエンジンを始動させ、車をゆっくりと走らせる。
「確認お願いします」
「小町さんと夜空さんですね…はい、行ってらっしゃい」
ゲートで警備員に生徒証明書を確認して貰い、敷地の外へ出ると、メルは徐ろに鞄の中から何かを取り出す。
「…何やってるの？」
「変装。メルってバレたら色々めんどくさいから」
そう言って赤髪ロングヘアの鬘を被り、ルームミラーを使って青いカラーコンタクトを付ける。
「…もうアイドルじゃないのに必要なの？」
「契約解除されたアイドル、って悪い意味での有名人だからね。下手したら小町ちゃんにも迷惑掛けちゃうかもだし」
…本音を言えば、先日はその場の感情に流されて外出に同意してしまっただけだった。
後になって冷静な頭で考え直した結果、自分と一緒に外出するなど、よく考えなくても永遠が迷惑を被ってしまう事間違い無しであると気付いたのだ。
自分共々白い眼で見られてしまう事は避けられない…そう考えて後でやはりやめよう、と話したのだが、永遠は「私は別に平気」と判然と拒否（メル自身が嫌ならやめるけど、とも言っていたが）。

折角できた友達と遊びたい、だが迷惑を掛けたくない…その２つを叶える為、メルは変装するという判断を下した。
「別に気にしなくても良いのに…」
そう呟いて、永遠は車を走らせた。

「着いたよ、メル」
「わ～、おっきいね」
車を走らせる事数十分。
２人がやって来たのは、御殿場市内の大型商業施設。
「まずは何する？」
「う～ん…メル、映画観に行きたいかな」
「映画…そう言えば、あんまり観ないかも。行ってみよう」
駐車場に車を停め、外へ出る２人。
建物の中に入り、エレベーターで映画館のある階へと向かい、映画の上映スケジュールを眺めて相談する。
「メル、何かオススメはある？」
「そうだなぁ…う～ん…」
【ウィッシュ】…はディズニー作品である故に一見期待値は高く見えるが、観た観客の殆どから凄まじい批難が飛んでおり、イマイチとっつきにくい。
【ゴジラ―１．０／Ｃ】…は以前シンとのデートでカラー版を観た為か、金を払ってまでまた観ようという気が起こらない（内容自体は非常に良かったのだが）。
【翔んで埼玉～琵琶湖より愛を込めて～】…は前作を観ていない為、今から観ても何もわからないだろう。
あれでもない、これでもない…と思考を巡らせていると、永遠がある作品を指差した。
「…あれ、メルの彼氏が出てるヤツ？」
そう言って永遠が指差した方を見ると、そこに書かれていたタイトルは【機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＦＲＥＥＤＯＭ】。

「…小町ちゃん、ガンダムわかるの？」
「…何となくは。でも、それよりも…メルの彼氏が出てる作品、観てみたいなって」
正直、前作でのシンの扱いの悪さを知っているメルはどうしよう…と悩むが、以前ネットで「ＤＥＳＴＩＮＹに不満がある人こそ観るべき」という意見が多数散見されたのを思い出し、それを信じて覚悟を決める。
「うん、じゃあガンダムにしよっか」
１番近い上映時間のものを選択し、２人分のチケットを購入するメル。
「まだ時間あるけど…どうする？」
「他のお店、見て回ろう」

永遠と一緒に映画館を出てやって来たのは、ＣＤショップ。
このＣＤショップはかなり古い年代のものから最新のものまで幅広く取り扱っており、レア度の高いものが手に入り易いとマニアの間で評判だ。
「小町ちゃん、好きなアーティストとかいるの？」
「ううん。音楽が好きなだけ。怒りを発散したい時、泣きたい時、楽しい気持ちになりたい時…色んな時に、音楽は人の気持ちに寄り添ってくれる。勿論、レース前に気合いを入れたい時も」
永遠の答えに成る程、と納得するメル。
２人で店内を散策していると…それは、突然目に入った。
入ってしまった。
「っっ!!」
メルの呼吸が一瞬、止まる。
そこには…『夜空メルちゃん、ありがとう』というメッセージと共に派手な装飾が施されたエリアだ。
メルの曲を収録したＣＤや、メルのグッズ等が売られている。
「…」

思わず目を逸らすメルと対照的に、永遠はそのエリアをまじまじと見詰める。
「見て来ても良い？」
「…」
「…やっぱり、メルは嫌？」
永遠の問い掛けに、メルは黙って首を縦に振る。
…もう、あの頃には戻れない。
その現実を痛い程感じているメルに、あの場所へ立ち入るのは酷い苦痛だった。
「じゃあ、お店の外で待ってて。私、気になるから見てみたい」
「…わかった。じゃあ待ってるね」
そう言って、メルは店内を後にした。

それから約３０分後。
「お待たせ」
「…ちょっと時間掛けすぎじゃない？何してたの？」
「ごめん…メルの曲、試しに聴いてみたら凄く良くて。聴き入ってた」
思わず呆気に取られるメル。
永遠が、自分の曲を気に入ってくれた…？
「だから買っちゃった。メルのＣＤ」
手に持っていたビニール袋の中から、メルのＣＤを取り出す。
「アイドルだった頃のメルも見てみたかった…本気でそう思った」
永遠の言葉に、メルは嬉しいような申し訳ない様な複雑な気持ちになる。
褒めてくれた事を感謝すべきなのか、それとも自分の曲を気に入ってくれたのにもうステージに立てない事を謝るべきなのか…メルが葛藤していると、永遠が何かを差し出して来た。
「これって？」
「１１年も前の古いヤツだけど…売ってたからメルにあげる。良い曲聴かせてくれたお礼」

永遠が渡して来たのは、１枚のＣＤ。
表面には【ＣｉＲＣＵｉＴ　ＢＥＡＴＳ　―ＳＵＰＥＲ　ＧＴ　２０ｔｈ　ＡＮＮＩＶＥＲＳＡＲＹ―】と書かれている。
どうやらＶＯＣＡＬＯＩＤ【ＩＡ】のアルバムの様だ。
「パパとママのお気に入り。レース前に聴くと、気合いが入るんだって。だからメルにも」
「…ありがとう、小町ちゃん」
「どういたしまして」
「…そろそろ映画始まるから、行こっか」
「うん」
アイドルとしての自分を受け入れてくれる友達に感謝しつつ、メルは永遠と一緒に映画館へ歩みを進めた。

そして、映画を見終えた２人。
「…メルの彼氏、凄かったね」
「うん！ちょっと不安だったけど…観て良かった～」
どうやらメルの方はかなり満足した様だ。
前作での不遇っぷりを見事に払拭する活躍ぶりに、思わず涙した跡が目元にある。
「でも…あのアスランって、変なヤツだった」
「あ、あはは…ｗ」
戦闘中に恋人の裸を妄想して相手を混乱させるアスランの姿には、流石の永遠も笑わずにはいられなかった。
メルも危うく飲んでいたコーラを吹き出す所だった。
暫く映画について談笑した後、ふとメルが言った。
「…小町ちゃん、今日はありがとう。楽しかった」
「私も。友達と一緒に遊ぶのって、こんなに楽しいんだね」
「うん。メルもこの感覚、凄く久しぶりな気がする」
ホロライブを退所してから今日に至るまでの日々は、本当に酷いものだった。

欠片ほどの希望も見出す事ができず、何もする気が起こらず、ただただ絶望と罪の意識に苦しみ続ける日々。
ＧＴアカデミーへの入学後も、プロになる為にひたすら訓練に明け暮れ、娯楽を楽しむ事を考える余裕すら無かった。
そんな状況に、自分を追い詰めてしまっていた。
だが、今日永遠と共に遊んで、少しだが気持ちが楽になったのを感じる。
「ホロライブの皆とも…また笑い合えるかな…」
「…きっと大丈夫。もう同じステージに立てなくても、皆メルの友達でいてくれる」
「…ありがとう、小町ちゃん。そろそろ帰ろっか」
「うん」
新たな親友との絆と、嘗ての仲間達との思い出。
その２つを確かに感じながら、メルは永遠と共に帰路に付く支度を始めた。
…明日からまた、前に進んで行く為に。

「そうですか、小町さんを…」
同刻、理事長室。
スマホで誰かと連絡を取り合っている理事長の姿があった。
「…わかりました、本人にお伝えしておきましょう。手続きの書類は何時ごろ届きますでしょうか？…ええ、２週間後ですね。畏まりました。では…彼女の事、宜しくお願いします」
「理事長！」
通話を終える理事長の元に、バレットがやって来る。
マシンのテストを終えた直後に連絡を聞きつけて駆け付けた為、スーツとヘルメットを着用したままだ。
「永遠に来たって本当か？」
「ええ。流石首席候補です」

「動きが早いな…」
嘆息するバレットに、理事長がさらに言葉を紡ぐ。
「それと、夜空さんにも…」
「メルにも来たのか!?」
「まだ確定ではない様ですが、そのつもりの様です。それと、貴方にも」
「俺に？」
首を傾げるバレットに、理事長は頷く。
「何でも、チーフエンジニアになって欲しいと」
「…わかった。じゃあ…辞職の手続き、進める準備しないとな」
「…まだ気が早いですよ」
物騒な事を言い出すバレットに、理事長は苦笑しながらやんわりと告げた。

# 第２８話「始まりは突然、旅立ちは必然」

「…アウト…イン…アウト…」
サーキットを駆け抜ける１台の訓練用ＡＭＧ。
コックピットに座すのはメルだ。
訓練課程も順調に進み、遂に実車訓練も学生自身での運転が始まった。
的確にラインに沿って、基本に忠実な走りでコースを回る。
そして、コントロールラインを通過し…今度は、走り方を少し変えてみる。
「…？」
ピットでメルの走りを見ていたバレットと永遠が首を傾げる。
それ程までに、今のメルの走り方は変わっていた。
そんな２人の様子などつゆ知らず、メルは再びコースを一周してピットへと帰還した。

「…やっぱりタイムはあんまり伸びないか」
マシンを降り、ヘルメットを脱いだたメルが２周目の自身のタイムを見て口を零す。
「教官、どうでしたか？」
「１周目は凄く良かったぞ。かなり上達が感じられた。だが…２周目のあれは何だ？」
２周目のメルの走行。
それは…ベースとなる走行ラインを外れた完全な我流の走りだった。
「…ここに入校する前、何度かオンラインで対戦してた時に結構いたんです。ラインを完全に塞いで来るプレーヤーが」
「…成る程な。だから、ラインに縛られない走り方を身に付けようとした…そういう事か？」
バレットの指摘に、メルは無言で頷く。

「研究も兼ねて色んなカーレースの動画も見ましたけど、プロレーサーの中にも相手のラインを完全に塞ぐ走り方をする人も少なくないみたいでしたし。色んな走り方を覚えて、臨機応変に対応しなきゃって思ったんです」
「良い着眼点だ。だが…ルーキーにはまだ早い」
「あぅ」
　メルの額に中指を弾くバレット。
　額を抑えるメルに、バレットは更に言葉を続ける。
「そういうのは経験を積んで行く内に少しずつ身に付けるものだ。実戦すら経験してない今のお前らには早すぎる」
「うぅ…はい…」
「…だが、こういうのも何れここぞって時に役立つ時もある。ま、若い内は色々挑戦してみるこったな」
「…はい、ありがとうございます」
　バレットにお礼を言って、ピットの奥へと下がるメル。
　次は自分の番か…と永遠が前に出て来た所で、校内放送が流れる。
『生徒の呼び出しをします。小町永遠さん、小町永遠さん。面会の方が来ておられますので、早急に理事長室までお越し下さい。繰り返します。小町永遠さん、面会の方が来ておられますので理事長室まで』
「…」
　訓練中に呼び出し？と首を傾げるメルと永遠。
　そんな２人と対照的にバレットは、遂にこの時が来たか、と嘆息する。
「…永遠、行って来い。今日は早退扱いにしておいてやる」
「？…わかった」

　呼び出しを受けて理事長にやって来た永遠は、扉をノックして在室確認をする。
『小町さんですか？』
「うん」

『どうぞ、お入り下さい』
理事長からの返答を確認し、扉を開けて中に入る。
来客用ソファに、理事長ともう1人…見慣れぬ男がいた。
立派な口髭を生やした壮年の白人男性だ。
「やぁ！君が小町君かね？」
「…貴方は？」
「あぁ、名乗り遅れたね。私はこういう者だ」
そう言って名刺を取り出して来る男。
それを確認する永遠に、理事長が更に言葉を続ける。
「…単刀直入に言います。小町永遠さん。貴女には、このアカデミーを中退して頂きたい」

それから数日後。
「あれ？小町ちゃん、出掛けるの？」
自主トレを終えて部屋に戻ったメルを待ち受けていたのは、荷物を綺麗に整理した永遠だった。
彼女は少し寂しそうな、名残惜しそうな笑みを浮かべて答える。
「…辞める事になったの。アカデミーを」
「っ、何で!?折角頑張って来たのに！」
「あっ、違う。そういう事じゃない」
首を傾げるメルに、少し照れ臭そうに頬を掻きながら説明する永遠。
「…スカウトされたんだ。レーシングチームから」
そう言って1枚の紙を取り出す永遠。
会社名と役職、そして渡し主の名前が書かれている。
…名刺だ。
「【ＴＥＡＭ（チーム）　ＤＩＮＯＣＯ（ダイナコ）】代表取締役、テックス・ダイナコ…もうスカウトなんて来るの？」
「本当に優秀な生徒は卒業なんてしない。その前にチームやメーカー

の方からスカウトが来るから」
「そんな事ってあるの!?」
「うん。本当に稀だけど」
少し嬉しそうに胸を張る永遠。
そうなると、気になる事が1つ。
「プロからスカウト受けられるの、上位9人になるって事?」
「ううん、席が1つ空くだけ」
「あ、そうなんだね…」
それを聞いてほっとするメル。
流石に狭い門が更に狭くなるのは困る。
「…おめでとう。やっぱ凄いね、小町ちゃんは」
「メル…大丈夫?」
称賛の言葉を受けたにも関わらず、永遠の顔は晴れない。
微笑むメルの顔に、寂しげな色が浮かんでいるからだ。
「正直…小町ちゃんが…いなくなるのが…凄く、寂しい…メルの、初めての…友達…だったのに…」
メルの顔から、微笑みが完全に消える。
肩と声が震え出し、目元には涙が浮かび上がる。
「…これから…また、独りぼっちだ…!」
折角の友達の門出を笑顔でお祝いしてあげたいのに。
…何で、涙を抑えられないんだろう。
何で、笑顔を作れないんだろう。
すると、永遠がメルの身体をそっと抱き締める。
「…大丈夫。メルも凄く優秀だから、きっとすぐにスカウトが来る」
「…本当に?」
「うん。まだ確定じゃないと思うけど、理事長が話してるの、ちらっと聞いたから」
メルの頭を撫でつつ、優しく諭す永遠。
「だから…自分を信じて、無理しない範囲で努力を続けて。そうすれば、メルにもきっとチャンスが来る。そして…今度は、サーキットで会おう」

「小町ちゃん…」
「そこで…本気の勝負をしよう。ゲームでも、アカデミーの成績でもない、本当のレースで戦おう！」
それは…未来での再会の約束。
友達としてずっと支え合い、切磋琢磨し、共に笑い合って来たが故の、信頼の言葉。
…だからこそ、自分も応えよう。
「…うん！」
涙を拭い、永遠の言葉に返事をする。
彼女が安心して、前に進める様に。
「…それでこそだよ、メル」
メルの身体を抱く腕を解くと、鞄の中からあるものを取り出す。
「じゃあ…最後にこれ、やろっか」
それは、初めて合った時に遊んだバトルスピリッツのデッキ。
２人の絆を結ぶ切っ掛けとなったカード。
２セットある内の片方をメルに差し出す。
「…うん、やろう！」

「…オラクル二十一柱ⅡＸⅠザ・ワールドでアタック」
「ブロッカーがいない…！ライフで受ける」
最後に残ったライフのコアを、リザーブへ移動させる永遠。
…親友との最後のバトルで、遂にメルが勝利を手にした。
「う～…とうとう負けた…」
「最後の最後でやっと勝てた…！」
悔しがる永遠と、安堵の表情を浮かべるメル。
「…この一勝は餞別。今度戦う時は、絶対負けない」
「うん。メルも負けない」
再戦を誓い、２人は硬い握手を交わす。
「ありがとうございました。いいバトルでした！」

翌日。
永遠を見送った後、メルは改めて自分の居室を見回す。
「…ここ、こんなに広かったんだ」
今まで2人で使っていた部屋。
1人いなくなるだけで、これ程広く感じるとは。
「小町ちゃん…」
いなくなった親友の名を呟くメル。
しかし、それは別れを惜しむ為ではない。
「…サーキットで、待っててね」
彼女が発った舞台へ、自分も行く。
それを永遠に、そして自分自身に誓う為だ。

「…小町さんは、行ってしまいましたか」
「ほんとにあそこの社長は、目ぇ付けるのが早いな…」
そう理事長室で茶を啜りつつ話す理事長とバレット。
因みにバレットは今はレーシングスーツとヘルメットを脱ぎ、黒いスーツを纏った姿だ。
殆どいつもヘルメットの下に隠されていた顔が露になっており、初老の渋いイケおじフェイスがお披露目されている。
因みに何故スーツ姿なのかと言うと、彼らもまた来客を待っている為だ。
…コンコンコン、とノックされる扉。
「来ましたか…どうぞ」
理事長の返事に応える様に扉が開き、1人の男性が入って来る。
「初めまして。日産モータースポーツ部部長の平田哲と申します」
「ようこそおいで下さいました。ささ、おかけになって」
理事長の案内の元、来客用のソファに腰掛ける平田。
出された茶を口に運びながら、話題を切り出す。
「さて、今回の要件についてですが…ご存知の通り、スカウトに来まし

た」
「ほう、それは…因みに、どなたを？」
平田はふーっ…と息を吐き出し、言葉を紡ぎ出す。
「…夜空メルさんです。彼女を、ＴＥＡＭ　ＮＩＳＳＡＮのレーサーとして雇わせて頂きたい」

# 第２９話「旅立ちの前に心残りは無くしておけ」

「…良いか、行けると感じたら一気に抜け」
今メルが受講しているのは、レース戦術の座学。
レースに必要なのは、基礎体力や運転技術だけではない。
前へ行かせまいとブロックして来る他の車を傷付ける事無く、如何にしてより前の順位に出るか…という戦術を導き出す知識も必要不可欠だ。
レースの種類によっては、如何に上手く他の車に道を譲るかというテクニックも必要になって来るのだが…それは今回割愛しよう。
「もしもその瞬間に抜くのが無理だと判断したら…早めに下がってブレーキを踏み、次に備える。これが基本だ…では、今日は以上だ。解散」

『生徒の呼び出しをします。夜空メルさん、面会の方がいらっしゃっているので理事長室まで。繰り返します、夜空メルさん、理事長室までお越し下さい』
日課時限が終わり、居室へ戻ろうとしていた所で呼び出しが掛かる。
そう言えばあの時の永遠も同じだったな、とふと思い出すメル。
――――――まさか…？
胸中に過った憶測を封じ込め、理事長室に歩みを進める。
今はまだ、過度な期待はしない方が良いだろう。

「失礼します、夜空メルです。呼び出しを受けて来ました」
理事長室の扉をノックするメル。
「どうぞ、お入り下さい」
中に入ると、待っていたのは理事長とバレット、そして見知らぬ男性の３人。

「やっと来たか…今回お前に用事があるのは、この人だ」
「夜空メルさんですね、初めまして。私、こういう者です」
そう言って名刺を差し出して来る男。
【日産自動車モータースポーツ部部長　平田哲】…っ！まさか、これって！」
目を見開くメルに、バレットがにやりと微笑む。
「…良かったな、メル。スカウトだ」
「どうでしょう？チーム日産の看板を背負うレーサーとして、我々と一緒に戦って頂けますか？」
そう言って握手の手を差し出して来る平田。
…答えは決まっている。
「…はい、宜しくお願いします！」
「ありがとうございます！」
握手を交わすメルに、バレットが言葉を添える。
「メル、お前のチームに俺もチーフエンジニアとして同行する事になった」
「え？そうなんですか？」
メルの質問に応えるのは理事長だ。
「はい。絶対に人死を出さない様に、安全を保証できる有能なチーフエンジニアも欲しいと」
「で、俺も選ばれたって事だ。宜しく頼むぞ」
「…はい！」

その日の夜。
「…もしもし？シン君？」
『メル先輩？どうかしましたか？』
「うん、実は…アカデミーを辞めて、日本を離れる事になったんだ」
『っ!?何で!?』
「あー、ごめん！そういう事じゃなくて」
『え？じゃあ、どういう…』

「スカウトされたんだ。日産から」
『スカウト!?え、でも卒業まではあと1ヶ月ありますよね？』
「偶にこういう事もあるんだって。凄く成績優秀な生徒は、卒業前にチームから来るみたい」
『そうなんですか!?凄いじゃないですか！おめでとうございます！』
「ありがとう。シン君のお陰だよ」
『そんな事無いですよ！俺なんて、何も大した事してあげられませんでしたし…そこまで至ったのは純粋にメル先輩の努力の賜物ですよ』
「でもレースの世界を教えてくれたのはシン君だもん。だから…ありがとう」
『…どういたしまして』
「来週、日本を出てオーストリアのウィーンに行くんだ。ＦＩＡ―ＧＴ３の世界大会に出るよ」
『そうですか…引き続き連絡下さいね。俺もメル先輩のレースの話、聞きたいですし』
「うん、わかった」
『今ノエル団長いますけど、話しますか？』
「わかった、代わってくれる？」

『メル先輩～？』
「あ、ノエルちゃん？」
『お話、聞いてましたよ～！おめでとうございます！』
「うん、ありがと」
『これでメル先輩もプロレーサーですね！』
「まぁ、厳密に言えばこれから開催されるＧＴ３の世界大会の結果次第なんだけどね…」
『大丈夫ですよ！メル先輩ならできる！』
「ノエルちゃん…」
『卒業前にスカウトされるぐらい頑張った自分を信じて！ふれ、ふれ、メル先輩！頑張れ頑張れメル先輩！ふぁいと～、ふぁいと～、メル先

輩～！』
「あははは…！ありがとう、お陰で気が楽になったよ」
『日本には何時頃帰って来るんですか？』
「今シーズンの最終戦を鈴鹿でやるらしいから、その時には戻って来るよ」
『わかりました～！じゃあ最終戦、観に行きますね～！』
「うん、楽しみにしててね」
『メル先輩も頑張って下さいね～！おやすみなさ～い』
「うん、おやすみ」
通話を終了すると、荷造りに取り掛かるメル。
出発は来週、月曜の朝９時。

出発の日の朝。
職員や理事長に見送られ、メルはＧＴアカデミーを旅立つ。
「…今までご苦労さまでした。ご武運を」
「はい、お世話になりました」
理事長と握手を交わし、職員達の拍手を背中に受けながら、日産の社員が運転する車に乗り込むメルとバレット。
「…やっぱり、寂しいか？」
ふと、助手席に座るバレットが後部座席のメルに尋ねる。
「…正直、結構寂しいです。家族にも、暫く会えなくなっちゃいますし。でも…」
そこで一旦言葉を区切り、ふぅ、と息を吐いて言葉を紡ぐ。
「それと同じぐらい、ワクワクしてるんです。やっと…小町ちゃんと約束した場所に行けるって」
「…そうか」
ＧＴアカデミーを後にし、そのまま車に揺られる事約１時間半。
２人を乗せた車は富士山静岡空港へと辿り着く。
「メル様！」
車を降り、ロビーで手続きを済ませていると、背後から声を掛けら

れる。
　声が聞こえた先にいたのは…
「…ちょこ先生!?」
「良かった、間に合って…!」
　メルに駆け寄り、ぎゅっとハグするちょこ。
　頭に?を浮かべる2人に知り合いだと説明し、少し離れた場所へ移動する。
「…見送りに来てくれたの?」
「ええ。他の皆は用事があるから、代表してね。手紙も預かって来たわ」
　そう言って、メルに4枚の封筒を渡す。
　シン、そら、ノエル、あやみの書いた手紙だ。
「それと…ちょこからも、これ」
　そう言って、五芒星に悪魔の翼が付いた様なデザインの首飾りを掛ける。
「ちょことメル様の絆のシンボル、って所ね。オーダーメイドで作って貰ったの」
「ちょこ先生…」
　再びメルの身体を抱き締めるちょこ。
「…信じてるわ。元気でね」
「…うん…っ!」
　震えた声で告げるちょこに、メルも身体を抱き締め返して答える。
　身体を離すと、メルはちょこの目尻に浮かんだ雫を指で拭ってやり、優しく微笑む。
「…行ってきます!」
「…ええ。行ってらっしゃい!」
　ちょこの視線を背中に受けながら、メルは平田、バレットと共に出発した。
「プライベートジェットは初めてかな?」

「はい、何となく豪勢なんだろうな、ってイメージはありましたけど…その通りですね」
「そうか…」
　プライベートジェットについての感想を語っていると、シャンパンのグラスが3つ乗ったトレーを持った客室乗務員がやって来る。
「シャンパンをお持ちしました」
「やあ、ありがとう」
　受け取ろうとする平田とメルを手で制し、バレットが言う。
「…いや、シャンパンは表彰台に上がった時だけにしよう。何か代わりのものはあるかな？」
「でしたら、スパークリングワインがありますが」
「ではそれを貰うよ」
　去って行く客室乗務員を見送ると、平田が今後の予定について話し始める。
「では、今後の予定について説明するよ。まず君には、これから開催されるＦＩＡ―ＧＴ３の世界大会に参加して貰う。シーズンは全７戦。最終戦の鈴鹿まで、どれか1戦でも良い…４位以上に入る事、それが君に課せられる課題だ」
「４位以上、ですか…」
「そうだ。そうすればＦＩＡライセンスを獲得し、正式に日産と契約する事ができる」
「…わかりました」
　平田の話に静かに頷くと、今度はバレットが話題を振って来る。
「メル…今度の相手は本物のレーサーだ。お前にはそのレベルで戦う強さもスタミナもまだ無いから、徐々に鍛えて行くぞ。まずは最初のレースで、やって行けると証明しろ」
　静かながらも、その言葉には凄まじいプレッシャーが込められている。
「他のドライバーも、ピットクルーも、誰もお前を歓迎してはくれないだろう。マシンについて気になる事があったら、俺に直接言ってくれ。良いな」

「…はい」
だがメルは、そのプレッシャーを全て正面から受け止め、首を縦に振った。
「お待たせしました」
「ありがとう。無理を言って済まなかったな」
そこへ丁度良いタイミングで、乗務員がスパークリングワインを運んで来る。
3人はそれを受け取り、各々のペースで口に運ぶ。
バレットは真っ先にグラスの中身を空にすると、席を立つ。
「…俺はこれから少し寝るよ。飛行機は苦手でな」
「わかった。ゆっくり休むと良い」
バレットが席を移動し、リクライニングを倒して寝息を立て始めるのを見届けると、平田はぽつぽつと語り始める。
「…彼は、一流のレーサーだった。あの世代では、恐らく当代敵う者はいない程のね…だが、辞めたんだ」
「何でです?」
首を傾げるメルに、平田は苦い顔で答える。
「…それは本人に聞いてくれ。私も寝るよ。君もできる限り休んでおいてくれ」
そう言って目を閉じる平田。
メルも2人に倣い、夢の世界へと旅立った。

「ここがウィーンだ、メル。左はシュトラウスの黄金像がある広場で…」
飛行機での長旅を終えた一行は、スタッフの運転する車に乗ってホテルへ向かう。
バレットの案内を聞きながら、初めて訪れた土地をスマホの写真に収めていると、高級感溢れるホテルへ辿り着く。
「チーム日産の者です」
「確認しますね…はい、ようこそお越し下さいました」

チェックインを済ませ、割り当てられた部屋へと向かう。
「2人共、長旅ご苦労だったな」
「メル、ゆっくり休んでおけよ」
「はい、おやすみなさい」
ホテルの外装からも予想できる様に、部屋の中は天蓋付きのベッドやふかふかのソファ、最新型のテレビなど、下手なホテルのスイートルームにも匹敵しそうな部屋が広がっていた。
改めて自分に対して動いている金の大きさに舌を巻く。
「これが…レーサー1人に掛かる期待、って事か…」
シャワーを浴びてから、ルームサービスで頼んだディナーを食べつつ、スマホでSNSをチェックしていると、シンの投稿が目に入った。
『FIA—GT3世界大会の開幕戦、絶対観て下さいね！皆ビックリする様な人が出るんで！』
その内容に、メルはふふっ、と微笑んだ。

オーストリア、シュピールベルク。
開幕戦の地…レッドブル・リンク。
ヘビーブレーキングゾーンとスピードが出るセクションの両方が混在する、難易度の高いコースだ。
ピットには、レースを走るチームがマシンのセッティングに勤しんでおり、その中にメルを含めたチーム日産の姿もあった。
今日行われるのは、翌日の決勝レースの為の予選（タイムアタック）。
コースを一周したタイムがより速かったマシンから、前の順位でスタートできるのだ。
「メル！」
メカニック達と共にマシンの調整をしている最中、背後から聞き慣れた声が聞こえる。
振り向くと、そこに姿を現したのは…
「っ！小町ちゃん！」
GTアカデミーで絆を育んだ親友、小町永遠だった。

彼女もまた、所属チームのタイトルスポンサー…ダイナコ石油のシンボルである恐竜のエンブレムが描かれた水色のレーシングスーツを纏っている。
姿を現した永遠に駆け寄り、ハグを交わす。
随分と久しぶりに感じる友達の温もりに、互いに感慨深いものを感じる。
「元気だった？」
「うん、待たせてごめんね。やっとここまで来たよ…！」
「信じてた。メルならやれるって！」
互いに再会を喜び、抱擁を解く。
堅い握手と共に、自分と相手に宣誓と宣戦布告をする。
「お互い良いレースにしようね、小町ちゃん！」
「…どっちが勝っても、恨みっこ無し！」
遂に、あの時の約束を果たす時が来た。
２人の胸中は、その事実に対する喜びで満ちていた。

# 第３０話「デビューウィンというのは中々上手く飾れるものではない」

決勝レース当日。

「…」

ピット内の待機室で、瞑目して音楽プレーヤーを再生するメルの姿があった。

現在再生しているのは『ＲＡＣＥＲ，Ｓ　ＨＩＧＨ』。

永遠からプレゼントされた『ＣｉＲＣＵｉＴ　ＢＥＡＴＳ　―ＳＵＰＥＲ　ＧＴ　２０ｔｈ　ＡＮＮＩＶＥＲＳＡＲＹ―』に収録されている１曲だ。

闘争心を掻き立てる様な歌詞とアップテンポなロック調のメロディーが特徴で、確かにこれは気合いが入るな、とメルは感想を抱く。

…そんな彼女に後ろから接近する人影が。

「…メル」

ポンと肩を叩きながら声を掛ける男…バレットだ。

慌ててイヤホンを取り、バレットに向き直る。

「時間だ、準備しろ」

「…っ、わかりました」

…遂にこの時が来たか、と意を決するメル。

そんなメルの心境を知ってか知らずか、バレットが更に言葉を紡ぐ。

「…１つ朗報だ。誰もお前に期待してない。だからまぁ、気楽にやって来い」

「…はい」

冗談と真実が良い塩梅で混ざったその言葉は、メルの緊張を明らかに解した。

『あー、あー、聞こえるか？』
「…はい、大丈夫です」
通信用インカムから聞こえるバレットの声に、白を基調としたカラーリングのＧＴ―Ｒのコックピット内に座すメルが返答を送る。
整備を終えたメカニック達がマシンをガレージの外へと押し出し、遂にＧＴ―Ｒ（メル）がサーキットに姿を現す。
ピットロードに出ると、眼の前にはフェラーリ、マクラーレン、ランボルギーニ（ウラカン ＧＴ３ ＥＶＯ２）、ポルシェ（９１１ ＧＴ３Ｒ）、メルセデス（ＡＭＧ ＧＴ３）、ＢＭＷ（Ｍ４ ＧＴ３）、アストンマーティン（ヴァンテージＡＭＲ ＧＴ３ ＥＶＯ ２０２４）、ベントレー（コンチネンタルＧＴ３）、アウディ（Ｒ８ ＬＭＳ ＧＴ３ ＥＶＯ２）、フォード（マスタング ＧＴ３）…ライバルチームのマシンがずらりと立ち並んでいる。
自分に課せられた勝利条件は、この中で上位４台の中に食い込む事。
先日の予選を７番手のタイムで終えた自分は、後３つ順位を上げてゴールしなければならない。
５番手以下の２３台の中に入ってしまえば、敗北だ。
２７台中４位…ハードルは極めて高い。
ステアリングを握るメルの手にも力が入る。
エンジンに火を入れ、ゆっくりとマシンを走らせる。
ピットを出てコースを一周し、スターティンググリッドへ向かう中、バレットから無線が入る。
『今現在、お前にどれ程余裕があるかはわからないが…１つ言っておこう。【ＴＥＡＭ（チーム） ＣＡＰＡ（キャパ）】に気を付けろ。馬鹿みたいに金ピカのヤツだ』
自分の２列前にいるあいつか、と対象を視認するメル。
「…わかりました、忠告ありがとうございます」
返事をする中で、メルはレース開始前に永遠から言われた事を反復していた。
「ＴＥＡＭ ＣＡＰＡ…？」
それは、レース開始前の事。

決勝に向けたマシンのセッティングを行っている最中、チーム日産のピットに現れた永遠が忠告して来た。
「あの２２番のランボルギーニ…ダニエル・キャパ。アイツ、汚い手を使って来るから」
「知ってるの？その…キャパってヤツの事」
メルの問い掛けに永遠は無言で首を縦に振って肯定する。
「ランボルギーニの合同テストで、何度か一緒に走った事があるし、レースでのアイツの走りも動画で見た。はっきり言って…とても褒められたものじゃない」
まるで悍ましいものを見るかの様な眼差しで、けばけばしい黄金のランボルギーニを調整するチームを眺める永遠。
「同じランボルギーニの私は何もされないと思う。でも…ＧＴ―Ｒのメルは近くにいたら間違い無く標的になる。だから、気を付けて」
「…わかった。ありがとう、教えてくれて」

コースを巡り、スターティンググリッドに到着するメル。
自分は前から４列目、７番手からのスタートだ。
そして、前のマシン達がゆっくりと動き出し、フォーメーションラップが開始される。
メルもそれに倣い、アクセルを踏む足にそっと力を込める。
ジグザグに走りながらコースを一周し、じっくりとタイヤに熱を入れて行く。
『良いか、メル。このレースはローリングスタートだ。シグナルがグリーンになったら、アクセルを一気に踏み込め。良いな』
「っ、はい」
ローリングスタート。
簡単に言うなら、一周してタイヤを温めた後、グリッドに整列、停止する事無く一気に走り出すスタートの事だ。
有名なマリオカートの様に整列し、停止した状態からのスタートは【スタンディングスタート】と呼ばれるものであり、Ｆ１等の俗に言う

【フォーミュラカー】のレースがこれに当たる。
「…」
心臓がバクバクと音を立てる。
コックピットの中を張り詰めた空気が満たす中、マシンは順調に進み…遂に最終コーナーを立ちあがって、スタートラインが視認できる距離まで近付いて行く。
そして…緑のシグナルが点灯し、遂にレース開始を告げる鐘が鳴った。
『今だ！青になった!!行けぇッ!!!』
「ッ!!」
鼓膜を打つバレットからの号令。
反射的にアクセルを目一杯踏み込む。
《シグナルグリーン！レース開始です!!》
低く唸っていたエンジンが牙を剥いた獣の様に咆哮を上げると同時に、前にいる車達が一斉に駆け出す。
第1コーナーに入る前にＢＭＷを何とか抜こうとするが、ラインを塞がれて思う様に前に出られない。
接触しない様慎重に、しかし置いて行かれない様懸命にマシンを飛ばす。
「…っ!?」
突如、前にいたポルシェが駒の様に回りながらコースアウトする。
…経験豊富なレーサーであれば、これ幸いとばかりに前へ出るだろう。
しかし、初心者のメルは眼前の事態に動揺し、ペースを落としてしまう。
1台、また1台と、自分の後ろにいた筈のマシン達が続々と前へ進んで行く。
『大丈夫、大丈夫だ！息を整えろ。深呼吸だ！』
――――メル、しっかりしろ！
集中、集中…！
…深呼吸して己を落ち着かせ、前を見据える。

「…行くぞ！」
再びアクセルを吹かし、マシンを前へ進ませる。
順位を後退させてしまった分を取り返す様に、前にいる車を1台ずつ確実に抜いて行く。
『よし、良いぞ！その調子だ！』
その後も順調に周回数を重ねるメル。
6周目に差し掛かった所で…突如、前にいたベントレーのタイヤが白煙を上げた。
《おーっと！39号車のベントレーにトラブル！トラブル発生です！》
「!?」
煙が視界を霞ませ、再びメルの動揺を誘う。
『内側に入れ！大丈夫、トラブルはよくある。普通の事だ！集中しろ』
「っ、すいません！」
無線越しに聞こえたバレットの言葉がメルに冷静さを取り戻させ、再び彼女の意識をレースに引き戻す。
現在、順位は8位。
スタート時と比較して、1つ転落してしまっている。
『メル、焦るなよ。レースはまだ30周あるぞ』
「はい！」
気持ちを切り替え、前を強く見据える。
更にコースを一周して7周目。
第一コーナーに差し掛かると、前でメルセデスとアストンマーティンが激しくバトルしているのが見える。
アカデミーでの座学で学んだ事を心の中で復唱しつつ、慎重にチャンスを伺う。
――――焦るな。
冷静に、スムーズに走れ。
そして…
「行けると思ったら…迷わず行け!!」
競り合う2台のインを突き、シケインで纏めてオーバーテイク。

順位を6番手まで上げた。
《ここで２３０号車が２台纏めてオーバーテイク！何という神業でしょう!!》
『よし！今のはかなり良かったぞ!!』
無線で聞こえるバレットの称賛に、メルも思わず口角が吊り上がる。

更にレースは進み、遂に半分以上を消化する。
現在２０周目。
順位変動は無く、現在は変わらず6番手を走行している。
「バレットさん、燃料はどうですか？」
『…あんまり余裕は無いな。次の周で給油とタイヤ交換をする！』
「わかりました！」
遂に出るピットインの指示。
更にコースを回り、メルはマシンをピットに入れる。
《おっと！ここで夜空メルがピットインします！》
マシンにメカニック達が集い、タイヤ交換と給油を行う。
作業が完了するのを待っていると、窓がノックされる。
何の用かと思ってスライドを開くと、1人のメカニックが口を開いた。
「ジョイスティックの方が簡単か？ハハハハッ」
それは皮肉か？ジョークか？とメルはうんざりした様な顔になる。
そこへ、彼と入れ替わる様にバレットが顔を出す。
「良いか？ここで焦ったら終わりだぞ！ハンドルを切りすぎず、しっかり車を走らせるんだ！」
バレットの言葉が終わる直前でタイヤ交換と給油が完了し、ジャッキが下りてタイヤが地面に触れる。
メルはバレットの言葉にサムズアップで返答し、スライドを閉じるとアクセルを一気に吹かしてピットアウトした。

《夜空メル、ピットアウトします！日産のメカニックは素晴らしい手際でした！》
サーキットに復帰するメル。
ピットインの影響で順位は１３位まで下落してしまっているが、まだ自分以外はピットインの義務を消化していない為、まだまだ勝負はわからない。
「焦ったら終わり…焦ったら終わり…！よし！」
自分に精一杯言い聞かせ、メルは引き続き車を走らせる。

更にレースは進み、残り１０周。
他のマシン達も続々とピットインを済ませ、下落したメルの順位も徐々に元鞘に収まって行く。
そして、全車がピットインを済ませた頃には、メルの順位は５番手まで上がっていた。
――――よし、あと１台だ。
あと１台抜けば…勝利条件は達成できる！
『キャパとの差が縮まった。すぐ前にいるぞ！』
バレットから繋がる無線に、思わず表情が強張る。
永遠とバレットから注意する様勧告されていた危険な相手（チーム・キャパ）…。
そいつが今、目と鼻の先にいる…！
ステアリングを握る手に力が込もる。
第３コーナーでイン側から抜こうとするが、キャパもまたマシンをイン側に寄せ、ラインを完全に塞いで来る。
――――コイツ、ラインを完全に塞ぐタイプのレーサーか！
内心で舌打ちをしながらも、メルは集中力を散らす事無く、丁寧に隙を伺う。
まだチャンスは十分にある。慎重に、慎重に…
４周掛けてゆっくりと様子を伺いながら、確実な隙を伺う。
そして、残り６周。
第４コーナーで…キャパが遂にインを空けた。

――――今だ!!
極限まで高められたメルの集中力は、その隙を逃さず、コーナーの内側にマシンを滑り込ませる。
コーナーを曲がり切ると同時に、メルは完全にキャパの前に出た。
『よし、良いぞ!4位に上がった!!その順位をキープしろ!そうすれば…FIAライセンスが手に入る!!』
「…はい!」
…本当は、1つ前の順位を走る永遠と勝負がしたかった。
だが、今はライセンスの獲得が最優先だ。
――――小町ちゃん、ごめんね。
約束は、また今度ね。
…心の中で謝罪しつつ、メルはマシンを走らせる。

その一方、メルに逆転を許したダニエルの心の中には、暗い炎が宿っていた。
「ふざけんなよ…」
――――何故、俺達を裏切った。
何故、今になって現れた。
何故、ここに現れた。
何故…よりによってお前が俺の前を走ってやがる!?
「許さない…!」
絶対に負けられない。
眼の前のアイツにだけは!
その激情に突き動かされながら、ダニエルはマシンを走らせる。
「弾き飛ばしてやるぞ、裏切り者が!」

『キャパに気を付けろ!外側から来る!汚い手を使うヤツだ、注意しろ!』

残り3周。
徐々にキャパとの差が詰まりつつある。
派手な黄金の車体から伝わる尋常ならざる気迫に、メルの額から冷や汗が流れる。
だが、レースは残り僅か。
ここで動揺したら、それこそ終わりだ。
「絶対に…抜かせない！」
最終コーナーを立ち上がり、ストレートを一気に駆け抜ける2台。
『差は1．2メートル…！1メートル…！』
スリップストリームに入ったマシンは、徐々にその差を縮めて来る。

…次の瞬間、後ろからこつん、と背中をつつかれた様な感触がメルに走った。
それと同時に、GT―Rがコントロールを失い、駒の様に回転しながらコースアウトする。
後ろにいたマシンが次々に自分を追い越して行き、周囲の音が遠ざかる様な感覚に襲われる。
「うっ…くっ！」
ハンドルを右へ、左へと回し、姿勢を立て直そうとするが、暖簾に腕押し。
回転が収まり、マシンの姿勢が安定した頃には、既に後ろに他のマシンの姿は無かった。

「…あばよ」
後ろからメルのGT―Rを突き飛ばしたダニエルは、見下す様な眼差しで一瞥し、マシンをゴールへ向けて走らせる。

「あの野郎…ふざけやがって！」
ピットから一部始終を全て観ていたバレットが、拳を握ってモニターを睨み付ける。

「キャパ…っ！」
前を走っていた永遠が、後ろにいる黄金のマシンに敵愾心を燃やす。

「…」
再びマシンのアクセルを吹かすメル。
「…くっ!!」
湧き上がる感情のままに、ステアリングに拳を叩き付ける。
《夜空メルは２５位に終わりました。要所要所で光る走りを魅せましたが、まだまだ実力不足の様で…》
…この日のレースは、永遠が３位、ダニエルが４位。
メルは完走したマシンの中では最下位の２５位に終わった。

「はぁ…」
レースが終了し、ピットのガレージに戻って来たメルが溜息を吐く。
マシンの扉が開かれ、レース中に自分を誂って来たメカニックが肩を叩く。
「兎に角、完走できたな。無理だと思ったがな、ハハハハ」
…本当に期待されてないんだな、と内心で舌打ちをしながらベルトを外し、マシンを降りる。
ヘルメットを外し、真っ先にバレットと平田に謝罪しに向かう。
「…ごめんなさい、本当に」

泣きそうな顔のメルを慰める様に、平田は優しく諭してくれた。
「初戦にしては上出来だよ。まだ6戦ある、頑張れ」
バレットは、メルに初めてのレースについての完走を尋ねて来る。
「…どうだった？凄い世界だろ」
「はぁ…凄すぎる…」
「これがプロの世界の実力だ。お前には、まだまだ足りてないものが多い。だから…1戦1戦を大事にして、確実に経験を積んで行くんだ。良いな」
「…はい」

しかし、その後もメルは苦戦が続いた。
第2戦、イタリアのモンツァ・サーキットではピットインの際にブレーキパッドの破損が見付かり、リタイア。
第3戦、ブラジルのインテルラゴス・サーキットでは無線トラブルが発生してピットとの連絡が不可能になり、独力で走るも13位でフィニッシュ。
第4戦のアメリカ、セブリング・インターナショナル・レースウェイでは9位。
第5戦スペイン、カタロニア・サーキットでは6位。
第6戦バーレーン王国、バーレーン・インターナショナル・サーキットでは5位と、徐々に上位を狙える様にはなっていくが、ノルマである4位は獲得できないまま…シーズンは最終戦を迎えてしまう。
舞台は日本…鈴鹿サーキット。

# 第31話「シーズン中無勝でも獲ろうと思えばチャンピオンは獲れる事がある」

「…久しぶりに帰って気がするなぁ」
日本…中部国際空港。
数ヶ月間離れていた日本の地に、メルが再び踏み込んだ。
これから、シーズン最終戦が三重県の鈴鹿サーキットで開催される。
これが、ライセンスを手に入れるラストチャンス。
今回はシンとそらが観戦しに来る予定になっており、ますます負けられないという気持ちに拍車が掛かる。

「ダニエル選手!・夜空メル選手をどう思いますか?」
到着ロビーを出た所で、ダニエルがマスコミにインタビューを受けている場面に遭遇する。
ダニエルはこちらの存在を知ってか知らずか、傲岸不遜な態度で答える。
「心配だよ。レースの安全を脅かしてる。他のレーサーに危険が及ばないか心配だね」
「彼女は勝てると思いますか?」
「無理だよ。表彰台には上がれないね…もうこの辺で良いだろう?悪いけど、時間が押しているんだ。失礼するよ」
「ほら、インタビューは終わりだ。下がって」
インタビューを切り上げ、チームリーダーがマスコミを押し退けて空けた道を通り、外に待っていた車に乗ってその場を後にするダニエル。
メルはその様子を透明な表情で眺めていた。
「気にするな。アイツは金持ちってだけ。腕はお前の方が格段に上だ」

「別に、気にしてないです。ただ…」
そこまで言った所でメルは一拍置き、言葉を紡ぐ。
「…ああ来ないと、倒し甲斐が無いですね」
その口元に笑みが浮かぶ。
彼女の笑う顔に何処か底冷えする様なものを感じるが、バレットはそれを努めて隠した。

そして当日の予選。
永遠は3番手、ダニエルは5番手。
そしてメルのタイムは6番手という結果に終わった。
現在は明日の決勝レースに向けて、マシンのセッティング中だ。
「良いぞ、タイムが上がってる。順調なペースで走れる様になって来たな」
「ありがとうございます。それにしても…走ってて楽しいですね、このコース」
「だろう?『神が作った』とまで言われて世界中のレーサーから愛されてるサーキットだからな。俺もここは中々気に入ってる」
「…楽しみですね。明日の決勝」
そう言ってメルは舌舐めずりをする。
彼女の顔に再び浮かぶ笑み。
それはまさに、戦いに快楽を見出す戦闘狂のそれだった。

「結構混んでるね…」
「全くですね」
多くの観客でごった返す鈴鹿サーキット。
メルの応援に駆けつけたシンとそらが、その余りの観客の数に舌を巻いていた。
彼女がレースに参戦するというシンのＳＮＳでの発表が思った以上に反響を呼んでいるらしく、日本ではちょっとしたレースブームが

巻き起こっている。
　辺りには参加チームや大会運営委員会が設置したブースや美味しそうな匂いを漂わせる料理の屋台がずらりと並んでいる。
「メル先輩のピットに顔出しに行きますか？」
「うん、そうしよっか」

「…はい、確認しました。どうぞお通り下さい」
　スタッフにメルから貰ったパスを見せ、ピットへと繋がる入り口を潜り抜けるシンとそら。
　ＴＥＡＭ　ＮＩＳＳＡＮのピットを見付けて中に入り、待機室の扉をノックする。
『どうぞ～』
　返事が来たのを確認し、２人は中に入る。
「…失礼します、メル先輩」
「久しぶり、メルちゃん」
「シン君、そら先輩…！」
　既にレーシングスーツに身を纏っているメルが立ち上がり、駆け寄って来る。
　ずっと会いたいと願っていた顔ぶれに、メルも喜びを隠せない。
　嬉しそうな笑顔を浮かべながら、２人と順番にハグを交わす。
「観に来てくれたんだ…！」
「うん、折角日本でもやるんだから、やっぱり生で観たくて！」
「メル先輩も、元気そうで何よりです。ワールドツアーもずっとテレビで見てましたよ」
　その言葉に、嬉しい様な恥ずかしい様な複雑な気分になるメル。
　自分を信じてずっと見守ってくれていた事を喜ぶ反面、今までの情けない走りを見られていたのかと思うと何となく気まずさも感じてしまう。
　現にこのレースが、ライセンスを手に入れるラストチャンスなのだ。

それを知ってか知らずか、シンがメルの肩に手を置く。
「…メル先輩、信じてますよ」
「頑張ってね、メルちゃん！」
２人からの激励を受け、メルの胸中に熱いものが湧き上がる。
家族でもある恋人と先輩からの信頼か。
それとも、間もなく始まる戦いへの飽くなき欲求か。
或いは、その両方か。
それが定かではないまま、メルは凶暴な笑みを浮かべて答える。
「…ライセンスはゲットするよ。必ず」
そう言い残して控室を後にするメルの背中を見送るシンとそら。
「良かったね。ちょっとずつだけど立ち直って来たみたいで」
安心した様なそらとは対照的に、シンはどこか不安げだ。
「さっきの…メル先輩の笑った顔…」
「顔？」
「何か…怖かったんです。メル先輩が、別人になっちまったみたいで…」
メルが出て行った出入り口の先を見据えながら、シンは心の内を吐露する。
――――メル先輩をレースの世界に行かせた俺の判断は、本当に正しかったのか…？
そんな自分への疑念が、シンの胸中に渦巻いていた。

各車がピットから出てスターティンググリッドに整列し、フォーメーションラップが始まる。
今回のレースは全４０周。
じっくりとタイヤを温めながら、コースを一周してグリッドへと戻って来る。
そして…
《シグナルグリーン！レース開始です!!》

一気にアクセルを踏み込む。
咆哮を上げるエンジンと共に、景色が一気に後方へと流れて行く。
――――この感覚。
ああ…やっぱり、サーキットは良い…！
徐々に経験を積み、確実にレースに慣れて来たメルは既に他の車に対して一々怖気づく事は無くなっていた。
コーナーを必要最低限の減速でするりするりと曲がり、後ろの車に決して前を譲らない。
そして、デグナーカーブを抜けた所で、前方にいるダニエルのランボルギーニを抜こうとした…その時。
「っ!?ぐっっ…!!」
突如、ダニエルが幅寄せをして車体を押し寄せて来た。
コックピットが激しく揺れ、耳障りな音が響く。
車体へのダメージを抑える為、ダニエルと距離を取ろうとした結果…メルはコースアウトし、車体をバリアに擦り付けてしまう。
その隙にダニエルはメルを置いて先に進んでしまい、メルは後ろにいた車3台の先行を許してしまった。
「あいつッ!!」
コースへ戻り、レースに復帰するメルだが、バリアに当たった際にGT―Rの左のサイドミラーがひしゃげ、半ばから折れてしまった。
『メル、マシンは大丈夫か!?』
頭に血が上りかけたメルの耳に入るバレットの無線が、再び冷静さを取り戻させる。
「…左のミラーが壊れましたけど、まだ走れます！」
『そうか。良いか、メル。ライセンスを手に入れられるのはこのレースが最後のチャンスだ。だが、お前ならきっとできる！自分を信じて走り抜け!!』
「…はい!!」
バレットの激励に気合いを入れた返事で応え、深呼吸して激昂した自身の心を落ち着かせる。
「…よし！」

アクセルを踏み込み、一気に加速。
――――絶対に負けない!!
燃え上がる闘志に身を委ねながらも、冷静に、丁寧にメルは車を走らせ続ける。

レースも徐々に周回数を重ね、１４周目。
それに伴って順位も着実に上げて行き、現在は５番手を走行している。
すぐ眼の前で３番手争いをしている永遠とダニエルに狙いを定め、２台の間を通り抜けようとマシンを滑り込ませる。
《ここで小町とキャパの３番手争いに夜空が割って入りました！２台の間の針の穴を通ろうとしています！》
しかし、そうは問屋が卸すまいと言わんばかりに車体に衝撃が走る。
「うっ！くっ……！」
ダニエルが再び幅寄せで車体を擦り付けて来たのだ。
更にマズい事に、自分のすぐ隣を永遠が走っている。
下手に動けば、彼女も巻き込み兼ねない。
『落ち着け、そのラインを外れるな！』
「わかってます！でも両側から挟まれてて…!!」
『なら…お前もやり返せ！』
その言葉を聞いた瞬間、メルの中で何かが弾け飛ぶ。
思考がひんやりと冴え渡り、視界が一気にクリアになる。
…そして、それと同時に、メルは即座に思い立った戦術を行動に移していた。

《おっと!?２３０号車がいきなり減速!!》
スプーンカーブに差し掛かった所で、自分を挟んでいた２台より僅かに早くブレーキング。

「っ、何だ!?」
「!!」
勢い余ってアウトに膨らんでしまう2台。
その一瞬を逃さず、見事に開いたイン側へマシンを潜り込ませる。
そして、コーナーを曲がり終える頃には、2台纏めて抜き去っていた。
「…じゃあね。おつかぷ！」
「あぁ…くそっ!!」
コックピットの中、ステアリングを叩きながら悔しがるダニエル。
その一方で。
「…そう来なくちゃ！」
初めてできた友達と、最高のライバルとして公式の舞台で勝負する悦びに、ヘルメットの中で口の端を吊り上げる永遠。
湧き上がる高揚感のまま、2人はマシンを走らせる。

「…図に乗るな、クビアイドル風情がァ!!」
そして頭に血を上らせるダニエル。
――――――負けられない。
ファン(俺達)を裏切ったこんなヤツに！
「負けてたまるかぁぁぁぁぁぁッッ!!」
明らかなオーバースピードで車を飛ばし、メルと永遠をあっさりと追い抜いた。
「あいつ、何やってるの!?」
「っ！あのバカ!!」
故に、彼は気付けなかった。
…その先に待ち構えていた罠(シケイン)の存在に！
「なっ!?うわぁぁぁぁぁーーーーっっ!!」
慌ててブレーキを踏み、急速にシフトダウンするが、既に時遅し。
シケインを曲がる為に減速していた前のポルシェに激突し、2台は

破片を撒き散らして大破した。
「マズい…！」
破片を踏まない様に、ハンドルを右へ左へと回すメル。
しかし、障害は地面に散らばっているものだけではない。
「っ！うわぁ!!」
飛んで来たタイヤがＧＴ―Ｒのフロントガラスに直撃し、大きな罅を入れた。
クラッシュの影響により、追い越し禁止の合図（イエローフラッグ）が振られる。
「バレットさん！キャパのタイヤが当たりました!!」
『ピットインしろ！丁度イエローフラッグだ!!』
「はい！」
何とかマシンをピットロードに入れ、作業を開始する。
後ろを走っていた永遠も同じくピットインした様だ。
「前は見えるか？」
「見えます、問題ありません！」
「よし！」
給油とタイヤ交換を開始するピットクルー達。
もう少しで完了しようという所で、永遠のランボルギーニが横を通り過ぎて行く。
窓ガラスのチェックに時間を取られ、僅かに時間が掛ってしまい、ピットで逆転を許してしまった様だ。
その直後、此方も給油とタイヤ交換が終わり、ジャッキが下りてＧＴ―Ｒのタイヤが地面に触れる。
『よし、レース再開だ！行け！』
ピットアウトと同時にレース再開の合図（グリーンフラッグ）が振られ、再びマシンを加速させるメル。
順位が８位まで転落しているが、ピットイン義務を済ませたチームの中では現在２番手に付けている。
その後、周回数を重ねる毎に多くのチームがピットイン義務を消化して行き、全てのチームが義務を終えた頃には順位は４位に落ち着いていた。

３位は永遠の青いランボルギーニ。
前との差は1秒も無く、レースも終盤戦へともつれ込む。
「バレットさん、お願いがあるんですけど」
『何だ？言ってみろ』
「…小町ちゃんと、勝負させて下さい」
眼の前の彼女を抜けば表彰台だ。
既に４位以上という目標は達成しているが…それだけで満足できるものではない。
嘗て交わした「今度はサーキットで勝負しよう」という約束。
それを…遂に果たす時が来た。
長い沈黙が流れ…バレットから返答の無線が入る。
『…良いだろう。ただし、無駄なリスクは犯すな。ここで順位を落とせば全て水の泡だ。俺が諦めろと言ったら諦めるんだ、良いな？』
「はい！」
正面を見据え、アクセルを踏み込む。
既に目と鼻の先に永遠の後ろ姿がある。
――――決着を付けよう！
その意思を永遠に伝える為、ヘッドライトをパッシングさせる。
言葉で言っている訳ではないので、自分のメッセージが届いているかどうかはわからない。
だが、そのメッセージが確かに伝わっている事を、彼女のランボルギーニのハザードランプが伝えていた。

『永遠、すぐ後ろにメルのＧＴ―Ｒが来てる！インを開けるな！』
バックモニターに映るＧＴ―Ｒがヘッドライトをパッシングさせるのを、永遠が確認する。
言葉が聞こえる訳ではない。
だが、彼女が何を伝えたいかはよくわかる。
…ハザードランプを点灯させて返事を送り、にやりと笑う。

――――――上等だ。かかって来い！

《さぁ、レースもいよいよ終盤戦に突入という所で、３番手走行中の小町永遠に夜空メルが牙を剥きます！》

残り１０周。

メインストレートの客席で観戦していたシンとそらの眼前を、爆音を上げて疾走する青いランボルギーニ。

そのすぐ後ろをメルの白いＧＴ―Ｒが猛追して行く。

「差が縮まって来た…！」

こいつを抜けば表彰台という事実に、シンとそらの感情が昂る。

第１、第２コーナーに突っ込む２台。

メルがイン側を突いて抜こうとするが、永遠は次に待ち構えるＳ字コーナーを利用して互いのインアウトのポジションを入れ替え、抜かせまいと必死に粘る。

そのまま逆バンクからターン７へと勝負はもつれ込み、再びメルがイン側からマシンをねじ込み、永遠よりも前に出た。

しかし永遠は全く焦る様子を見せず、ＧＴ―Ｒの後ろにぴたりと自分のマシンを付けて慎重に次のチャンスを狙う。

そしてヘアピンカーブ、ブロックし切れないと判断したメルがクロスラインによるカウンターを狙ってマシンをアウト側に振った所で永遠がイン側にマシンを入れ、するりと抜き返す。

クロスラインで抜き返す事に失敗した事を悟った途端、メルの脳内は既に次の策を導き出していた。

スプーンカーブでの勝負は一旦預け、そこを超えた所に待ち構えていたバックストレートで勝負を仕掛ける。

スリップストリームを使って着実に距離を縮め、その先に待ち構えている１３０Ｒを、リスクを承知でやや飛ばし気味のスピードで曲がる事で永遠よりも前に出る。

抜いては抜かれ、抜かれてはまた抜き返す一進一退の勝負に、観客達は完全に魅了されていた。

《何という凄まじい攻防!!これが今シーズンデビューしたばかりのルーキー同士の戦いだというのでしょうか!?》
実況も興奮を隠し切れず、上ずった声で叫ぶ。
「すげぇ…!」
「どっちも頑張れー!」
感嘆の声を漏らすシンと声援を送るそらの眼の前で、2台のマシンが横に並んだまま咆哮を上げて疾走する。
その後、2台は結局3周もの間ずっと鎬を削り続けたが…やがて、その秤が徐々に傾き始めた。

永遠とのバトルを開始してから4周目に突入した頃。
「タイヤがグリップしない…!」
GT―Rのタイヤが摩耗し始め、グリップ性能が衰えて来たのだ。
何度も姿勢を崩しそうになりながらも、それを巧みに抑えながら永遠に喰い付いて行くメル。
何としても勝ちたい…そう思いながらマシンを走らせていた所で、メルに通信が入る。
『メル、勝負はそこまでだ』
「っ、バレットさん!?」
『タイヤがそろそろ限界だろう』
…完全に見破られていた。
彼女と勝負する為に、できるだけバレない様にしようと努めていたのだが。
『お前はよくやった。誰にも文句は言わせん…だが、ここで順位を落としたら全てが水の泡だ!今後もレースで走りたいのなら、小町と勝負したいのなら…悔しいだろうが、この勝負は諦めるんだ』
「…っ、わかりました」
そう答えて、タイヤを保たせる走行法に切り替えるメル。
少しずつ遠ざかる青い永遠のランボルギーニの後ろ姿の背中を見詰めながら、メル

は満足に勝負をしてあげられなかった事を心の中で詫びながらマシンを走らせ続けた。

《小町永遠が完全に前に出ました！3番手争いはこれで決着した様です！》
「あー、ダメだったか～！」
「タイヤが限界っぽかったですからね…堅実に4位取りに行く方に切り替えたみたいだ」
残念そうに肩を落とすそらだが、シンは至って冷静にレースを観察する。
「でも、メル先輩の目標は4位以上で終わる事だから、まだ終わってないですよ」
「そうだね…頑張れ！メルちゃん！」

更にレースは進み、遂にファイナルラップを迎える。
『メル！ファイナルラップだ！何としても持ち堪えろ!!』
「はいッ!!」
既に永遠との差は1周で埋めるのは難しい程開いてしまっており、逆に5番手を走っている車が少しずつ近付いて来ている。
タイヤを労りつつ、できる限りペースを落とさない様に、細心の注意を払いながら走る。
先程まではあっという間だった1周が、酷く長く感じる。
「お願い…保って…！」
そう祈りながらコーナーを1つ1つ確実に曲がり、サーキットを回る。
130Rへと差し掛かり、最終コーナー前のシケインが見えて来る。
あれを曲がればもう一息だ。

シケインを曲がり、最終コーナーを立ち上がり、メインストレートへ帰還し…遂にチェッカーを受けた。
『よくやった！４位だ!!』
インカム越しに聞こえるバレットの声。
メルはふーっ、と深く勢いを吐き…
「よしっ!!」
コックピットの中でガッツポーズをした。
ライバルとの戦いには敗れてしまったが、これでＦＩＡライセンスが手に入る。
これで…レースを続けられるんだ！

レースが終わり、ピットへ帰還するメル。
「ごめんなさい…小町ちゃんに勝てなかった…」
コックピットを降り、ピットクルーに謝るが、彼らは朗らかな笑顔で彼女を出迎える。
「何言ってんだ！４位ってノルマはきっちり達成したじゃないか！」
「これでＦＩＡライセンスゲットだ！おめでとう！」
「よくやったな！ひよっこ！」
口々に称賛の言葉を贈るクルー達。
その中からバレットが姿を現し、メルの頭を撫でる。
「諦める様に指示したのは俺だ、責任を感じる必要は無いぞ。だが…これで本当にプロレーサーの一員だ。よく頑張った！」
「っ、ありがとうございます！」
口を綻ばせるメル。
歓喜のムードに浸る中、近くを永遠が通り過ぎる。
「あ、小町ちゃ…」
声を掛けようとするが、明らかに不機嫌なオーラを纏わせてメルを素通りする。
そして…

「っ！」
「ぐっ！」
　辺りに、渇いた音が響いた。
　自陣のピットから恨めしそうに眺めていたダニエルの頬に、永遠が平手を放ったのだ。
「…何のつもり？」
「何の話だ？」
「惚けないで!!」
　声を荒げて胸ぐらを掴む永遠。
「死ぬ所だった！メルも!!貴方も!!」
「これがレースってもんだ！」
「レースはゲームじゃないし、車はオモチャじゃない!!卑劣な走り方しかできない奴に、ここで走る資格なんか無い!!」
「っ！この七光…言わせておけば!!」
　拳を振り上げるダニエル。
　永遠もそれに応じ、拳を振り上げる。
　２人が同時に拳を放ち…

「小町ちゃん、ダメ！ストップ！」
「いい加減にしろクソガキが！」
　メルが永遠を後ろから羽交い締めにし、バレットがダニエルの拳を掴んで抑える。
「メル！だって、こいつ!!」
「完走すらできなかったヤツなんか気にしちゃダメ！小町ちゃんは表彰台に載ったんだから!!」
「っ…！メルがそう言うなら…」
　拳を下ろす永遠。

ダニエルの方もチームのクルーに宥められながらピットの奥へと姿を消す。
「…おめでとう、小町ちゃん。全然敵わなかった」
「そんな事無い。メルも凄く強くなってる」
握手を交わす2人。
「…今日の勝負、楽しかった。またやろう」
「うん！次はメルが勝つからね！」
「ダメ。次も私が勝つ」
そう言って、2人はふふっ、と楽しそうに笑った。

# 番外編

## 番外編1話「初配信では間違ってもパソコンを叩いてはいけません」

「あ～、あ～、マイクテス、マイクテス…繋がったか？」
『聴こえてるよ～』
『シン・アスカと聞いて』
「はい、皆さん初めまして…って言うべきなのか？俺、そこそこ有名らしいけど…」
『そこそこどころじゃないんだよなぁ…』
『まさか変装した鈴村健一とかじゃないよね？』
「ちげーよ！しっかり本人だよ！…ごほん、取り敢えず…これからホロライブ所属Ｖｔｕｂｅｒとして活動させて頂く事になりました。シン・アスカって言います」
『宜しく～！』
『キラとアスランはおらんのか…』
「キラってキラ・ヤマトですかね？残念ながらいません。アスランはいますけど…裏方やってます」
『タレントじゃないんかい』
「歌が下手でオーディション落ちました」
『草』
『トゥーヘァー叫んだんやろな』
『モウヤメルンダ!!』
『アスランはオモチャじゃないんだぞ！』
「マジでネタにされてるのかよｗ今度いびってやろ」
『蹴られない様にね～』
「え～、まぁ冗談は程々にしてそろそろ自己紹介の方を再開しますね！俺の方からグダグダ語るより皆が聞きたい事に答えてく方が簡単なんで、事前に募集したマシュマロの中から適当に拾って行きます。ではまず1つ目の質問『好きな食べ物は何ですか？』」

『そいや公式でも明言されてなかったよな』
「マジ？じゃあ誰も俺の好物知らないって事ですか？」
『知らん』
『嫌いなものしか明言されてなかったゾ』
『貝と茄子と茸と酸っぱいものだっけ？』
「何で嫌いなもんだけ明言されてんだよ！…因みに好物は母さんが作ったハンバーグですね」
『おぅふ…』
『好物が明言されなかった理由がわかった気がする』
『もう食えんもんなぁ』
『慰めてやる、こっち来いよ…』
「行かねぇよ！…まぁ悲しいですけど、もう無いものは無いって割り切るしか無いんで、できるだけ今あるものに目を向けて行こうと思います。では次の質問『趣味は何ですか？』」
『読書だよね』
『あとツーリングもだっけ？』
「この辺も割りと明かされてるのか…読書とツーリングは勿論ですけど、こっちの世界に来てからは特撮鑑賞とカーレース観戦も増えましたね」
『スズケンやんけ！』
『やっぱり変装した鈴村さんなんじゃ…』
「ちげぇっての！…因みにどっちもこの世界の文化について学ぶ中でハマった感じですね。カーレースはホロライブにレース案件来た時に色々調べて『面白いな』ってなりました」
『ＳＵＰＥＲ　ＧＴか』
『ＧＴは良いゾ～』
『ほぼ毎回何かしらのドラマ起こるもんね』
「２０２０年の最終戦、俺も生で観てみたかったです…では次の質問
『元の世界に帰る気はありますか？』ありません」
『草』
『即答で草』

『負債涙目案件』
『【速報】劇場版、またしても白紙に』
「逆に帰りたいって思える要素あるか？」
『それはそう』
『ただでさえ世紀末なガンダムシリーズの中でもトップクラスで倫理観イカれてるからね』
『実際帰りたいって思えるヤツは相当なドＭ』
「因みに余談だけど俺、アスランに負けて動けなくなった後オーブとクライン派の奴らに集中砲火されて死んだらしいです」
『うげーっ!?』
『ガチィ？』
『マジもんのサイコパスや…』
『やっぱあの世界あかんわ』
『下手したらアニメより酷いやんけ』
「アスランが間に入って庇ってくれたらしいんですけど、敵の数が多過ぎた上に俺との戦いでシールド壊れたせいで何の意味も無かったらしいです」
『マジか、アスラン…』
『アスラン、ヅラとか言ってごめんよ…』
『ってかシールド壊れたん？』
「アニメだと途中から俺一方的にやられてましたけど、こっちではジャスティスの頭とライフル、あとシールド壊してやりました」
『結構渡り合ったんやな』
『高山版要素強めなのね、嫌いじゃないわ！』
『京水さんはお帰り下さい』
『克己さんこっちです』
「まぁそう言った諸々の事情抜きにしても、死んだ筈の人間が平気でノコノコ戻って行ったりしたら大混乱間違い無しなんで、どのみち帰ろうにも帰れない訳です。では次の質問『尊敬しているホロメンの先輩はいますか？』」
『誰？』

「う～ん、一概には決められないですね…皆それぞれ凄いなって思える個性がありますし…でもやっぱり、ホロライブ第一人者のそら先輩ですかね」
『そらちゃんは外せんよね』
『そらちゃんはアイドル、残りは芸人』
「違うだろ！皆ちゃんとアイドルしてるだろ！ライブの時は!!」
『ライブの時は…？』
『という事はそれ以外の時は…？』
「良いんだよ余計な事は言わなくて！…あとちょこ先生も個人的に世話になったんで尊敬してます」
『ちょこ先？』
『ラッキースケベでもした？』
「ちげーよ！こっちの世界での生活に馴染めなくてメンタルやられてた時に色々相談に乗って貰ったりしただけだっての!!」
『納得』
『保険医ってそういう事に関しては専門的やからな』
『シン及びC・Eに足りなかったの、ホロライブ説』
「俺としてはあんな地獄に先輩達を連れて行くなんてゴメンなんですけどね」
『遺伝子弄ってるかそうじゃないかだけで殺し合ってるもんね』
『そもそも人間ですらない娘も多いホロライブが行ったらどうなる事か』
「…考えたくもないな」
『耳の形が違うわ！』
「名迷台詞をアレンジするな！」
『あの台詞狂気に満ちてて逆に好き』
『わかる』
『それな』
「わかるなよ！好きになるなよ！…まぁ皆尊敬してるって事で、そろそろ最後の質問いきます『どういうゲームを配信したいですか？』」
『やっぱり仮面ライダー系か？』

『連ザⅡやって』
「何で自分が出てるゲームやってる所配信しなきゃいけないんだよ！拷問か！…まぁやっぱり特撮好きなんで仮面ライダー系が良いかな、とは思ってます。他は先輩達がやってて面白そうなのあったらやってみようかな、って感じですね」
『モンハンええで』
『ホグワーツレガシー』
『ＬＩＶＥ　Ａ　ＬＩＶＥやって』
「モンハンとホグワーツは割と王道だよな…俺何処の寮に組分けされるんだろうな？スリザリンか？」
『いやグリフィンドールやろ』
『シン君は良くも悪くもグリフィンドールよな』
『ヅラこそスリザリンな気がする、コロコロ裏切るし』
『声も若い頃のお辞儀様だしな』
『ヅラじゃない桂だ』←アスラン
「桂でもないだろ！ってか何で見てんだよ仕事しろ！」
『草』
『見に来んの草』
「え～、とんだ邪魔が入りましたが一先ずこれで自己紹介は終わりたいと思います。まだまだ未熟者ですけど、これから宜しくお願いします！お疲れ様でした！」
『乙』
『乙～！』
今回の同接…５６４２
チャンネル登録者数…１７万

# 明けぬ夜

「…」

星空が広がる夜の街を、一匹の蝙蝠が飛んでいた。

まるで片翼をもぎ取られたかの様に不様な軌跡を描きながら、延々と飛び続ける。

――――――これで良い。

もう、自分に皆の傍にいる資格は無い。

大好きな皆を傷付けない為には、これが最善の選択だ。

もう二度と会えないとしても。

…そう自分に言い聞かせて、蝙蝠は必死に空を飛ぶ。

…その身体が、急に何かに掴まれた。

「!?」

視界に入ったのは、黒いクワガタ虫の様なメカ。

自分の身体を挟み込むと、クワガタは凄まじい速さでUターンする。

足掻いても足掻いても、クワガタは離してくれない。

無理矢理連行される事数分、蝙蝠は自分の家…否、【家だった場所】へと連れ戻される。

扉の前で立っていたのは…

「…何やってんですか、あんたは」

自分の最愛(シン・アスカ)の恋人。

クワガタは地面に着地すると、捕まえて来た蝙蝠の拘束を解き、携帯電話の形に変形してシンの手に戻る。

「…いつまでその姿でいるんです?」

冷たい眼差しと共に突き付けられる言葉。

蝙蝠の身体が光に包まれ…本来の【夜空メル】の姿に変わる。

…彼女は今回、情報漏洩をしてしまい、ホロライブを退所する事となった。
単なるうっかりによるミスではあったが、やってしまった事がやってしまった事であった為に、処分を下さない訳にもいかなかった。
事務所側は飽くまで謹慎、活動停止という形に留めようとしたものの、メル自身が最も厳しい契約解除を申し出た。
だが話が平行線になり、彼女は事務所の皆が自分の事を忘れる様に暗示を掛けて姿を消した。
…シンの手によってすぐに拘束、連れ戻されてしまったが。
「あはは、バレちゃったか…ちゃんと忘れる様に暗示は掛けた筈なんだけどなぁ…」
「じゃあこれ置いてくのは失策でしたね。お陰ですぐ解けましたよ」
そう言ってシンが見せたのは、黄色いトパーズがはめ込まれた指輪。
恋人同士になった日に購入した、メルとのペアリング。
「…何で連れ戻したか、わかりますか？」
「…1発殴らないと気が済まない、とか？」
「…ッ、どんだけ馬鹿なんだ!!あんたはッ!!!」
血を吐く様な叫びと共に、メルに掴み掛かる。
「何も相談もせずに出て行って!!それでやらかした事が無くなるとでも思ってんのか!!?都合悪い事、全部無かった事にして!!俺の事がそんなに信用できないってのか!!!?」
「でも…メルがいたって、シン君が！皆が傷付くだけだよ!!だから、もう…迷惑掛けない様に、って…!!」
「ふざけんな!!俺からすれば…こんな風に裏切られる事の方がよっぽど苦しいんだよ!!地獄なんだよッ!!!」
故郷に裏切られ、上司に裏切られ、信じていた理想にすら裏切られて。
誰かに裏切られる痛みはこの世の誰よりも理解しているという自負はある。
だからこそ…あいつらと同じ事をした今の彼女が許せない。

「…メル先輩達と付き合い始めた時、自分に誓ったんですよ。どんな苦労をしても、何があっても…絶対に護るって！迷惑掛けたから何だよ!!そんなもん、纏めて背負ってやる!!」
感情のままに吐き出し続ける。
喉が焼け付く様な痛みを訴えるが、知った事か。
「約束する!!メル先輩が背負ってるものは、抱えてる痛みは…俺も一緒に背負ってやりますから!!だから…だから…！
勝手にいなくなるな!!馬鹿野郎ッ!!」
「…」

「…君の負け、だな。こうなったらシンは意地でも曲げないぞ」
扉が開き、シンの後ろからアスランが姿を現す。
「契約解除の話は承諾する。だからせめて…普通の家族として、恋人としてシンを支えてやってくれ。コイツには君が必要だ」
「シン君…メルも…一緒に、いて…良いの…？」
「寧ろ一緒にいてくれなきゃ困りますよ」
「迷惑…いっぱい、掛けた…のに…」
「アスランに掛けられた迷惑に比べれば屁でもないですから」
「…何で…ここ、まで…して…くれる…の…？」
「彼氏が彼女助けるのに、理由なんかいらないでしょ？」
そう言って、シンはメルの身体をそっと抱きしめる。
彼の優しい強さと温もりに包まれた結果、メルの中で蓋をしていた感情が一気に溢れ出る。
「う…うぅ…あああああ…！」
メルは人目も憚らずに声を上げ、子供の様に泣いた。
「…大丈夫。俺がずっと、味方ですから」

夜空メルさん、今までありがとうございました。
疲れた斬月より